



“まちライブラリー”を活用した地域の間づくりに
関する研究：
「個」の活動が活かされる社会への道程

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-06-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 磯井, 純充 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00016913

大阪府立大学博士学位論文

“まちライブラリー”を活用した地域の場づくりに関する研究
～「個」の活動が活かされる社会への道程～

磯井 純充

2020年3月

目次

序章 本研究を始めるに至った動機	1
第1章 本研究の背景、目的、構成	5
1-1 研究の背景	5
1-2 研究の目的	8
1-3 本論文の構成	9
第2章 先行研究の整理と本研究での取組み	12
2-1 先行研究領域の整理	12
2-2 社会基盤づくりからの考察	13
2-2-1 近代都市計画と課題	13
2-2-2 日本におけるまちづくりの制度と手法	14
2-2-3 ジェイコブズと近代都市計画批判	15
2-2-4 宇沢弘文の「社会的共通資本」の視点	18
2-2-5 社会基盤づくりに関する小括	20
2-3 社会制度から見た「図書館」の役割	21
2-3-1 公共図書館の新しい役割	21
2-3-2 私立図書館の先導	27
2-3-3 マイクロ・ライブラリーの定義と先行研究	28
2-3-4 社会制度から見た「図書館」の小括	30
2-4 コミュニティ形成と場づくりの視点	31
2-4-1 場づくり論と地域コミュニティ	31
2-4-2 居場所について	32
2-4-3 サードプレイスについて	38
2-4-4 プレイスメイキングについて	41
2-4-5 コミュニティ形成と場づくりの小括	42
2-5 本研究の取組み	43
2-5-1 先行研究における本研究の位置づけと検証の枠組み	43

2-5-2	本研究における場づくりの定義	44
2-5-3	まちライブラリーの定義	45
2-5-4	まちライブラリーの仕組み	46
2-5-5	本研究の方法	48
第3章	まちライブラリーの概括とアンケート結果	49
3-1	まちライブラリーの沿革と全体概況	49
3-1-1	活動の沿革	49
3-1-2	まちライブラリーの全体概況	53
3-2	まちライブラリーの事例	58
3-2-1	公共的な場に設置された事例	58
3-2-2	私的な場に設置された事例	60
3-2-3	筆者が運営に関与している事例一覧	64
3-3	まちライブラリー運営者に対するアンケート結果と考察	65
3-3-1	アンケートの方法	65
3-3-2	アンケートの結果	65
3-3-3	運営者アンケートのまとめ	71
3-4	まちライブラリー利用者に対するアンケート結果と考察	72
3-4-1	アンケートの方法	72
3-4-2	アンケートの結果	82
3-4-3	利用者アンケートのまとめ	92
3-5	まちライブラリーの概括とアンケート結果の小括と考察	93
第4章	まちライブラリー関係者の観察	98
4-1	観察対象と手法	98
4-2	まちライブラリー活動の変遷と筆者の省察	100
4-2-1	まちライブラリー活動成立までの変遷	100
4-2-2	当時の記録と筆者の省察	101
4-3	大阪府中央区のまちライブラリー検証	105
4-3-1	地区の概況と当該地選択の事由	105

4-3-2	大阪市中央区のまちライブラリー概況	105
4-3-3	IS まちライブラリーの概況と関係者のヒアリング	108
4-3-4	大阪市中央区の他のまちライブラリー運営者のヒアリング	114
4-3-5	大阪市中央区の人的ネットワークから見た広がり	117
4-3-6	大阪市中央区のまちライブラリー小考察	119
4-4	地区で連坦して広がっているまちライブラリー	120
4-4-1	全国の事例	120
4-4-2	行政、図書館など組織が主導しながら取り組んでいる事例	122
4-4-3	個人が主導しながら取り組んでいる事例	136
4-4-4	地区で連坦して広がっているまちライブラリー小考察	143
4-5	個人が単独で運営している事例	145
4-5-1	運営を継続している事例	145
4-5-2	運営を停止した事例	152
4-6	利用者、ボランティア、スタッフの観察	155
4-6-1	利用者の観察	155
4-6-2	ボランティアの観察	157
4-6-3	スタッフの観察	159
4-7	関係者観察全体に関する小括と考察	161
第5章	まちライブラリーを活用した地域場の場づくり	164
5-1	まちライブラリーの場づくりに関する整理と考察	164
5-1-1	まちライブラリーの場づくりにおける本の役割	164
5-1-2	まちライブラリーの場づくりにおける運営者の役割	168
5-1-3	まちライブラリーの場づくりにおける利用者等の役割	171
5-1-4	まちライブラリーの場づくりに関する小括と考察	173
5-2	まちライブラリーを活用した場づくりの特色	175
第6章	結語	176
6-1	本研究を通してのまとめ	176
6-2	個人の活動が活かされやすい地域社会形成への提言	180

6-3 残された課題と今後の展望 183

参考文献 185

謝辞 191

序章 本研究を始めるに至った動機

本研究は、まちライブラリーという私的な図書館活動を活用して、地域の場づくりが可能かどうかを検証し、その可能性と課題を明らかにするものである。その検証の過程を通して、個々の人たちの私的な活動の積み上げが、社会形成においてどのような役割を担っているのかを論述する。現代社会では、公的な制度や巨大な資本、組織がなければ生き残れないのだと信じられがちであるが、むしろ個々人の活動の積み上げがなければ、健全な社会はできないと感じていたからである。それには筆者自身の体験が影響しているため、その一端を紹介し、本研究に取り組む動機を整理したい。

筆者は、学生時代に東京の二子玉川地区で「ラブリバー多摩川を愛する会」という川の美化を図るボランティア活動に携わっていた。1970年代、東京の水源の一つである多摩川は、異臭と汚染に悩まされていた。このような状況に対してラジオ局に勤める西尾安裕が立ち上げた当活動を、地元商店街や自治会、当該地区での商業活動をしていた企業、自治体、そして多くの一般市民が応援するようになったのである。西尾は、『ラブリバー運動の軌跡 1973-2016』（2016）の中で1972年当時を「益々深刻化する公害や環境破壊を見過ごすことができなくなり、『何か行動を起こさなければ！』という思いが日々強くなりましたが、ひとりの力では何もできない現実に無力さを感じていました」と述懐している。しかし、その後、家族旅行の車中、1歳になる娘を膝に抱き「私に地球規模の公害や環境問題に対しては無力であっても身近にある多摩川なら、個人の力でもできることがあるかもしれないと、気づかせてくれました」と言い、自身が所属するラジオ局内で説得をくりかえし、「ラブリバーキャンペーン」をスタートさせたのである。その活動が、徐々に地域全体の活動となり花火大会や灯籠流しなどのイベントと河原の清掃をする活動に数千、数万という人々を巻き込むことになった。個人的な活動が、多くの人を巻き込んでいけるのだということを学んだ体験であった。

その後、筆者は再開発事業を柱にする森ビル株式会社へ入社することになる。当時、森ビルでは赤坂・六本木地区（現在のアークヒルズ）の第一種市街地再開発事業に取り組んでいたが地元の反対もあり、停滞した状況にあった。社員

を地元の空き家に住ませ、お祭りや習字教室など社員自らが地元の人と仲良くなるきっかけを作りながら粘り強く反対派の人たちとも交渉をし、最後に5.6ヘクタールの敷地に超高層オフィス、ホテル、住宅、テレビ局、文化施設（サントリーホール）で構成された市街地再開発事業を完成させたのである。1967年に最初のタネ地（再開発の柱にする土地）の購入があり、完成する1986年まで17年の歳月がかけられた。筆者自身も1986年に六本木6丁目再開発事業（現在の六本木ヒルズ）の立ち上げに携わり、地元交渉の担当となった。一軒一軒訪問しながら地元の方の意見を聞き、再開発事業への理解と協力を促していった。アークヒルズ同様、六本木6丁目第一種市街地再開発事業も17年の歳月をかけ「六本木ヒルズ」として完成する。地域コミュニティにおけるコミュニケーションの醸成は、地域社会変革の鍵になりうることを体験的に学んだのである。

また筆者は、森ビルの創業者、森泰吉郎の社会人教育活動に携わる。森は、54歳まで横浜市立大学商学部長として教育、研究に従事したが、その後、実家の米屋が貸し付けていた土地・建物をまとめて第1号のビルをつくり、森ビルの礎を作っていた。前述のアークヒルズが完成するころに森は、「アーク都市塾」¹という人材育成を目指した私塾を創設した。従来の高等教育が専門分野に分かれ総合的な視野を失っている状況を憂慮し、各専門分野にまたがる知見の融合こそが大事であると考えてのことである。大学を創設する夢もあったが当時の大学設置規制により断念せざるを得ず、文部科学省の規制の外にある私塾でのスタートとなったのである。

しかしながらその規制のない自由な教育活動が、多様な発展を生むことになった。アーク都市塾は、都市の未来を作る人材育成を柱にし、都市計画の専門家はもとより、ファッション教育の第一人者や先端技術、哲学、芸術の専門家も講師陣に加わり、自由なプログラムの中で実践的な活動がなされた。このようなユニークな教育活動は20世紀初頭に誕生した「ニュースクール・フォア・ソーシャル・リサーチ」²にも見られ、時代の変化に柔軟に対応した教育機関が、その時代に求められる人材育成を担っていったのである。

森の逝去後、「アーク都市塾」を柱として慶應義塾大学や早稲田大学、東京大学が利用する「アーク・アカデミーヒルズ」³という都心型サテライトキャン

パスが誕生する。工業（場）等立地制限法⁴も存続していたが、大学の新增設ではないという解釈で都心に高等教育と産官学連携ができる環境が生まれた。その後、当該法律の廃止によって都市部にある大学の新增設が行われ、またサテライトキャンパスが多く誕生することになるが、そのきっかけになったともいえる。規制や制度の外に新しい活動が生まれ、社会的ニーズや変革の鍵になることを示している。

アカデミーヒルズはその後、六本木ヒルズ森タワーの最上層に設置された文化ゾーンの一翼を担う「六本木アカデミーヒルズ」⁵へと発展する。六本木アカデミーヒルズは、当該ビルの1フロア（専有面積約4,500 m²）を占める巨大な規模ゆえ、業務遂行の仕方を本質的に変容させていく。日々多くの人を迎え入れるために、ICT技術の導入や人材のアウトソーシングなどシステム的で効率を追求した運営となった。こうした巨大化とシステム化が、スタッフや利用者との人間関係を希薄にし、お互いの顔が見えない状態を常態化させていった。その結果、効率を求める業務の中で、手間暇がかかりスタッフを多く投入せざるを得ない教育活動である「アーク都市塾」は閉塾したのである。この経験が、本研究の直接的な動機となっていく。つまり社会の巨大化によるシステム的対応が人間関係の希薄化や個々人の役割の喪失感を生む中で、人はいったいどのようなにしてそれに対処し得るのかということに関心を持ったのである。

以上より、筆者の問題意識は次の3点に要約される。1つ目は、身近な課題へ挑戦する個人の行動が結果として社会を巻き込んでいくことがあり、それには地域住民や企業など関係者との平等な関係性構築が大切なのではないかということ、2つ目は、新たな活動は規制や規則のない小規模で柔軟な環境からこそ生まれるのではないかということ、3つ目は、活動が巨大化、効率化していくと人間関係の希薄化のみならず、活動の本質的な意義も見失いやすくなるのではないかということである。理念やビジョンを共有するためには、人と人がお互い分かり合えることが大切である。これら筆者の実体験をもとに、グローバル化していく社会において、大規模な組織や資本、公的な制度などに依存しなくても個々の人が、自らの個性を活かし、生き生きと活動できる社会を生み出すことはできないのだろうかという思いが、本研究を始める動機である。

-
- 1 森泰吉郎により考案され、教育関係者の協力で1988年に開設された。伊藤滋（東京大学：都市工学）、石井威望（東京大学：システム工学）、小池千枝（文化服装学院大学：ファッション）、月尾嘉男（名古屋大学のち、東京大学：マルチメディア）、戸沼幸市（早稲田大学：まちづくり）、菊竹清訓（建築家）などが参画した。都市を多面的にみられる次世代リーダーの実践的な教育を目指した私塾であった。
 - 2 ニュースクール・フォア・ソーシャル・リサーチ（以下、ニュースクール）は、1919年ニューヨーク市に設立された、既存の大学とは違った異色の教育組織である（その後、大学となる）。ジャーナリズム、地方行政、労働団体さらには社会科学研究組織に加わろうとする市民的意欲があれば、誰でも自由に参加できる学校であった。創立に携わったのはコロンビア大学教授で哲学者のジョン・デューイ（John Dewey）をはじめ同大学の看板教授3名とジャーナリストとして活躍していた人たちである。1931年に完成したニュースクールの新校舎では、ジョン・メイナード・ケインズが最初の講演をした。講師には、アメリカにきたハンナ・アーレントやユルゲン・ハーバマスも加わり、経済学者のソースティン・ベブレンも教鞭をとっていた。ニュースクールが、知的な教育拠点として新たな境地を切り開いていたことがうかがえる。以上、紀平英作（2017）を参照。
 - 3 アーク・アカデミーヒルズは、アークヒルズ（東京都港区赤坂・六本木地区）にあるオフィスビル、アーク森ビルの36階に1996年に設置された、森ビルが提供した文化教育のための施設である。森ビルが主宰するアーク都市塾をはじめ慶應義塾大学、大正大学、早稲田大学、東京大学先端科学技術センターの一部講義や社会人を対象としたプログラム、産学連携プログラムなども当該地で実施された。
 - 4 工業（場）等制限法は、「首都圏の既成市街地における工業等の制限に関する法律」（1959年制定）と、「近畿圏の既成都市区域における工場等の制限に関する法律」（1964年制定）の2つを「工業（場）等制限法」と総称している。この法律の目的は、都市部に制限区域を設け、その制限区域内に人口・産業の過度の集中を防ぐことであった。その区域での一定面積以上の工場（1000㎡以上）、大学の新設・増設（1,500㎡以上）などを制限していた。共に2002年7月に廃止される。
 - 5 六本木ヒルズ森タワーの49階に2003年に開設された文化施設で、同ビル49階から53階に展開する森美術館、東京シティビュー（展望台）、六本木ヒルズクラブなどで構成される六本木ヒルズアーツセンターの一部である。六本木アカデミーヒルズは、カンファレンス施設、会員制図書館、教育プログラム等を提供している。

第1章 本研究の背景、目的、構成

1-1 研究の背景

社会が複雑化し、グローバル化する中では、巨大な資本や組織が地球規模で活動し、我々の生活の中にその存在感を増している。GAF¹と呼ばれる米国を中心とした巨大 IT 産業は、多くの生活者²にとっても身近な存在になり、それら企業のサービスがなくなれば市民生活に大きな影響を与えることは容易に想像できるようになってきた。日本社会でも多くの企業が、国際競争力強化こそが生き残りの道と信じ、ICT 技術に裏打ちされた効率的な経営システムを目指し、柔軟な経営のために人員調整が容易な非正規雇用などに依存するようになってきている。このような中で多くの方は、個性的で人間的な活動より、数値化が可能な評価基準に基づいて行動することが大事であると思い、自らの存在価値すら過少に評価しがちである。人々はグローバル化の中で巨大な資本や組織の裏付けがなければ何事も成し遂げられないと感じているのではなかろうか。

グローバル化は、都市づくりや地域づくりにも大きな影響を与えている。都市の成長戦略が国家の戦略上大事であるという認識のもと国家戦略特区を定め、大胆な規制緩和による都市再生が進行している。これらの国家戦略特区では、金融、医療、観光、教育など多岐にわたる分野において大胆な規制緩和を実施し、高度外国人材の受け入れなど、従来のまちづくりにはなかった視点が入り入れられている。グローバル社会での覇者を目指した都市開発が進みつつあるといえる。

一方、戦後復興から高度成長の柱となった全国総合開発計画（全総計画）は、2008 年、国土形成計画に移行した。従来の開発至上主義ではなく、本格的な人口減少を見据え、地域の個性を活かし、技術革新を柱とした経済成長を支える

¹ GAF¹ は、Google、Amazon、Facebook、Apple の頭文字を取ったものである。グローバルに急成長し、世界的に影響のある企業として、Google の元 CEO だったエリック・シュミット達によって呼称されるようになった。

² 本論文で「生活者」として表現している場合は、「市民」「住民」という概念を含むこととしたい。「市民」は、政治的な意味合いを含意する場合もあるが、本論文では政治的な意味を含まない。また「住民」と表現している場合は、その前後の調査等で表現されている場合はそれに従うが、地域に住まない人でその地域を生活圏としている人もいるということでより広く、中立的な立場で「生活者」を使うことを基準にする。ただし、一般的には、「市民」「住民」と表現する場合も多く、本論文の中ではそれぞれに特別な意味の違いがないものとする。

国土計画を謳っている。そのためにブロック別で広域な自治体との連携を目指し、外国人来訪者、定住者を取り込んだ地域振興や、地震等の災害から安心・安全に暮らせるまちづくり、地球規模の環境対策を視野に入れたビジョンづくりなどを進めようとしている。高度成長時代から低成長、定常社会へと時代の変化に対応するためでもある。

このような国の政策に対して一般市民はどのように反応しているのだろうか。内閣府による『国土形成計画に関する世論調査』³（2015）では高齢者の増加や空き家への不安はあり、これら地域の身近な課題を住民主体で解決すべきであるとの意識は高い。地域課題に対する自助、共助、公助という3つの考え方で最も重視する方法について聞いたところ、「地域における住民の生活は、個人が自立して営んでいくべき（自助）」と答えた者の割合が16.3%、「地域における住民の生活は、住民が互いに協力しあって営んでいくべき（共助）」と答えた者の割合が44.9%、「地域における住民の生活は、行政が中心となって支えるべき（公助）」と答えた者の割合が33.4%となっている。また地域づくりの担い手についても「住民自身をもっと当事者意識を持って取り組むべき」を挙げた者の割合が58.1%と最も高く、以下、「地域づくりは行政が中心となって行うべき」（32.7%）、「企業OBなど、経営・管理などのスキルを持った地域の専門人材の参加を促すべき」（25.0%）、「NPOや企業、金融機関、教育機関など地域の様々な主体の参加を促すべき」（22.0%）などの順となっている。意外にも都市規模別に見ると、大都市で「住民自身をもっと当事者意識を持って取り組むべき」が65.7%と高くなっている。

しかし、こうした意識と実態には開きがあることは自明である。市民が主体になるまちづくりを進めようと、国や自治体などは長年にわたり市民参加型まちづくりの旗を振り、推進してきた。しかしながら現実には行政、企業と特定の専門家や一部のNPO等が参加するものになりがちで、まちづくりを担う人材や母体への課題が常に議論されながら、住民の主体的な参加意識の欠如は顕著で

³ 内閣府『国土形成計画に関する世論調査』（2015）
<https://survey.gov-online.go.jp/h27/h27-kokudo/index.html>
（2019年8月26日参照）

ある。国土交通省が出している『参加型まちづくりに関する現状と課題』⁴(2003)でも、まちづくりを担う人材や母体への課題が常に議論され、推進する人材が重要であるにもかかわらず人材が少なく、自律的に市民主導でまちづくりが推進される地域が少ないとある。

専門性と長期にわたる取り組みを必要とする規模のまちづくりは難しいとしても、自ら住み、生活する地域社会に対する生活者の意識はどのようなものであろうか。内閣府の『社会意識による世論調査』⁵(2019)によると社会貢献をしたいという人の割合が63.6%に達している。この数値は、過去50年の経過を見ると徐々に上がってきており2009年には69.3%となり、おおむね60%を超える水準で推移している。意識の上では社会貢献したいと考えている人が多数だといえるだろう。ただ実際に活動をしているとの回答は、「社会福祉に関する活動」37.9%、「町内会などの地域活動」31.0%、「自然・環境保護に関する活動」28.8%となり、その割合は大きく低下している。実際に何かをやろうとすると貢献できるテーマや窓口が限られていること、また日常生活への負荷から何かをやりたいという気持ちと自分だけで何ができるのかという葛藤が生まれていることが推測できる。

このように地域社会の中で個々の人は役割を求めているが、同時に簡便には社会参画の術を持たないといえる。こうした社会的状況を踏まえ、個人が気軽に始められ、自己実現、自己充足につながり、なおかつ結果として豊かな地域社会の基盤形成につながる道を探求したいと考えたのが本研究に取り組む背景である。

⁴ 国土交通省『参加型まちづくりに関する現状と課題』(2003)
<https://survey.gov-online.go.jp/h27/h27-kokudo/index.html>
(2019年8月26日参照)

⁵ 内閣府『社会意識による世論調査』(2019年2月調査)
<https://survey.gov-online.go.jp/h30/h30-shakai/index.html>
(2019年8月26日参照)

1-2 研究の目的

1-1 で見てきたように社会が複雑化、グローバル化する中で個々の人は、自ら社会貢献しうる役割を見出そうとしているもののその糸口を十分には見いだせない状況となっており、その結果、閉塞感や喪失感を持ちがちである。本論は、そのような個々の人に着目し、容易に始められる活動手法としてまちライブラリーを考案し、それを活用して地域の間づくりに活かしていく実践的な研究である。

まちライブラリーは、地域の人がおのおの本を持ち寄り、それを共通の本棚に置いて、その場所や本を利用しあうことにより人とつながることを目途としたマイクロ・ライブラリーである。マイクロ・ライブラリーならびにまちライブラリーについては第2章2-5ならびに第3章にて詳述するが、本研究の目的は、以下の3点である。

第1にまちライブラリーの運営者、利用者の実態を把握し、まちライブラリーが公的な制度に依存しない形で、自生的に広がる間づくりとなりえるかどうかを検証する。第2に、現代社会の中で個々の人間が、間づくりに参画しうる環境や関係性を調査し、その場の形成過程と場の意味を考察する。第3に、まちライブラリーの間づくりを通して得た知見から、個人の活動が地域社会形成に活かされやすい視点を見つける。以上の論述を通して、個の活動が活かされる社会とはいかなるものであるかについての一指標とする。

理論的な間づくりに関する研究や実験的な間づくりに関する研究は多数あるが、実社会のなかで実際に利用される形になってこそ本来の意味があり、その場が成立した過程や運営されている状態を検証することに意義がある。したがって本研究では、長期にわたるまちライブラリーの実践活動を通して見えてきた活動実態を整理し、関係者へのアンケートやヒアリングから実際に活動に携わる者の行動や声を集め、質的調査を柱にしてその実態を明らかにしていく。

1-3 本論文の構成

本論文は、図 1-1 に記載するように序章を含む 7 章で構成する。

序章では、本研究に取り組むにいたった動機を記述している。自らの人生体験で得た動機である。本研究の柱となるまちライブラリーを生み出す背景にもなっており、まずここでその体験に触れておく。

第 1 章では、本研究の背景、目的、構成について記述する。

第 2 章では、社会基盤整備、図書館、場づくりの先行研究を整理し、本研究の取組みについて説明する。まず地域社会の基盤を作ってきた近代都市計画の生まれた背景や課題を整理し、そのうえで近代都市計画を批判したジェイコブズのまちを生態的に観察する手法を参考にする。さらに宇沢弘文が唱えた「社会的共通資本」の枠組みから、制度的社会的共通資本である公共図書館を「場づくり」の視点から概観する。一方、公共図書館と違った形で私設図書館活動が、公共図書館の活動を補完してきた役割を振り返る。最後に「居場所」、「サードプレイス」、「プレイスメイキング」といった場づくりに関する先行研究を整理し、これら研究領域を踏まえて、本研究の位置づけと検証の枠組み、本研究における場づくりの定義、研究の方法と手順を記す。

第 3 章では、まちライブラリーの概況を記述し、次に運営者、利用者へのアンケート結果を記し、考察する。最初にまちライブラリーの全体を概括する。次に多様なまちライブラリーの事例を、個人的に実施しているものから、企業、図書館、行政が組織的に実施しているものまで概説する。そのうえでまちライブラリーの運営者、利用者双方に対して実施したアンケート結果を記載し、考察する。

第 4 章では、第 3 章の結果を踏まえてエスノグラフィック的手法によりまちライブラリーやマイクロ・ライブラリーの運営者や利用者、また活動の支援者など関係者の発言や行動を中心に観察し、「場」をつくる人々の実相をさらに究明していく。本研究の当事者である筆者自身もオートエスノグラフィー⁶の手法で省察し、IS まちライブラリーや大阪市中央区に設置された周辺のまちライ

⁶ オートエスノグラフィーは、教育学、人類学、社会学等で研究当事者による自己省察を踏まえた研究手法。自己観察再帰的な調査を含む研究とされている。著者が自己省察および著述を用いて個人的経験を調査し、社会的な意味・理解に結びつける質的研究の手法である。

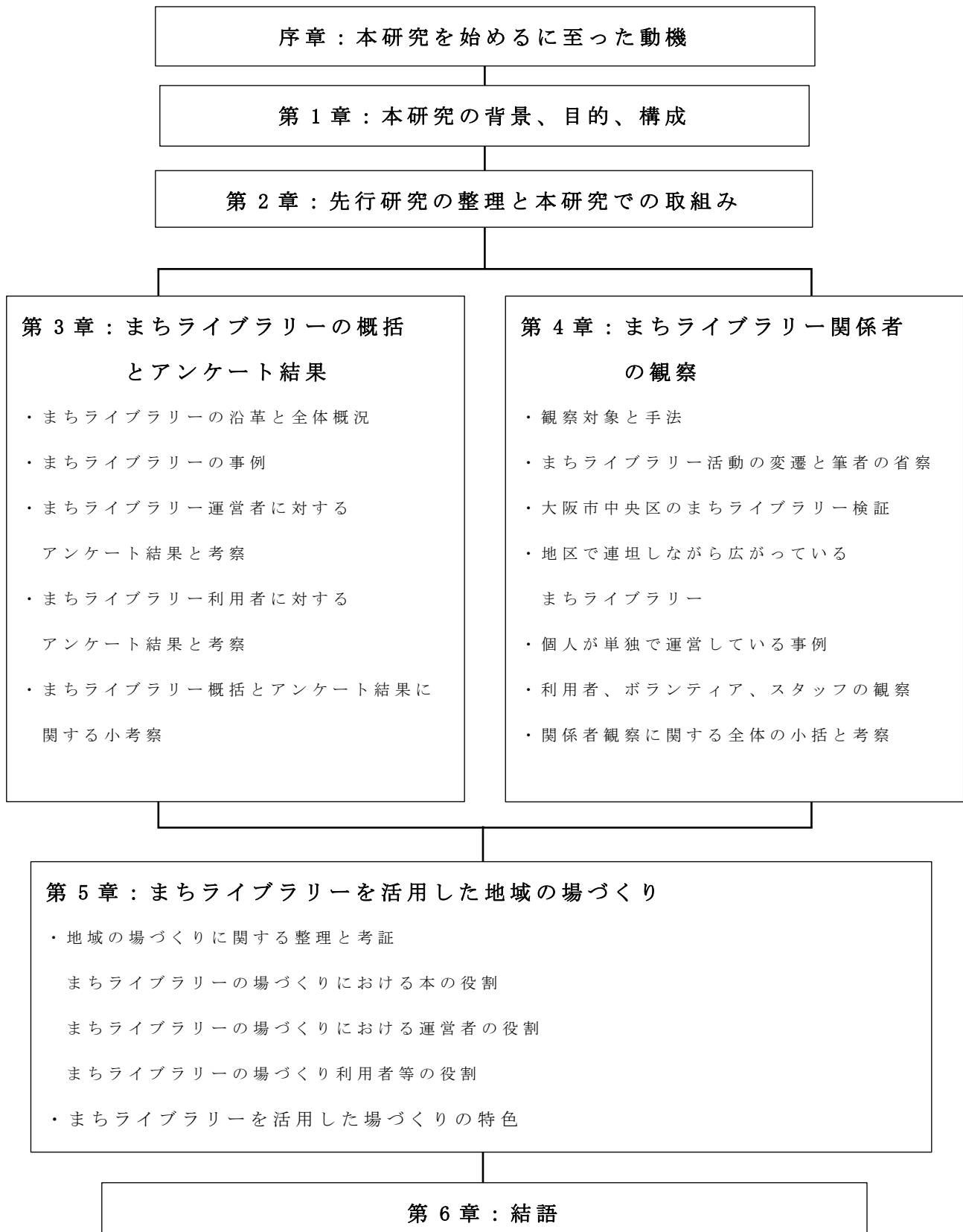
Adams, Jones, and Elis, *Autoethnography* を参照。

ブラリー関係者の発言と併せて検証する。次に、全国各地で地域ぐるみで広がっているまちライブラリー事例の中から行政、図書館等の組織が主導しているものと、個人が主導している複数の地区の運営者の声を拾い、検証する。さらにまちライブラリー運営者で継続して運営しているものと途中で閉鎖したものの声を集め、それぞれの実相についても明らかにする。以上の調査から、まちライブラリーを通して、個々の人が地域の「場づくり」にどのように関与したのかを明らかにしていく。

第5章では、第3章、第4章の結果を踏まえて、まちライブラリーの場づくりにおける本の役割、運営者、利用者等の役割を考察し、得た知見を基に、地域社会で個の活動が活かされるために必要な視点を整理する。

第6章では、本研究を通して筆者が学び得た知見をまとめ、本研究の意義を明らかにする。さらに個の役割を大切にしながら社会形成をしていくうえでの提言をまとめる。さらに本研究でやりきれなかった課題についてふれ、今後の研究活動における展望を述べる。

図 1-1 本論文の構成図



第2章 先行研究の整理と本研究での取組み

2-1 先行研究領域の整理

本研究は、まちライブラリー（第3章に詳述）を利用し、その活動を通じて、地域における「場づくり」が可能かどうかを、社会実験を通して検証しようというものである。さらに検証を通して、個の活動が活かされる社会とはいかなるものであるかを示す道筋を見つけることを目的とする。その意図は、社会の中で個々の人が役割を見つけ、社会への参画がしやすい環境を見出すことにある。

「個」の集合体が「社会」であるが、時により「学校」、「会社」、「地域」、「国家」とその集団の枠組みが変容する。「学校と学生」、「会社と社員」、「地域と住民」、「国家と国民」というように母集団の性質により個々の人の意味づけが決まってくる。これら「個」と「社会」の関係性は、長く議論されてきた課題である。エリアス（Norbert Elias）は『諸個人の社会』（2000, 25頁）の中で「個人と社会の間で思考を進めてゆく際に頻繁に現れるように見える溝を埋めることは、簡単な試みではない」と指摘している。本研究はこのような大きな課題に結論を得ようというものではないが、個が、地域社会の中で自らの役割を見出し得る端緒を発見し、その活動がどのような形で地域社会の基盤になり得るのか、あるいはなり得ないのかを検証し、考察しようというものである。

そのために社会基盤づくりの中心となってきた都市、まちづくりの分野と社会的資本として整備されてきた「公共図書館」と私的な図書館活動の分野、さらにコミュニティ形成と場づくりに関する研究領域を整理していくこととする。社会基盤づくりは、ともすれば制度に依拠せざるを得ず、生活者との乖離が起りがちであるが、それをどのように緩和できるのかを考察する。次に公共図書館が現状どのような役割を求められているのかについての議論を俯瞰し、私立図書館が先駆的に成し遂げてきた補完的な役割を見ながら、私的な図書館活動であるまちライブラリーが担える役割を明示する。さらに場づくりに関する「居場所」「サードプレイス」「プレイスメイキング」の議論を整理し、まちライブラリーを活用した場づくりについて定義していく。以上、多岐にわたる

研究領域をみるのは、特定の分野だけにとらわれると「場づくり」と「個」の活動を活かした社会への道程を見失いがちになると考えてのことである。

2-2 社会基盤づくりからの考察

2-2-1 近代都市計画と課題

地域社会の基盤づくりは、技術の進歩や社会の価値観の変動に大きく影響を受けてきている。ベネヴォロ (Leonardo Venevole) は、「近代都市計画の誕生は、工業都市を生み、それを変貌させていった技術や経済面での展開と時を同じくしていない。しかもその方策は、常に後追いとなっていて都市計画の技術はあいも変わらず後手にまわっていて、制御すべき対象のあとを追いかけている始末であり、依然、対処療法的な性格のものにとどまっている」(1976、7頁)と指摘している。現代においてもベネヴォロの指摘するような状況に変わりが無いと言ってもよい。グローバル都市の伸長と地方都市の衰退、高齢化に伴う介護や家主のいない空き家対策、女性の社会進出に伴う待機児童問題など、時代の中での課題は変われども、課題を追って、対処策を見つけようとしているのである。

近代都市計画の黎明期、ハワード (Ebenezer Howard) (2016) は、19世紀ロンドンの産業発展の中で地域環境の悪化をさけるため、ロンドンを離れ、田園の自然と生活を一体化した都市像を提案した。彼の提案は、イギリスはもとより世界各地のニュータウン建設につながり、都市構造の郊外化に先鞭をつける理論となったのである。またコルヴィジエ (Le Corbusier) (1968) は、都市づくりの合理性を追求することにより、その課題解決ができ、交通をはじめ技術革新を通して理想的な生活環境を創生できると提案している。このように都市の理想像を掲げ、その実行を提唱した二人に影響を受けた建築家、都市計画家、政策決定権者、実務家は多数おり、現代においても修正や批判を内包した形で連綿と継承されていると言ってもよいだろう。都市計画とは、社会変化の後を追いつき、その変化に都市・地域の姿を変容させていくための手段であり、技術となってきたのである。

21世紀になり情報通信や交通体系の高速化、大量化によるグローバルな経済活動の展開を支える高度専門職が活躍しやすい都市づくりの必要性が指摘され

ている。サッセン (Saskia Sassen) (1991) は、ニューヨークがその金融投資や情報サービスによる競争のために、高度な専門職にとって生きやすい都市になっていることをあげ、各都市がグローバル競争のなかで自由度をあげることが都市の発展につながるとしている。逆に創造都市の大切さを謳い、多様な人間の創造性への関与をとらえたランドリー (Charles Landry) (2003) は、市民の創造活動や文化活動に視点をあて、コミュニティの結びつきの大切さを唱えた。グローバル都市へのアンチテーゼであり、中小都市の生き残り戦略にも使われている。同じようにフロリダ (Richard L. Florida) (2008) は、知的でクリエイティブな活動に重きを置く人材を引き付ける寛容なまちを求める都市論を展開するなど、都市はその成長力が肝要とされ、都市の成長は、国の成長にもつながるという視点が強調されてきたのである。

2-2-2 日本におけるまちづくりの制度と手法

坂和章平 (2017) は、日本の都市に関する法律は 200 以上にわたるとしている。このように多くの法律が生まれてきた背景として戦後、日本のまちづくりの時代的変遷があるとしている。①高度成長期、②アーバン・ルネサンス、③都市再生と特区となり、それぞれ時代が求めるものが変化したためであると指摘する。近年では①「国土総合開発法」から「国土形成計画法」への変換、②「都市再生特別法」と「特区法」への流れ、③「国土強靱化関連三法」の成立など、グローバル化、人口減少、巨大災害、大都市戦略、コンパクト+ネットワーク型といった社会変化から生じる課題への対応が迫られ、それら制度を支える法律が生まれている。成長戦略を支える都市づくりが行われる一方、地方の衰退への対処と政策も生まれており、内閣府、国土交通省が進めている過疎地域を対象とした「小さな拠点づくり⁷」等の制度化がその一例といえる。

1980 年代には、住民参加型のまちづくりを目指してまちづくり条例⁸が誕生し、修復型まちづくりやまちづくりのソフトを推進するところも数多くみられ

⁷ 内閣府まち・ひと・しごと創生本部が主管となり進めている人口減少や高齢化が著しい中山間地域等における、「集落生活圏」を維持するための施策。

<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/about/chiisanakyoten/>

⁸ まちづくり条例は、自治体が都市計画マスタープランを作る際に、国の都市計画制度では対応できないきめ細かい取り決めをするものである。

るようになった。中島直人等（2018）は、「ともにいとなむ」時代の都市計画と評しているが、高度経済成長後の定常化した時代が求める空気でもある。さらにまちづくりは、ハードよりソフトへ視点を置くべきだという観点からエリアマネジメント⁹も注目されている。まちの文化催事やイベント運営などの、ソフトに焦点をあて、ソーシャル・キャピタル向上に主眼を置き、地域の賑わいある空間を提供し、エリア価値をあげる活動になってきている。しかしながら推進母体の維持や運営予算の捻出には苦慮しており、関係者に公平に運営コストを負担させるために BID¹⁰の導入を目指すなど、法的な根拠を梃にしたまちづくり運営が求められようとしている。

このように都市、まちづくりの宿命として資本や制度の裏打ちなくしては成し遂げられない側面もあることは否めない。それを身近なものにするために生活者視点で広げようと試みられてきたが、結局制度と法律が必要不可欠となり、一般の生活者からみれば都市、まちづくりのような地域社会の基盤整備は自らの生活からは遠い存在となりがちであるといえよう。

2-2-3 ジェイコブズと近代都市計画批判

都市の成長と変化に対応してきた近代都市計画が、生活者の視点から遠ざかったという批判的視点から改善を提案してきた者は多数いる。アレグザンダー（Christopher Alexander）（1984）は、数学における集合理論を応用した「パターン・ランゲージ」による都市の再構成を唱え、ランダムなパターンによる線を加えることにより人間的な姿に戻そうとした。リンチ（Kevin Lynch）（1968）は、住民による意識が都市をどのように把握しているか理解するべきであると提唱した。この発想は、住民参加型による都市を考えるデザインゲーム手法など、参加型まちづくりの手法の原点になり、都市の担い手である市民に焦点をあてる手法の源流ともいえる。

しかしながらこれら批判と似ているようで似ていないのが、ジェイコブズ（Jane B Jacobs）であろう。ジェイコブズの評価や批判は、街路の在り方やブ

⁹ エリアマネジメントは、特定のエリアを単位に、民間が主体となって、まちづくりや地域経営（マネジメント）を積極的に行おうという取組みをいう。

¹⁰ Business Improvement District の略でエリアマネジメントの運営費負担を不動産所有者等利益関係者の合意のもと、自治体が徴収し、それをエリアマネジメント団体に配分する仕組み。

ロックの作り方などその手法論に目がいきがちであるが、それは一面的な評価である。本来ジェイコブズが批判したかったのは都市の計画性や手法論そのものなのである。

ジェイコブズは、『アメリカ大都市の死と生』（2010）の中で既存の都市計画に対して真っ向から異議を唱え、その問題点を看破した。同書の冒頭でジェイコブズは「この本はいまの都市計画と再建に対する攻撃です。また、もっぱら都市計画と再建の新しい原理を導入しようという試みでもあります」（2010、19頁）と既存の都市計画に対して攻撃的な挑戦文をたたきつけている。ジェイコブズは都市計画が都市にもたらした問題点を以下のように記述している。「中所得者向け住宅プロジェクトは、都市生活の興奮や活力から完全に遮断された、真に驚異的な退屈さと規格化の権化となっています。高級住宅プロジェクトは、その空疎さをつまらぬ虚飾で補おうとします（実現できているかどうかさておき）。文化センターはまともな本屋を維持できず、市民センターは、あらゆる市民に忌避され（ただし浮浪者を除く一かれらは他の人よりもうろつく場所の選択肢が少ないもので）、商業センターは規格化された郊外型チェーンストアショッピングの気の抜けたまねごと。散策路はどこからともなく始まり、どこへも続かず、散策者はだれもいません」（2010、20頁）と指摘し、大都市にはりめぐらされた幹線道路にいたっては、都市の破壊になると断罪している。ここまでジェイコブズが、既存の都市計画の批判をする背景には、ジェイコブズが見る「都市」と都市計画家たちが見る「都市」が大きく違っているからである。

そもそもジェイコブズが、批判すべき都市計画者としてあげているのはハワードとコルヴィジェである。都市を忌避して田園地帯に理想の都市を実現するか、都市の機能を分化し、機能別に立体的に再構築することにより理想の都市を目指すかという方法論においての違いはあるが、都市計画の基礎的な考えを提供し、世界の都市計画に影響をあたえてきた二人といえる。これに対してジェイコブズは、全ての都市計画家たちの画策は、都市における実際の働きとは無関係と位置付けている。ジェイコブズは、日本語の新装版への序で次のように指摘している。「街路から始まった宝探しと、それが次から次へとつながった話に戻りましょう。その道すがらのどこかで、わたしは自分が都市の生態学

を学習しているのだと気がつかされました」（2010、15頁）としている。記述されている数々のまちの様子は、都市の生態観察の記録であり、その結果から導かれる実態調査とその考察なのである。

ジェイコブズは、都市を観察しながら歩道の重要性や利用されない近隣公園などの事例を通じて有名な4つの提言をすることになる。1つ目は、単純なゾーニングの否定である。地区の用途は2つ以上、できれば3つ以上が望ましく、別々の時間帯に外に出る人々や、違う目的でその場所において、多くの施設を一緒に使う人々が確実にいることを指摘している。2つ目は、ほとんどの街区は短くして、街路や、角を曲がる機会を頻繁にすること、3つ目には、地区内には古さや条件が異なる各種の建物を混在させなくてはならないとしている。これによって多様な業態の仕事や生活環境の人を呼び寄せることになると指摘し、4つ目にその地区には、十分な密度の人がいることが大切だとしている。この4つの原則は、ジェイコブズが観察してきた都市の実相から導かれた一つの解であり、重要な論点だとしている。

しかしながらジェイコブズは、「都市で起こるプロセスは、専門家だけが理解できる難解なものではありません。ほとんどだれにでも理解できます。（中略）なぜ帰納的に考えるのか？ そうせずに一般論から考えていくと、最終的に不条理さに行きついてしまうからです」（2010、467頁）とし、観念とデータが、都市の実相からかけ離れてしまうことを訴えているのである。

帰納的論理は、実質的に都市にかかわりがある力とプロセスを識別、理解、そして前向きな利用が可能で、ナンセンスにならないと指摘している。そして自分が導き出した4つの原則に対しても「わたしはこれらの力とプロセスについてかなり一般化しましたが、こうした一般論が、個別の具体的な場所で個々の事柄が意味するはずのことを示すのに定型的に使えるとは、どなたも考えてくださいますな」（2010、468頁）としている。つまりジェイコブズの4大原則も他の提言も一般化されたものが、可塑的なものではなくあくまでもその一端を説明する方策にしかならないとしている。都市プロセスは定型化するには複雑すぎるということをジェイコブズは見抜いているのである。

2-2-4 宇沢弘文の「社会的共通資本」の視点

宇沢弘文（2000）の「社会的共通資本」は、資本主義と社会主義の相克が終わりを告げ、双方の経済と社会にひずみが生じた 20 世紀後半から 21 世紀を見据えた新しい経済主義への脱皮を問う概念であった。新古典派経済学をはじめとする資本主義社会への警告として唱えられたのである。

宇沢は、「社会的共通資本は、一つの国ないし特定の地域に住むすべての人々が、ゆたかな経済生活を営み、すぐれた文化を展開し、人間的に魅力ある社会を持続的、安定的に維持することを可能にするような社会的装置を意味する」（2000、4 頁）と述べている。この定義にしたがって社会的共通資本を 3 つの大きな範疇にわけて考えている。1 つ目が「自然環境」、2 つ目が「社会的インフラストラクチャー」、3 つ目が「制度資本」としており、「制度資本」は、教育、医療、金融、司法、行政などを広い意味での資本として位置づけている。もっとも宇沢自身もこの定義は、網羅的ではなく、排他的でもないとしており、特に「制度資本」については重要な意味を持ち、固定的な概念を求めている。

宇沢が、このように「社会的共通資本」を提唱した背景には、90 年代に起こったソビエト連邦の崩壊とアメリカで起こったロサンジェルス暴動など社会主義と資本主義経済のひずみの露呈があり、混沌とした社会を経済学的に立て直したいとの思いがある。その宇沢が、市民的自由と、人間的尊厳と安定した成長を可能にする経済制度としてヴェブレン（Thorstein Veblen）の制度主義をあげたのである。宇沢は、「私たちが求めている経済制度は、一つの普遍的な、統一された原理から論理的に演繹されたものでなく、それぞれの国ないしは地域のもつ倫理的、社会的、文化的、そして自然的な諸条件がお互いを交錯してつくり出されるものだからである。制度主義の経済制度は、経済発展の段階に応じて、また社会意識の変革に対応して常に変化する」（2000、20 頁）としている。宇沢は制度主義への期待感の中で、社会的共通資本の概念を提唱したのである。

しかしながら、これ以降も世界経済は、IT 技術の急速な発展により、金融をはじめ世界経済のグローバル化が強まり、新古典派型の経済思想が隅々まで浸透してきたのが現実である。宇沢が、都市の社会的共通資本の中で批判したのがハワードであり、コルヴィジェである。コルヴィジェの「輝ける都市」は、

近代化の象徴であり、機能的で自動車交通を主体としたまちづくりであり、決められたゾーニングには人間が欠如していると指摘している。人々が住み、生活を営み、人間的な活動をする場としての都市ではないと断じている。逆に、コルヴィジェの「輝ける都市」の人間的貧困と文化的俗悪を指摘しているとしてジェイコブズを高く評価している。

宇沢は、公的には未刊行だった著作をまとめた『宇沢弘文の経済学 社会的共通資本』（2015）の中で『社会的共通資本 コモンズと都市』（1994）の各論考を振り返り「都市は、人工的な社会的共通資本を管理、維持するための制度、組織である。都市の経済的、社会的、文化的諸条件を1つの統合的なかたちで類型化することは不可能であって、各都市がそれぞれに置かれている特定の状況のもとで、その最適な経営、管理形が論ぜられるべきである」（2015、181頁）と述べている。さらに「真の都市は、人々の生活を営むなかで、時間の経過とともに徐々に形成されるものであって、決して、都市計画や都市再開発にもとづいて一気に作りあげられた土地と建物と通路から成り立つものでない」（2015、186頁）とし、アレグザンダーの「都市を癒す (heal) 」やジェイコブズの「都市を育む (nourish) 」という考えが大切であるとしている。また「あらかじめつくられたブループリントに合わせて都市が形成されるのではなく、部分から全体へとプロセスをふみながら、個別から一般へと帰納的な思考にもとづいてつくられなければならない」（2015、186頁）としている。

宇沢は「社会的共通資本」の管理に関して「その運営はそれぞれの専門家によって、専門的知見と職業的規律にしたがって管理、運営されるもので決して政府によって規定された基準ないしはルール、あるいは市場的基準にしたがっておこなわれるものでない」（2000、22-23頁）としている。なぜなら社会的共通資本の管理、運営は、フィデューシアリー (fiduciary) の原則に基づいて、信託されているからである。この発想の中に国家主義への忌避と、市場主義への不信感が出ている。それを自らの実践と社会制度で実現しようとしたのが宇沢であった。しかしながら、現実の制度資本は社会の縮減にともなう行政機関の予算削減と民間活力という言葉に踊らされた市場原理を中心にして管理、運営される流れになってきている。

2-2-5 社会基盤づくりに関する小括

社会基盤整備の視点から都市・まちづくり等の流れを概括した。ハワードやコルヴィジェに始まった近代都市計画は、都市の理想像を掲げた施策を実行することにより成立する。そのために法律や制度に裏打ちされた「理想的な計画案」を策定し、行政や企業が主体となり、組織的に、専門的技術や資本力によって達成しようとするのが常であった。ただ施策を実行する段階で生活者の視点と乖離が起りがちで、これら弊害を緩和するために生活者の視点を組み込む市民参加型まちづくりも実施されてきた。しかしながら現実には行政や専門家が主導することになり、限られた住民の参画に留まりがちである。

このような中で筆者が目にしたのは、ジェイコブズの視点である。都市を生態系の一部とみなし、観察による帰納的な手法で都市の施策を見直していく姿勢である。一般解を求めて演繹的に進める方法論は不条理にあたってしまうと指摘したジェイコブズの視点は、人々の生活の中で自然と生まれる場づくりの研究に応用できると考える。

さらに宇沢が定義した「社会的共通資本」、とりわけ制度資本の形成過程にも視点をおく。宇沢は、社会的共通資本を形成し、維持していくためには「専門性」と「専門家」による職業的規律に基づくことが重要であるとしてきた。国による管理や市場原理に翻弄されるのではなく、志ある専門家によりフィデュシアリーな原則に基づいて信託されるべきだと考えてのことである。実際、医療や教育など各分野で志ある専門家が、制度資本を作り上げてきたのも事実である。しかし、時代の変化がこれら専門家の領域を越え、逆にその専門性ゆえに参画する人の幅を狭め、生活者の関心を喚起せず、かえって「市場化」や「行政的管理」を促進してしまう場合もありうる。その一つの事例が「図書館」でないかということで、次節では、公立図書館の役割を俯瞰し、その役割を私的な図書館活動が補完しえるかどうかを研究の枠組みにしていく。

2-3 社会制度から見た「図書館」の役割

2-3-1 公共図書館の新しい役割

宇沢が指摘した社会的共通資本で定義した制度資本の一つに図書館がある。図書館という言葉は、誰でも知っている言葉であるが、通常、図書館というと自治体が運営する「公共図書館」を想定する。図書館を規定する法律は、1950年に制定された「図書館法」という法律であり、この法律には自治体が運営する図書館を「公立図書館」と規定し、無料で何人にも本を閲覧、貸出に供することをうたっている。また同時に日本赤十字社、一般社団法人、一般財団法人が運営する図書館を「私立図書館」としている。なおかつ「何人も同様の行為をすることができる」と第3の図書館について言及している。図書の蓄積、それへのアクセス、共有に関して広く国民にその権利があることをうたっているともいえる。「公立図書館」が、図書館法で規定している言われ方であるが、一般的には「公共図書館」と称せられているため、本論文では名称を「公共図書館」または単に「図書館」と呼び、「私立図書館」と区別する。公共図書館は、日本図書館協会によると2018年には全国で3,277館あり、その他に大学図書館が1,663館（短大、高専を含む）あると言われている¹¹。今、この公共図書館が大きな曲がり角にきている。その要因と求められている変化の先をいくつかの文献、研究をもとに整理する。

アンニョリ (Antonella Agnoli) は、『知の広場』(2011)の中で主にイタリアをはじめヨーロッパの図書館をベースにこれまでの図書館は、多くの市民の声に応じてこられなくなってきたとしている。特に、情報化の著しい進歩によって単独の図書館はグーグルやその他検索サイト、YouTubeなどのメディアに太刀打ちできなくなっている。また深刻なのは、図書館が教育水準を持ち得る階層の場となっており、一般の人々にとっては縁遠い場所になっていることである。本を扱うだけでも立ち寄りがたい雰囲気醸し出しているとしている。

¹¹ 図書館協会の以下のデータを参照
<http://www.jla.or.jp/library/statistics/tabid/94/Default.aspx>
2019年8月31日参照

このような時代背景を鑑み、図書館は新しい時代にふさわしい改革をしなければならないとしていくつもの提案をしている。特に出会いと、中立性と、平等性を維持することが大切であり、そのために図書館をヨーロッパのまち角にある広場のようにすべきだと主張する。「公共図書館とは、町と分かちがたく結びついた機関である。これまでの図書館、そしてこれからの図書館のあり方は、都市空間、つまり、教会、市場、広場のような『出会いの場』と深く関わっている」（2011、89頁）としている。

アンニョリは、都市社会学者アメンドラ（Giandomenico Amendola）を引用して「18世紀、議論の場、世論の形成される場としてブルジョワにより作られたカフェの誕生以降、近代都市は、公共の場の周囲に生まれている。広場、道、市場、劇場は公共の空間となり、19世紀ブルジョワ都市の本質そのものとなった。現代都市における公共空間の危機は、大都市に住む人間の危機の原因と結果である。公共空間は、もはや消滅しかけの幻影にまでなり、縮小されているのだから」（2011、90頁）と公共空間の危機を訴えている。さらに都市社会学者ディヴィス（Mike Davis）の言葉を引用し「現代の見せかけの公共空間—きらびやかな商業施設、企業資本の公園、人工的な文化施設など—には、“様々な”好ましからぬものを遠ざけるための直截的なシンボルがばら撒かれている」（2011、90頁）として、駅の待合室、公園のベンチなどが都市から奪われているとしている。このような時代の流れの中で図書館は、公共の場としての危機から逃れることができないとして、その場を出会いの場へ、大人から子ども、裕福な人から貧しい人、ジプシーから枢機卿まで利用できる“屋根のある広場”にしなければならないと述べている。

そのためにも、オルデンバーグ（Ray Oldenburg）の「サードプレイス」¹²が有効だとしている。人はその場の「機能」（ビールを飲む、散髪するなど）を求めて行くが、実際には人が自然と集い、会話がなされ、意見交換がなされる「中立な場」であることが大切であると指摘している。さらにそこでは、社会的な立場を越えて「平等の場」であることも重視している。さらにパットナム

¹² サードプレイスは、オルデンバーグが唱えた家庭でもなく、職場でもない第3の場所の概念である。都市の中にこのような場所が大事であると唱えたものである。本論文第2章2-4-3にて詳述する。

(Robert David Putnam) (2000)を引き合いにだし、優れた運営の公共図書館は、地域のソーシャル・キャピタル¹³を豊かにする場所であるとしている。

アンニョリは、具体的な事例として2つの公共図書館をあげている。1つはロンドンの「アイデア・ストア」でもう1つがイタリアのペーザロにある「サン・ジョバンニ図書館」である。

「アイデア・ストア」は、ロンドンのタワー・ハムレット地区に誕生した図書館である。当該地区は人口21万5千人のうち、半数が移民、なかでもBangladesh系の移民が多い地区であり、イギリス連邦中最も失業率が高く、12.7%になっており、地区内の12の図書館は、ほとんど利用されていなかった。そのために商業施設内やショッピング街の一角に図書館を設置し、地上階にエントランスを置いてアクセスをよくし、面積を1,000㎡程度にして、赤や蛍光色、紫など、斬新な明るい色使いをし、カフェテリアなどリフレッシュエリアを設けた。スタッフも1カ所に固まっているのではなく、館内を歩き廻るスタイルとスーパーのような昼休みのない開館時間を採用したのである。結果、図書館利用調査によるとイギリスでもっとも豊かなシティ地区、ハロウ地区について第3位の利用率(51.9%)になった。

このプロジェクトで大事なのは、始める前になぜ図書館を利用しないのかという、利用しない人への調査を徹底させたことである。その結果、いくつかの要望は予想通り豊富な蔵書、長い開館時間、新しい建物などであったが、もっとも重要なのは、日常の行動、例えばスーパーや商店街に行くとか、子どもを学校に送るなど、何かのついでに図書館に立ち寄れることを希望していた。その結果、もっと気軽な利用促進を目指して作られたのである。

もう一つのペーザロのケースは、サン・ジョバンニ修道院という歴史的な建造物の改築に合わせて作られた図書館であり、アンニョリがその計画にかかわった施設である。当該施設の計画は、歴史地区にあり、寂しい区域にある2つの通りを図書館という“屋根のある通り”でつなげようというコンセプトで開始された。周辺の住居と公共施設を一体化させてパサージュを使って、児童書、

¹³ ソーシャル・キャピタル(社会関係資本)は、パットナムが地域社会に形成する人とのインフォーマルな関係性を名付けた概念である。第2次大戦後の米国で人間関係を作り出す地域活動などの減少のためにソーシャル・キャピタルが大きく喪失していることをデータで示し、その重要性を唱えた。

情報通信、音楽、芸術、人文科学といったテーマごとのコーナーをつくり、入口のカフェテリアを起点にアーケードにあるウィンドウのようにして界隈性を出した。図書館のイメージをできる限り村役場や田舎の学校といった公共空間と違ったものにするにより、普段図書館に来ない層も気軽に利用できるようにし、来街者の増加を図ったのである。そのためにもデザイナーによるグラフィックデザインを導入し図書館に個性を与えるように仕向け、2002年の開館のおりには、子どもたちが古い図書館からの引っ越しを手伝い、それをパレードのように演出して新しい利用者像を演出するなど、アンニョリが、図書館を核にまちの総合プロデュースを仕掛け、確たるまちのブランドイメージを確立したとのことである。

このような事例は、ここ10年あまりに各地で起こっている。橋爪紳也は『ツーリズムの世界デザイン 非日常と日常の仕掛』（2015、36-45頁）の中でバーミンガムのインナーシティ活性化のため、図書館を核にした公共施設による再生を目指し、地域ブランドの向上、来街者増、都心の再生をなしとげた成功事例としてバーミンガム公共図書館を取り上げている。

バーミンガムは、人口約100万人で広域人口まで含めると230万人とイギリス第2の都市であるが、オイルショック以降、製造業の流失と景気の低迷により、都市中心部の空洞化が起り、低所得者が住むようになり、生活環境や治安状況が悪化、社会問題化したという。これに対してバーミンガム市当局は、「Big City Plan」を作成し、その一環として整備されたのが「バーミンガム公共図書館」である。総面積が35,000㎡にもなり、蔵書数は約100万冊を誇る、ヨーロッパ最大の図書館として完成したのである。オープニングセレモニーにはパキスタンで銃撃されたマララ・ユスフザイが招かれるなど華やかなスタートを切り、各方面で話題になった図書館である。建築も話題になり魅力ある空間として内外の来訪者を受け入れている場となっている。同館のキャッチコピーは「Rewriting The Book」で、21世紀における図書館の目的の再定義とバーミンガムの人々の生活を変化させていくことを謳っている。

橋爪は、ツーリズムと都市デザインは二極化していると指摘している。グローバル都市を中心にテーマパークや大型商業施設、カジノ、劇場、ミュージアムといった非日常性の集客施設を設けて国際的な観光都市とする方向性と都市

型のニュー・ツーリズムの振興によって集客を図ろうというものであり、後者のニュー・ツーリズムのなかでも、地域コミュニティ内部から生じる自律的なツーリズムの意義を強調している。バーミンガム公共図書館は、行政が主体となった図書館を中心とした活動が、コミュニティ・ツーリズムの担い手になり得た事例である。

日本でも図書館を核にまちの再生や来街者増につなげている事例はたくさん報告されている。猪谷千香は、『つながる図書館』（2014）の中で東京都武蔵野市「武蔵野プレイス」、東京都千代田区「千代田図書館」、長野県小布施町「まちとしょテラソ」、鳥取県立図書館、武雄市立図書館、伊万里市民図書館などの公共図書館を取り上げるとともに、NPO 法人情報ステーションが運営している「民間図書館¹⁴」や島根県海士町で実施されている島をまるごと図書館にする事例なども紹介している。

それぞれの図書館に共通しているのは、生活者との接点を増やし、新しい生活のプラットフォーム化が図られていることである。例えば、「武蔵野プレイス」では、カフェを1階に設置し、雑誌や本を持ちこんで閲覧できるようにするなど従来の図書館のイメージを変えている。千代田図書館ではビジネスマンのドロップイン型のテンポラリーオフィスとしての利用を可能にしたりしている。また小布施まちとしょテラソのように民間採用の館長が、図書館を演出の場にできるように市民の声を聴きながら作っていき、またまちじゅう図書館というコンセプトのもと、まちの中に小さな図書館を地域の店舗などの協力により設置していく事例もとりあげている。鳥取県立図書館では、ビジネス図書館として起業を支援する情報を提供し、武雄市立図書館では、CCC グループが指定管理で運営しており、同グループの蔦屋書店と連携させるなどの工夫を凝らしている。また伊万里市民図書館では、開館前から市民と協働で作り上げ、現在もそのメンバーが図書館活動を支えているという。

このような図書館の事例は、毎年増えており、従来の商業施設でまちおこしをする事例が図書館のような文化施設を中心に人の集客や交流、情報発信やインキュベーションなどに使われているのである。猪谷は紹介していないが、こ

¹⁴ 「民間図書館」という呼称は、NPO 法人情報ステーションが千葉県船橋市を中心に展開しているマイクロ・ライブラリーの呼び方として使われている。

れ以外にも岐阜市立図書館メディアコスモスや富山市立図書館など各地で新しいタイプの図書館ができています。これらの図書館は、建築も伊東豊雄や隈健吾などが担当しており、まちのシンボルともなっている。

久野和古（2010）は、アメリカ図書館情報学会の重鎮であるウィーガンド（Wayne A. Wiegand）が、これまで「場としての図書館」（the Library as place）という研究テーマを看過してきたのは大きな損失であると言及したことを紹介している。従来の図書館情報学の研究テーマが「情報」「教育」「学習」であり、主に「図書館での生活の中での利用者」に焦点をあててきたが、「場としての図書館」を研究課題とすることは「利用者の生活の中における図書館」という広い観点からの研究になるという。さらに川崎良考（2009）を引用し、これからの図書館を研究するにはハーバマス、パットナム、オルデンバーグが必要であるとしている。つまり、「公共圏」「ソーシャル・キャピタル」「第三の場（サードプレイス）」がテーマになってきていると指摘しているのである。

久野は、パットナムが、フェルドシュタイン（Lewis M. Feldstein）との共著『BETTER TOGETHER』（2003）の中でソーシャル・キャピタル向上の成功例としてシカゴのニアノース分館を取り上げていることを紹介している。ニアノース分館は、貧富の格差がある2つのコミュニティの境界に新しく建設され、図書館で実施されるコミュニティ活動、ボランティア活動、学習・情報活動、そして平等で適切で幅広い図書館サービスを通じて、隔絶した両コミュニティの住民同士の出会いと交流、そして互酬性、信頼性を生み出しており図書館が「サードプレイス」として機能しているとしている。外向きで、様々な社会的亀裂をまたいで人々を抱合するような「橋渡し型」社会関係資本の育成と、内向きの志向を持ち、排他的なアイデンティティと等質な集団を強化していく「結束型」社会関係資本の育成の両方に成功した貴重な事例であると紹介している。

このように公共図書館の役割は、地域のコミュニティの場となり、まちのシンボルともなりえることが期待されているのである。しかしながら日本の図書館では、社会の縮減にともなう自治体予算の削減や生活時間の変化から夜間開館などサービスの見直しが続いている。そのために自治体によっては、指定管理制度などを通して民間企業への委託などが進んでいるわけである。中には本屋やコーヒーショップを併設するなどして市民の利用が増えたところもあるが、

働くスタッフが臨時雇用や派遣労働になり低賃金になってしまい、専門的職能機能が失われつつあるといった批判¹⁵も多数出てきている。このように公共図書館も大きな曲がり角にきており、宇沢が指摘したように制度的社会的共通資本が、市場化の中で大きな課題を抱えるようになった一つの事例ともいえる。

2-3-2 私立図書館の先導

ここまで公共図書館を中心に見てきたが、明治に設立された私立図書館について前川恒雄・石井敦（2006、127-128頁）は、1902年に成田山新勝寺貫主、石井照勤より設立された成田図書館について、紹介している。設立の背景は、日本の公共図書館が役所流だったのに対して、できるだけ自由にいたいという、官へのアンチテーゼだとしている。成田図書館では、配架も壁際に本棚を置き、閉架型の図書館が当たり前の時代に自由に本を手にとれるようにして図書館と読者の間には家族的雰囲気があったと指摘している。さらに成田図書館では、利用者との懇話会を設けるなど公共図書館における先駆的な役割を果たしたとしている。

戦後も私立図書館ないしそれに類する私的な図書館活動で忘れてはならない活動がある。石井桃子達による「子ども文庫・地域文庫」である。石井は、1954年～55年にかけて欧米の子どもの図書の出版事情や児童図書館の活動を視察し、日本との彼我の差を感じて、帰国後各方面に対して児童図書をめぐる環境改善に動くが、自らも1958年、東京都杉並区にて自宅を開放し、「かつら文庫」という児童文庫を実施する。この活動の記録が『子どもの図書館』（1965）という本になり全国各地に賛同者が現れ、その広がりが生まれるのである。筆者が唱えるマイクロ・ライブラリーやまちライブラリーの先駆けとも言える活動である。

汐崎順子の『児童サービスの歴史』（2007）によると『子どもの図書館』の刊行後、「ポストの数ほど図書館を」という合言葉のもとに、全国各地に続々と文庫が誕生した。日本図書館協会の調査によると1970年には全国で265カ所になり、1981年には4557カ所の文庫に問い合わせ、1878カ所から回答を得

¹⁵ 日本図書館協会は、「公立図書館の指定管理制度について—2016」にて「日本図書館協会は、図書館への指定管理制度はなじまないと考えます」という文書を発表している。

るなど、既に閉館したところもあるとしても相当広がったことがうかがえる。そして、その活動は多くの子どもや母親にとって大きな影響を与えるばかりでなく、公共図書館の児童図書コーナーの拡充など、日本の図書館活動への影響は多大なものであったと言わざるを得ない。

石井自身は、『子どもの図書館』の中で6年目の活動を総括して「文庫がうまくいけばいくほど、文庫の大人たちの負担は大きくなります。生活の心配もなく、ほかの仕事がないのならば、それもいいのですが、私たちの場合、そうではなかったので、家庭文庫研究会でも会合のたびにそれが問題になりました。家庭文庫は、やる以上、いい仕事にしなくてはなりません。けれどもどこまでやり得るか、これをくり返し話し合いました。そしていつも、結局、公共図書館と結びついた時、いろいろな問題（本や人力の補充とか、子どもたちへの働きかけ方などの本式の勉強とか）が、かなり解消されるのではないかというところにおちつきます」（1965、47頁）と公共図書館との結びつきについて記述している。実際7年目で家庭文庫研究会を解散することになったが、活動がしぼんだからではない。活動資金のために始めた絵本の発行が順調で収入もあったが、個々人の仕事でやるには限界があり、むしろ地区の公共図書館と結びついて、実際上の指導を仰いだ方が良いという結論に達したからとしている。このように個人文庫として広がった「子ども文庫・地域文庫」は、良い本を子どもたちに届ける、読ませるという目標意識を持った活動として昇華し、公共の力に委ねる形で徐々に収斂していったのである。

2-3-3 マイクロ・ライブラリーの定義と先行研究

子ども文庫・地域文庫の活動が、担っていた人材の高齢化や社会環境の変化、公共図書館の子ども・児童図書コーナーなどの充実に伴い収斂していったあと、新たな私的な図書館活動が生まれてきた。筆者が2011年に始めたまちライブラリーをはじめ、その前後から個人や小規模な団体が、従来の子どもの文庫・地域文庫とは違い、多世代を対象とした小さな図書館活動を散発的に行い始めたのである。図書の収集、貸出に視点を置くものもあったが、図書がおかれる空間を際立たせたり、利用者とのつながりを求めたりと多様な目的で活動をするものが現れだした。筆者はそれらの総称をマイクロ・ライブラリーとして、さ

らに横の連携をとることを目的に2013年に「マイクロ・ライブラリーサミット¹⁶」を開催した。マイクロ・ライブラリーについては筆者自身が国会図書館の『カレントアウェアネス』（2014a）にて定義をし、運営目的別に下記の5つに分類した。

(1) 図書館機能優先型

蔵書の閲覧・貸出に注力している。

(2) テーマ目的別型

特定のテーマに絞った蔵書を収集している。

(3) 場所の活性型

場所の利用者間の情報交換に視点を置いている。

(4) 図書館連携型

公共図書館が主体または連携している。

(5) コミュニティ形成型

人とのつながりに注力している。

以上のようにマイクロ・ライブラリーを始める意図によりそれぞれ違いがあり、一様な活動ではないと考えたのである。

永田治樹（2014）は、「公共図書館はソーシャル・キャピタル形成に寄与するものであり、マイクロ・ライブラリーも公共図書館の不都合さを逆手にとっている。それはかまわない、疎遠な人と人とを結びつけるのが時代の要請であり、大いに勧めたい動きである」と指摘し、また伊藤千晶、井上朝雄（2015）は、まちライブラリーや他のマイクロ・ライブラリーを分析し、地域活性化に役立つものであるとしている。他にも千葉県船橋市を中心にNPO法人情報ステーションが展開している「民間図書館」を分析した三森弘（2017）は、民間図書館の中でも、その運営がボランティアに委ねられたところは、ボランティア同士が交流を深め、ソーシャル・キャピタルを形成しているとしている。このようにマイクロ・ライブラリーは、公共図書館が目指している地域社会との連

¹⁶ マイクロ・ライブラリーサミットは、筆者の発案で始まった。2013年に最初の全国大会が大阪府立大学 I-site なんばで開催され、以降毎年実施されている。小さな図書館活動をしている人たちが年1回集い、お互いの活動を発表している。

携やコミュニティの形成を補填する役割を担うと注目されはじめているのである。

2-3-4 社会制度から見た「図書館」の小括

社会の変化の中で公共図書館は、図書の貸出、蓄積といった役割だけではなく、地域の生活者の「場」としての役割が求められるようになってきている。

「場としての図書館」の役割が認識されつつあるといえる。これらのニーズに対して公共図書館を変革しようと民間企業に指定管理等により運営を委託する動きもあるが、日本図書館協会などは、公共図書館の機能が弱体化につながることに反対している。市場の原理を持ち込むことへの忌避感が背景にあると推察される。一方、私的な図書館活動が、行政が運営する公共図書館とは違った視点で始められ、先駆的な役割を担ってきた事例もあることもみてきた。明治期においても戦後においてもこれら私的な図書館活動が、公共図書館の活動を先導することになっている。その中で筆者が定義したマイクロ・ライブラリーも公共図書館に求められているコミュニティの場としての役割を担える可能性を指摘する声もある。

本研究の中でマイクロ・ライブラリーの一種であるまちライブラリーが、公共図書館とは別の形で地域の場づくりを担えるかどうかを検証する意義があると判断する。個々の生活者の力を使い制度や市場に委ねない方式で地域に本のある「場づくり」が可能となるのか。結果としてそれらが自生的に広がり連坦していけば、「個」が主体となって「社会的なインフラ」、宇沢のいうところの「社会的共通資本」になるのか。またその形成過程において「専門家」だけに委ねるのではない社会的資本形成が可能ではないかと考えてのことである。図書館の研究を通して、本研究での検証の枠組みの一つを発見できたと考える。

2-4 コミュニティ形成と場づくりの視点

2-4-1 場づくり論と地域コミュニティ

場づくりに関する研究の先駆けとしては、クルト・レヴィン (Kurt Lewin) の『社会科学における場の理論』(2017)がある。レヴィンは、人と環境が相互関係しているものを「生活空間」と定義し、その相関関係を数式化した。個々の人間が持つ性格や能力、経験値などを個別条件とし、実空間の物理的な条件や、心理的な条件を規定する組織の風土などを環境条件として、相互に関連して人の行動を左右するとして方程式に定義した。このように「場」は、単にその空間的な条件だけを意味するのではなく、そこにいる、あるいは関係する人間と深く関連して成立することは古くから指摘されてきたのである。

清水博は、『場の思想』(2003、44-45頁)で生命論の立場から以下のようなたとえで人と場の関係を説明している。「場所における人間は、『器』に割って入れられた卵に相当する。白身はできる限り空間的に広がろうとする。他方、黄身は場のどこか適切な位置に広がらずに局在しようとする。人間の集まりの状態は、1つの『器』に多くの卵を割って入れた状態に相当する。器の中では、黄身は互いに分かれて局在するが、白身は空間的に広がって接触する。そして互いに混じり合って、1つの全体的な秩序状態(コヒーレント状態)を生成(自己組織)する。(中略)白身が広がった範囲が場である」と表現している。難しい言い回しであるが、清水の生命論が背景にあり、1人の人間は個体(局在的生命)として生きているのではなく、広く社会全体に広がる他の人との関連性(偏在的生命)があつてこそ個の生命もなりたつことを主張したのである。清水は、これを「自己の卵モデル」として場の論理に応用しているのである。

このような場づくりに関するモデル化や概念化、哲学的思索が長年にわたって続けられている一方で、地域コミュニティの場が、ソーシャル・キャピタルを生み出すけん引役になるという議論が増えてきている。このような議論が生まれるのは、現代社会の中でコミュニティの喪失による孤独化が社会課題となってきた背景がある。すでに1971年に自治省は「コミュニティ(近隣社会)に関する対策要綱」を出し、その後も地域のコミュニティに関する政策提言を出し続けている。2012年には、総務省が「今後の都市部におけるコミュニティの

あり方に関する研究会」¹⁷を開始している。

このように地域社会を取り巻く社会的環境は、常に外的な変化に影響を受けているが、そこに生きる個々の人にとってどのように行動をすれば良いかの方策については、明確な方向性が見えない。そのような中で、パットナム（2000）が再定義したソーシャル・キャピタルという概念が広く浸透し、都市・地域政策の中でも議論されるようになってきた。パットナムが、指摘したように、ソーシャル・キャピタルの喪失は、コミュニティ論の中では永遠の課題であり、コミュニティ喪失論からはじまり、存続論、そしてウエルマン（Barry Wellman）（2006）が指摘したように解放論とつながるのである。

このような変遷の中で、図書館の議論でも何度も出てきたオルデンバーグの『サードプレイス』（2013）は多方面で注目を集めている。「第1の場所」である家庭や「第2の場所」である職場とは異なる「インフォーマルな公共生活の中核的環境」を意味した「第3の場所（サードプレイス）」という概念が、近年、研究者の中でも多様な形で触れられることが多くなってきた。「居場所」、「サードプレイス」、「プレイスメイキング」等、様々な呼び方で論じられている「場づくり」について、その用語の使われ方も視野に入れ、以下に整理する。

2-4-2 居場所について

久田邦明（2008）は、「居場所」という言葉が、「いるところから、いどころ」という独特な意味で使われるようになったのは1970年代に入ってからであるとしている。当初は、世代を越えて「おとうさんの居場所がない」というように使われていたが、1980年代に入って「学校に自分の居場所がない」というようになった。1990年代になると文部省の不登校問題に関する報告書「学校

¹⁷ 総務省「今後の都市部におけるコミュニティのあり方に関する研究会」

2012年から2014年まで8回にわたり開かれた。住みよいまちのためには、自治会・町会の役割が大事である。課題としては、集合住宅住民を取り込む施策が必要であるとしている。

http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/kenkyu/tosi_community/index.html

2019年9月3日参照

不適応対策調査研究協力者会議報告¹⁸」（1992）で「心の居場所」というように使われた。このように教育分野で「居場所」という言葉が普遍化していったが、久田は、第1には、1990年代後半から地域で子どもの支援をする人々のあいだで広く使われるようになり、第2には、青少年育成の行政施設や地域活動において盛んに使われるようになり、第3には、先駆的な事例として「青少年施設」「住民施設」「それ以外の個人住宅や空き店舗など」を利用した居場所づくりが言われるようになったと整理している。

阿比留久美（2012）は、「居場所」という言葉は1980年代半ばに不登校の子どもが昼間通うフリースクールやフリースペースを指していたとしている。1990年代に入るとそれは、子ども・若者全体についての議論になったが、「居場所」の議論が、いまだ共通認識化していないと指摘している。阿比留は、「居場所」全体の定義としては、当事者の主観、他者との関係性、空間性の有無の3つが軸になるとし、「居場所」の解釈として以下のように整理している。①受容的空間としての「居場所」、②社会的空間・創造的空間としての「居場所」、③関係性の中での「居場所」である。

①のケースとして住田正樹（2003）の説明を参照し「居場所」が「安心と安らぎとかくつろぎ、あるいは他者の受容とか承認という意味合いが付与されて、自分のありのままを受け入れてくれるところ、居心地の良いところ、心が落ち着けるところ、そこに居るとホッと安心していられるところ」と定義している。また天野正子（2000）の観点を使い「居場所」を「アジール」（避難所、隠れ場所）、「無縁」（権力が介入できない一種の聖域）に通じるとして自分を演じたり、つくろったりせず安心して存在できる空間として「居場所」を受容的なものとして捉える傾向は、実践報告や実践研究による定義で多くみられるとしている。

萩原建次郎（2012、18-34頁）は、制度として広がる「居場所づくり」の方向性や留意すべきこととして、近代化の中で次世代育成機能の不全化と若者の社会参画機能の縮小を指摘している。地域行事でさえ行政や商業・消費ベースの

¹⁸ 文部科学省「学校不適応対策調査研究協力者会議報告（概要）」（1992年）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/06042105/001/001.htm
2019年8月31日参照

イベントへ変貌しており、地縁等の喪失がそれをもたらしているとしている。社会が機能主義に陥り、目標設定型で誰でもどこでも同じ結果へ到達させるという価値基準が社会の隅々まで浸透した結果、若者がぶらぶらする場所すら喪失させ、若者は日常的にいる場所を失っているという。

さらに萩原は「居場所」の原初的構造についても問題提起している。「居場所」を「私」という自己意識を支える母胎と捉えるのなら、「居場所のなさ」というのは、「私」（自己意識）それ自体を自己充足的に捉えてきた近代の文明史的な課題であるとしている。つまり自立思想は、文明史的に発明されたもので、親や青少年指導者、教師などが、子どもや若者に対して当たり前のように「自立しなさい」「ひとりでやりなさい」などと言葉をかけるようになっていたことを事例にあげている。むしろ「自立した個人」を自足的独立系のごとく捉える近代の思想には限界があり、「私」という存在は、共同体を基盤として初めて成り立っていると指摘している。これは、清水の「卵の黄身と白身」の理論にも相通じるであろう。

このような視点のもと萩原は、居場所とは、第1に「私」という主体の生成母胎であり、生命世界につながる場であり、第2には「居場所」は、「私」と他者との相互規定的な関係において存在するとしている。逆に一方的にその関係性は壊しうるとも指摘しており、教師や大人が青少年に「あるべき像」を押し付けるとこの関係性は壊れると警鐘を鳴らしている。第3には、「居場所」においては「私」が「他者」をかけがえのない存在として甘受し、「他者」が意味ある存在として変貌するが、そのような「居場所」を実体化し、制度化しようとすると同化と固定化、自閉化が始まるとしている。

このような自閉化を避ける方策は、若者にできるだけ権限を委譲し、参加と参画の機会づくりを小さなスケールから始めることであるとしている。萩原は、これを「小さな社会（場）」と呼び、構成メンバー同士の顔が見え、直接的に関わりあい、交流しあい、共に参加し創っていくことのできるスケールを持った場と指摘する。小さな場であればこそ、自己効力感を得、そこに参加し、共に場をつくる過程で他者と関係をつくり、社会を創ることを実感と体感を持って学ぶことができるとしている。

同じ教育学の立場から南出吉祥（2015、67-90頁）は、「居場所づくり」の分

析軸を提案している。従来の「居場所」の分類が外在的な区分・領域に基づいており、実践内容に即していないので、多様な形の「居場所」を内在的に整理し読み解くための分析軸を仮説提示している。横軸に「開放性（出会い）」と「限定性（なかま）」をあげ、縦軸に「休息性（やすらぎ）」と「活動性（充実）」をあげて整理している。横軸では、通常「開放性」は多様性を意味し、評価されがちであるが、マイノリティになった社会的弱者にとっては必ずしも良いことばかりでなく、同質性の中で自己表現しやすくなる「限定性」も大事であると指摘している。また「休息性」と「活動性」も「居場所」の設立趣旨によって大きく分かれている事例もあるが、「休息性」だけで始めても徐々に活動的なことが起こると、それによってその場に来ることがためられる人が現れたり、逆にひきこもりの人が何もやることがない場所に最初から忌避を感じたりすることも指摘している。

「居場所」の研究には、空間論からのアプローチも多数ある。日本建築学会編の『まちの居場所-まちの居場所をみつける/つくる』（2010）には、全国19カ所の「まちの居場所」事例を、住宅の転用、空き店舗の転用、施設・ビルの転用、仮設・新築、団地・商店街、公園・屋外と整理し掲載している。事例として①農村住居を改装したデイサービス施設、②商店街の商家を改装した交流の場、③ニュータウンの空き店舗を利用した住民の手作りスペース、④公共施設に設置された目的なく居られる場所、⑤住宅街にある公園に設置されたプレイパークなどをあげている。

同書の考察で小松尚（2010、174-179）は、「人の居場所」が建築や都市の中で登場してきた背景として、1990年以降、国土・都市開発や公共施設整備、住宅整備などが経済成長の推進力となりつつも一定の水準に達し、同時にバブル景気時の華やかな建築を纏った大規模都市開発が終息し、「量から質へ」がスローガンとして叫ばれるようになったことをあげている。これについては諸説あると思えるが、従来の行政、公共団体の運営する公共施設とは対照的な生活者の共通課題を取り込むための「居場所」が生まれてきたとしている。そのうえで建築・都市の姿や方向性を以下のように整理している。

1番目は、「居場所」は、既存建物のリノベーションでなりたっていることが多い。従来の公共施設のように新築されるものが少ないのが特色である。2番

目に、公共施設の在り方の変容をあげている。従来の公共施設は目的型で計画的に作られているが、生活者のニーズに合致していないケースも多々ある。「居場所」を新たな公共施設として取り入れることにより、生活者とのニーズのすれ違いを解消できる有用性に言及している。3番目に、建築・都市の担い手が、従来の公共的施設や企業や地縁組織から変わってきていることを指摘している。地域の中で人望があつたり、課題や人脈に精通する人が、任意の組織やNPO等の組織を組成したり連携したりする。「居場所づくり」をつくるという、まちづくりの担い手の育成という側面があるとしている。4番目には、地域社会の変革をとりあげている。どの「居場所」も資金やスタッフの継続性が課題になっており、それをどのように達成するかは各地様々であるが、その過程でこれからの地域社会の在り方が問われていくであろうと指摘している。それはまた「居場所」がこれからの地方自治の先駆けになりうるとも言及している。5番目には、専門家の役割が変わってくることを取り上げている。従来の建築、都市計画関係の専門家は、建物の計画段階から竣工までの役割を担ってきたが、より継続的に関わる必要性にふれている。

橋弘志(2010、180-206頁)は、「これまで建築や都市計画では主に、人の要求=機能を満たすための環境を整えることを目的としてきた。その従来の枠組みでは、こうした曖昧な性格を持ったまちの居場所の質や価値を捉えきえることは困難である。しかし、そうした曖昧さこそ居場所の意味や魅力が含まれているように思う」としている。同時に「居場所の特性」としては、以下の11の特性があると整理している。①訪れやすい②多様な過ごし方ができる③多機能である④多様な人の多様な活動に触れられる⑤自分らしく居られる⑥社会的関係が作り出される⑦参加できる場である⑧キーパーソンがいる⑨柔軟である⑩地域との接点をもたらされる⑪物語が蓄積されるとしている。

このような整理をしたうえで新しい公共性について触れており、個人と公共性の視点からは、齋藤純一(2000)の「Official」「Common」「Open」に分けた公共性を例にあげて、国家や自治体などの活動が「Official」とするならば、社会で共通するものを「Common」とし、誰にも開かれたものを「Open」と捉えて、どれもが公共と捉えるなら「個」と「公共」とが互いに支えあう関係になりえることを指摘し、「個」の役割に注目している。逆に「Official」な公共

施設が多くの人を受け入れるものになっているかどうかという疑問も呈している。さらに物理的空間の公共性として「居場所」は、物理的にも訪れやすく、いつでも誰に対しても開かれているとしている。また、現代的コモンズとして従来のコモンズに起こりがちな閉鎖的な管理でもなく私的な経済合理性の追求により壊れてしまうコモンズでもない、経済合理性以外の公共的な価値観が共有されたコモンズが成り立つとしている。そして、このように公共圏の整理をすれば従来の公権力や経済市場による浸食を止められると提唱している。

さらにオルデンバーグによるサードプレイスにも言及し、インフォーマルな生活時間と空間を提供できるのが「居場所」であるとしている。そしてその中では、佐伯胖(1995)が指摘した個人と信頼できる相手がいるという二人称(YOU)の世界感が大切であるとしている。つまり一人称としての個人が、よく知らない人たち、佐伯が言うところの三人称(THEY)の世界に直接接するのではなく、信頼できる相手、つまり二人称の人間関係を通じて他の人とつながることの大切さを唱えている。さらにギブソン (James J. Gibson) による造語「アフォーダンス¹⁹」を引用して、多様な人が利用する「居場所」という空間が作り出す環境が少しずつ変化し、一人ひとりの主体性と公共性を両立させようことを指摘している。そして機能的にデザインされた施設が豊かなアフォーダンスを含むとは限らないし、隅々まで設計され尽くした都市計画がアフォーダンスを豊かにするとも限らないとしている。

日本建築学会は、2019 年にも『まちの居場所 ささえる/まもる/そだてる/つなぐ』(2019)を編纂しており、その中で鈴木毅(2019、35-42 頁)は、本を活用した場づくりが近年増えていると指摘した。マイクロ・ライブラリーの中でも特にまちライブラリーに言及し、当事者による場づくりが 21 世紀における場づくりにとって大切であるとしている。同じく、同書の中で、前出の小松(2019、116-128 頁)は、公共図書館がまちの居場所で大切な役割を果たしているが、同じようにまちライブラリー@大阪府立大学のような場を大学が提供することも大切であるとしている。

¹⁹ ギブソンが唱えた造語「アフォーダンス」は、物理的な環境が生物に与える影響のことをいう。

このように「居場所」は、単なる物理的な空間を意味するのではなく、人の主観的な解釈を含んだ概念であり、教育分野から建築や都市の空間にまで応用して使用されているといえる。

2-4-3 サードプレイスについて

「サードプレイス」という言葉を世に広げるきっかけをつくったオルデンバーグ（2013）は、インフォーマルな人のつながりが都市の生活の中では重要であり、そのようなつながりが生まれる場所を、家でも職場でもない第三の場所「サードプレイス」として位置づけた。イギリスのパブやフランスにおけるカフェのような場所が車社会の米国では形成されず、職場と自宅の往復のみの生活者が多いことを問題視したところから生まれている。

特色として、①インフォーマルな公共の場、②中立な場所、③フラットなつながり、④会話が豊かになる、⑤利用しやすさ、⑥常連によって決まる雰囲気、⑦第2の我が家と定義し、個人的には心の健康を、社会的には政治的、社会的な安定につながるとしている。そしてこのような場所は、地域になくってはならないものとしている。さらにそのような場所への参加の動機付けとして「楽しさ」をあげており、現代の都市づくりはインフォーマルなまちの拠点づくりに背をむけてきたと断じている。

サードプレイスに言及した研究は多数ある。例えば、図書館など実践的な活動において場づくりやコミュニティ形成に寄与する場としてサードプレイスを評価し、その有用性を唱えている事例がある。前述したアンニョリは、図書館にはサードプレイスの要素が大事だと論じ、久野は、場所としての図書館の重要性を求めるウィーガンズが、サードプレイスに注視すべきであると指摘していることを紹介している。このようにサードプレイスという概念は、研究や実践活動において肯定的に取り入れられる傾向にある。

とりわけカフェやコミュニティスペースなどでの実態調査からサードプレイスを軸に新たな価値基準や役割を付加し、サードプレイスの再定義をする研究は多い。

本柳亨（2013）は、マクドナルドなどのファストフード店における調査を通して、オルデンバーグが定義するように個人商店での常連客や店主との会話が

なくても、一人でいることや勉強や仕事、友達同士の会話などを通じて利用者はサードプレイスとして意識しているということを論じている。オルデンバーグは、店主や利用者同士の「会話」を重視しすぎており、一人でいることの心地よさ、「憩い」もサードプレイスの重要な要素で、ファストフード店ではそれが起こっていることを論じている。

小林重人、山田広明（2015）は非常設型の「ひよっこりカフェ」の事例研究から、利用者が地元民でなくても地域の魅力となるメニューを用意したり、その場にいる他者と対話ができたりしているサードプレイスは地域への愛着が生まれると論じている。同じく山田、小林（2016）は、サードプレイスには1人でいたいという「個人志向」の利用者と、人とつながりたいという「社会志向」の利用者双方がいて、それら両方が共存する環境をつくるために雰囲気の良い空間づくりやコーヒー、音楽などが提供される。その居心地の良さが、両志向者間のコミュニケーションの促進と、利用者間の流動性を高めどちらかに傾くことのない場づくりが可能だと分析している。さらに山田等（2016）は、地域コミュニティの自発的形成的ためには、参加の規範意識が連帯誘因を生み出し、参加の拡大を引き起こすトリガーになり、自己効力感を生み、社会を統合し、多様な人々が共存できることが必要であると論じている。

田中瑞希、梅崎修（2015）は、サードプレイスの利用実態からの考察をするために神楽坂地域の喫茶店を分析・調査し、これら施設が地域コミュニティを形成するうえで有用であり、ソーシャル・キャピタルを醸成していることをあげている。田中等の研究は、店舗を従来型の喫茶店タイプ、多目的カフェ、セルフタイプと分け、席の配置、マスター等運営者とのコミュニケーションの有無を調査して常連客が喫茶店タイプと大型チェーンが展開しているセルフタイプに多いことを指摘している。さらに喫茶店タイプでは一人客が集まり、マスターや常連と交流しながらソーシャル・キャピタルを醸成しているのに対して、セルフタイプは知り合い同士の利用でソーシャル・キャピタルを構築しているとしており、カフェの形態によりソーシャル・キャピタルの形成過程が違うことを指摘している。

片岡亜希子、石山常貴（2017）は、地域コミュニティにおけるサードプレイ

スの役割を女性のためのコミュニティカフェの事例で分析し、継続性のあるサードプレイスはどのような経緯によって成立しているかに注目し、考察している。継続性の鍵は、当事者がおかれている社会的背景と個人的背景の組み合わせから生まれる当時者の問題意識であるとし、それらニーズを察知し、発展の段階と目的に合わせて設計し、地域のステークホルダーに働きかける必要性を指摘している。

このようにサードプレイスの研究では、その必要性を肯定的に捉えながら、解釈を拡大化、あるいは再定義化しているものが多い。しかしながら管見の限りでは、オルデンバーグが本来唱えたかった「インフォーマルな公共性」といった、社会の中で自生的に派生する必要性に言及しているものはない。サードプレイス空間の在り方や成立の仕方、その場での役割については多くの研究者が注目しているが、インフォーマルな公共性を柱に、計画性や制度に依拠することなく自然と生まれる場の大切さを論じているものはない。家庭でもない、職場でもない第3の場所、サードプレイスという言葉の魅力とその柔軟な解釈が可能のために、オルデンバーグが本来指摘したかった自生的かつ制度や計画からは生まれない場についての言及が少ないのである。

オルデンバーグ自身は、第二版へのはしがきでもっとも影響を受けた刊行物にジェイコブズの『アメリカ大都市の死と生』をあげており、現代の都市計画への批判が彼の指摘したかったことだったと思われる（2013、13頁）。日本語版の解説者、モラスキー（Michael Molasky）は、オルデンバーグがサードプレイスを「インフォーマルな中核的環境」（2013、59頁）と位置付けていることに留意すべきだとし、現在のアメリカでは「インフォーマル」と「パブリック」とは相反する言葉に感じられるようになっていると指摘している（2013、479頁）。オルデンバーグが、サードプレイスを通して現代社会に警鐘を鳴らしたかったことは、近代的な都市計画は機能を求め、用途を純化させていったために地域社会が自然と生み出していた人とのつながりや、それを生み出す場がなくなってしまうという点であり、そのことを指摘するために「インフォーマルな中核的環境や公共性」といった表現をしたのである。

2-4-4 プレイスメイキングについて

場づくりを論じる中で、「プレイスメイキング」という言葉も近年多用されている。例えば広場や公園など公共性のある空間での場づくりなど、「居場所」や「サードプレイス」という言葉が使われる場合よりも広い空間に関して言及するとき用いられている事例が多い。三友奈々（2015）は、「米国では『プレイスメイキング』という考え方の下、公園や広場、街路といった公共空間の計画・設計、運営が行われ、周辺の住民や就業者のサードプレイスとなっている。また、都市部の公的空間の一部は訪問者や観光客の『居場所』になっている例も見られる」とし、その定義を「すべての人々が住んでいる地域において、自分自身を見つける場所に変換していく方法」としている。園田聡（2019、18頁）は、「プレイスメイキングを、都市デザインの手法として具体的に定義すると、『都市空間において愛着や居心地のよさといった心理的価値を伴った公共空間を創出する協働型のプロセス・デザインの理念および手法』である」としている。つまり単なる空間デザインではなくそのプロセスを大事にしている「協働型」が鍵になっている。園田は、アドボカシー・プランニング²⁰の手法がプレイスメイキングの源流になっているとしてボトムアップで地域の環境改善がなされることの価値を見出しており、有効な都市デザイン手法であるとしている。園田は、米国デトロイトの事例をはじめ日本国内でも埼玉県鴻巣市の北鴻巣駅前の事例など具体的な検証事例からもその有用性を唱えている。他にも吉村輝彦（2018）は、愛知県東海市太田川駅前広場における「まちなかピクニック」を事例に、それら今後の公共的空間における利活用への提言をしている。

このようにプレイスメイキングという言葉の使われ方は、居場所やサードプレイスより広い公共の場所を意味していることが多く、またその場所を作り出す過程を手順化することに焦点をあてているといえる。

²⁰ 米国のポール・ダビドフが提唱した住民主体、とりわけ生活弱者の意見を取り入れたまちづくりの手法

2-4-5 コミュニティ形成と場づくりの小括

場づくりに関する研究は、理論的、哲学的思索をする事例もあるが、本研究では実践的な場づくりに関する視点を柱に分野を横断して俯瞰した。具体的には、「居場所」「サードプレイス」「プレイスメイキング」といった先行研究を通覧した。

「居場所」というのは、「いどころ」というように独特の意味合いがある場づくりの概念であり、その場にいる人の主観、他者との関係性、空間性が重要な要素となっている。ただ萩原が指摘したように、制度としての「居場所」には、設置者側の概念を押し付ける危険性もある。従来の公共施設とは対照的で、生活者の共通課題を取り込むのが「居場所」であり、場づくりの担い手が、従来の公共施設や企業や地縁組織ではなく、課題や人脈に精通している人に代わってきているという指摘や、「個」が「公共」を支えるようにもなっているという視点もある。これらは、制度に依拠しないまちライブラリーを活用した場づくりのテーマであり、実践での結果を検証したい。

「サードプレイス」は、オルデンバーグが唱えて以来、各方面で使われるようになった概念であるが、多くの研究は、「サードプレイス」の役割についての議論が中心である。本柳のファストフードでもサードプレイスを意識している者もいるという指摘や、山田等のサードプレイスには「個人志向」の者と「社会志向」の者がおり、両者が共存できる手法が大事だという指摘である。しかしながらオルデンバーグが課題にしたまちの中に生まれる「インフォーマルな中核環境」については、十分な検証がされているとはいえ、本研究では、オルデンバーグが唱えたインフォーマルな場所づくりを研究の軸にして進めていきたい。

「プレイスメイキング」は、三友や園田が言っているように公園などのような公的空間に、市民が愛着を持てるようにしていくための協働型手法だといえる。アドボカシー・プランニングの一種であり、「居場所」や「サードプレイス」より広い公共空間等を市民参加型で作りに出す手法だと解釈できる。このように市民の手で成し遂げる場づくりは、本研究での検証課題と同一ともいえる。実践での結果を確認していきたい。

2-5 本研究の取組み

2-5-1 先行研究における本研究の位置づけと検証の枠組み

ここまで社会基盤づくり、社会制度から見た「図書館」の役割、コミュニティ形成と場づくりの視点と本研究を取り巻く研究を社会基盤整備、図書館、場づくりを柱に通覧してきた。広く各分野にまたがりながら見渡したのは、1つの専門的な分野だけに拘泥すると「場づくり」という技術的な視点にとらわれてしまい、「個」の活動を活かした社会への道程を見失いがちになると考えたからである。

社会基盤整備の視点から都市計画のように法律や制度に裏打ちされた「理想的な計画案」は、生活者の視点と乖離が起こりがちであることをみてきた。この中でジェイコブズの視点に注目したのは、都市を生態系の一部とみなし、観察する姿勢である。場づくりの研究にも応用が可能であると判断した。

また宇沢の「社会的共通資本」、特に制度資本の概念をとりあげたのは、社会的共通資本形成の担い手を「専門家」だけに委ねなくても生活者自らが担えることもあるのではないかと考えたからである。実際、図書館の歴史を見ても、私的な図書館が時代ごとに役割を果たしてきている部分もあり、私的な図書館であるまちライブラリーを活用しうると判断した。また公共図書館に求められ始めている地域の場づくりという社会課題は、まちライブラリーのような制度に縛られない私立図書館の方が、運営上の可能性が広がると想定できる。

場づくりに関する研究では、「居場所」「サードプレイス」「プレイスメイキング」といった先行研究を通覧した。意味するところに違いはあるが、「場づくり」においてオルデンバーグの「インフォーマルな中核環境」を見出すことが本研究の課題であると考えた。

以上のように、先行研究を通した位置づけをしたうえで本研究の枠組みを、以下のようにする。場づくりにおいて個々の人の役割を見出し、自生的に活動が連坦することで社会基盤になりうる鍵を見出すため、公共図書館に求められている地域の場としての役割を、私的な図書館であるまちライブラリーの実践活動を通して実現しうるかを証していくことを枠組とする。結果として公共図書館にも求められる地域の場づくりを補完し、個々の生活者が地域社会に参画しうる環境とはいかなるものかを見つけ出すこととする。

2-5-2 本研究における場づくりの定義

2-4 で概括してきたように場づくりに関しては多方面からの考察がなされ、提案もされているが、本研究では、場づくりを以下のように理解する。

①「場」とは、「空間と人」の関係性を伴って生まれる。

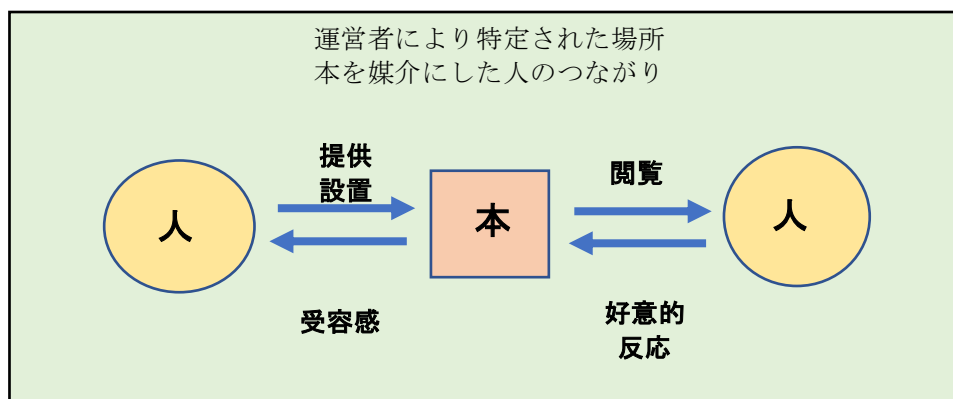
哲学的視点と実践的視点に分かれているが、本研究では、後者の立ち位置で、空間と人がおりなす実践的場づくりを主眼とする。

②本研究では、サードプレイス、居場所、プレイスメイキングを区別しない。

それぞれ意味合いの違いはあるが、共通しているのは、単なる空間的な場だけを意味するのではなく、上記①の意味合いを含んでいると解釈し、作られた場に対しての用語として「場づくり」という言葉に集約する。

以上の視点からまちライブラリーを活用した場づくりとは、本を媒介にし、その場で人と人との関係性が生まれる場であり、本研究ではその場づくりを対象とする。下記、図 2-1 に模式化した。本を提供、設置した者に他者が閲覧等をし、好意的な反応をした場合に本を提供した者が受容感を持ち、両者にとって「場」としての意味合いが生まれるなど、本を媒介として一定期間活動が継続された時に「場づくり」がなされていくものと想定する。このような想定のもと本研究では、個々の人がこれら場づくりに参加し、どのように関与していくのかに着目して考察を進める。それぞれの場がつくられる実践的な過程を研究対象にし、場づくりの形成過程を検証していく。

図 2-1 まちライブラリーにおける場づくり



2-5-3 まちライブラリーの定義

まちライブラリーの定義をする前にマイクロ・ライブラリーとまちライブラリーについて整理する。「マイクロ・ライブラリー」は、第2章2-3-3に記述したように筆者が2013年に「マイクロ・ライブラリーサミット」を開催した際に初めて定義、使用した小さな図書館の総称であり、国立国会図書館論文集『カレントアウェアネスNo. 319』（2014）の中で運営目的別に次の5つのカテゴリー①図書館機能優先型、②テーマ目的別型、③場所の活性型、④図書館連携型、⑤コミュニティ形成型に分類した。まちライブラリーは、⑤のコミュニティ形成型が多いとした。

しかし、その後まちライブラリーも多様な展開をし、既存のマイクロ・ライブラリーもまちライブラリーに加わってきたため現状では、その運営目的による違いよりも、まちライブラリーのネットワークに入っているか否かの違いになっている。まちライブラリーのネットワークに特段の加入条件はなく登録申請をすれば無料にて登録され、都道府県、地区町村別に検索が可能なホームページにて公開されている²¹。ただし、閉鎖されたものや公開を希望しないものはホームページには掲載されていない。

まちライブラリーを定義すると以下のようなになる。

- ①まちライブラリーとして申請し、登録されたもの。
- ②所有・寄贈された本を活用した場（移動型、臨時型も含む）を設定している。
- ③設置された本を閲覧または貸出できるようにしている。

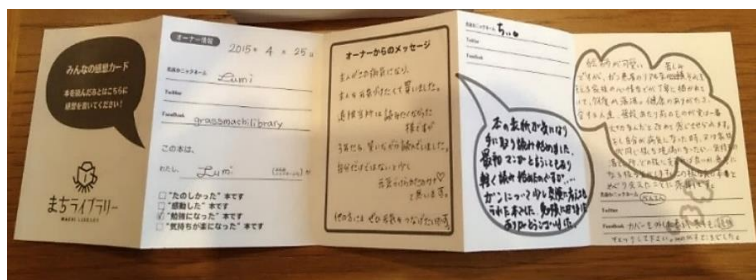
以上が基本で、設置された場でなんらかのイベントをやっているところもある。本の集め方、テーマや蔵書数、貸出をするか、しないかも含めて運営者側が自由に決められるマイクロ・ライブラリーである。

²¹ まちライブラリーホームページ URL
<http://machi-library.org/where/>

2-5-4 まちライブラリーの仕組み

本研究で活用するまちライブラリーの具体的な仕組みは、①自己所有または寄贈された「本」を共通の本棚におく、②設置する場所は問わないが各運営者が見つかる、③設置された本を閲覧・貸出し、可能なら更なる寄贈を受けつつ、場合によってはその場でイベントを企画する。以上の方法を原則としながらも各地の運営者が独自の方針で運営することを促した。また図2-2のような「みんなの感想カード」を本に付与し、それによって寄贈者、閲覧者間でメッセージを交換できる仕組みを考案し、本を媒介に人から人へとメッセージが伝わり、人との出会を感じられるようにした。その場所に集う人に寄贈を促し、それぞれ他者と共有したい「本」を置いてもらうことにより、各人の考えていることを表出しながら「居場所」の雰囲気を作っていくことをねらったのである。ただし、その採用は各運営者の自由選択とした。

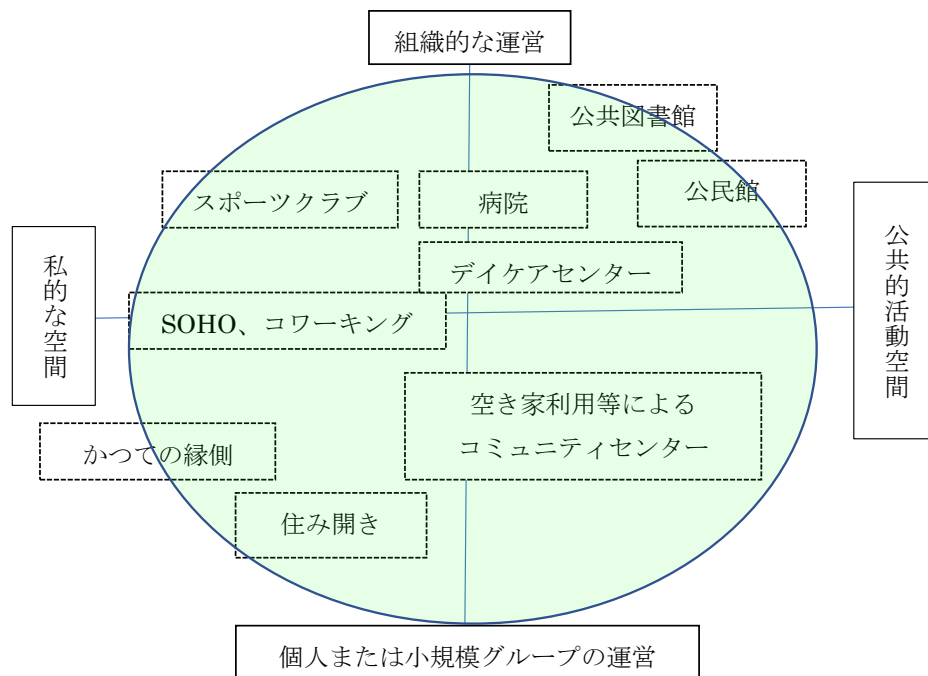
図2-2 まちライブラリーの「みんなの感想カード」



実施するにあたって以下のような想定をし、図2-3にあるような広がりを見測した。①個人でも実施でき、多様な運営主体と活動内容が生まれると想定した。社会的活動に参加したいと考えても敷居が高いと思っている人が、気軽に地域の場づくりに参画し、図2-3の縦軸にあるように「個人または小規模のグループ」でも参加できれば多様性を生みやすいと仮定した。さらに「組織的な運営」にも応用できれば、社会的な広がりも可能になると想定した。②生活空間に「埋め込み型」で設置することで、様々な生活空間に広がることを想定した。専用の場所を持つことによる負荷を軽減し、図2の横方向にあるように「公共的活動空間」であろうと「私的な空間」であろうと多様な場所での展開を予測した。③まちライブラリーとして登録すると無料で個々の活動をホームページ等に掲載し、その存在を見えるようにして自生的な伝搬が生まれると想定した。

個々の活動が社会の中で埋没しないようにし、模倣や連携が生まれれば結果的に社会的な広がりを持ち得るとしたのである。特に本研究においては、筆者自身が組織の一員としてではなく、個の立場で活動を立ち上げ、その活動が他にどのような影響を及ぼし、社会的な広がりや意義を見出さうかを当該社会実験の目標にも据えている。これらの想定をもとに始めた活動が、まちライブラリーを活用した場づくりである。

図 2-3 まちライブラリーの展開想定



2-5-5 本研究の方法

前節で述べた仕組みで運営する、「本」を活用した「場づくり」である「まちライブラリー」を考案し、社会実験を実施し、参与観察することを本研究における手法とした。そのうえで具体的には、以下のような方法で調査を行い、その結果から地域の場づくりにおける個の役割を明らかにしていきたいと考える。

<具体的方法>

- ①まちライブラリーの実践活動を実施する。
- ②活動実績を整理し、その実態を調査する。
- ③まちライブラリーの運営者、利用者等にアンケート調査を実施する。
- ④上記運営者、利用者ヒアリングを実施し、質的調査手法によりその活動動機や活動後の変化、現状での課題、今後の方針を聴取する。
- ⑤調査をもとに地域の「場づくり」で得られた知見を整理する。
- ⑥地域社会形成に関しての提言をまとめる。

なお実践活動は、2011年4月から開始し、2019年9月まで観察を続けた結果を3章以降に記すこととする。また、まちライブラリーを開始する以前の状況についても、場づくりに発展する過程を理解するために一部触れることにする。

第3章 まちライブラリーの概括とアンケート結果

本章では、3-1 から 3-2 にまちライブラリーの概括を、3-3 に運営者に対するアンケートを、3-4 に利用者に対するアンケート結果を記載する。概括を通してまちライブラリー全体の状況を把握し、アンケートを通して運営者、利用者像を把握することを目途とする。

3-1 まちライブラリーの沿革と全体概況

3-1-1 活動の沿革

まちライブラリーの活動について時系列に沿って整理する。まちライブラリー活動が立ち上がるまでの変遷を見るために、活動開始前の 2005 年から 2019 年までを表 3-1 に一覧で記した。時代区分については、活動が置かれた状況を俯瞰しやすくするために筆者の視点で付した。

一部詳細は第 4 章に譲るが、活動が始まるまでを「活動前期」と「構想準備期」に分けた。「活動前期」は、現在のまちライブラリーとは視点の違うビジネスモデルとして「場づくり」を目指していた。関与していた六本木アカデミーヒルズを離籍した筆者は、アカデミーヒルズのような知的文化拠点を全国各地に広げることを目指し「サードプレイス研究会」を有志で立ち上げ、構想を練り上げた。その構想とは、小規模なライブラリースペースとコワーキングスペースやカフェを併設しながら収益を上げられる場所をチェーン展開して広げていくというものであった。具現化のモデルとして筆者の実家が所有していた大阪府中央区の小規模な賃貸ビルの一角、30 m²程度の場所に「IS ライブラリー」を設置し、当該ビルの入居者や近隣住民、事業者に対して打ち合わせや会議、イベント等で利用してもらえるようにした。しかし、この構想を広げるには投下資本や運営する組織の問題等、実現するのが困難であるということで消滅した。

次に 2010 年から 2011 年 3 月頃までを「構想準備期」とした。限界集落を半年にわたり 80 カ所近く歩きまわり、各地の人々をつながりを持つ若者や早稲田大学大学院教授の友成真一等と 2010 年に「まち塾@まちライブラリー実行委員会」をつくり、構想づくりと実験的な活動準備を開始した。「活動前期」

と違うのは、ビジネスモデルの展開を捨て、ボランティア活動として各地でまちづくりや地域に関心のある人を巻き込み、それらの人々が主体的に集まりをするような動きを作ろうとした点である。具体的には「まち塾」と称する、地域で活躍する人を囲んだ勉強会を中心に活動を展開した。大阪地区では「大阪まち塾」、東京地区では「東京まち塾」と称して活動に興味を持ってくれる人や場所に赴き、その場で10名から30名程度の勉強会イベントの実施を構想した。

次の段階は「実験設置期」とした。「まち塾@まちライブラリー」という教育活動と場づくりの両方を求めている時期である。前述の「まち塾@まちライブラリー実行員会」の構想を大阪地区、東京地区で実施し、協力してくれた場所に参加者が持ち寄った本を置いて、「まちライブラリー」として登録していったのである。その際に、寄贈本に付ける感想カードなどのアイデアが萌芽しだす。東京、大阪それぞれ数カ所程度でまち塾が実施され、各々10カ所程度の協力設置者が現れることになる。この段階が2011年4月から2012年末くらいまでである。

「活動確立期」は、大阪府立大学のまちライブラリーが開設された2013年4月からである。現在のまちライブラリーの骨格ややり方がこの時期に確立した。「蔵書ゼロ冊からの図書館」という育てる図書館というコンセプトと、本を持ち寄るイベント「植本祭（しょくほんさい）」が考案され、本に付ける感想カードのシステムも一部で定着しはじめた時期といえる。さらに大阪府立大学のまちライブラリーでは、カフェと称する小規模な本を持ち寄るイベントが定着し、年間に250回以上実施されるようになった。また2013年8月には、「マイクロ・ライブラリーサミット」が大阪府立大学のまちライブラリーで実施され、「マイクロ・ライブラリー」という呼称が普及しはじめた。当該活動は、2014年に『マイクロ・ライブラリー図鑑』として出版され、さらなる広がりのかげとなっていく。

2015年1月に拙著『まちライブラリーのつくりかた』が発刊され、同年4月には東急不動産が企画、運営している商業施設「もりのみやキューズモールBASE」にまちライブラリーが設置されることになった。この時期から「活動展開期」に入る。個人のまちライブラリーはもとより企業、行政からの設置要望

も増えて社会の多様な場面でまちライブラリーが展開されるようになった。それ以降、立命館大学大阪いばらきキャンパス（2015年）、三井不動産（2016年）、北海道千歳市の千歳タウンプラザ（2016年）、岐阜市立図書館や津山市立図書館による「まちライブラリー」（2016年）、NTT都市開発株式会社によるサービス付き高齢者向け住宅（2017-2018年）、東大阪市文化創造館（2019年）、町田市南町田再開発（2019年）へとつながっていく。

また関西地区では、2015年より「まちライブラリーブックフェスタ」と称する、本を持ち寄る地域イベントも実施されるようになった。まちライブラリーはもとより公共図書館、書店など約300カ所でそれぞれの本に関するイベントを実施し、1万人を超える人たちがそれぞれの場所のイベントに参加していくなかで本を通じて人と出会ったり、まちの魅力を発見したりすることを目指している。以上が、まちライブラリー活動が始まる前から現在までの沿革である。

表 3-1 まちライブラリー関連活動の沿革

時代区分	年	主な活動
活動前期	2005年	サードプレイス研究会立ち上げ
	2008年	大阪府中央区のビル内に IS ライブラリー設置
構想準備期	2010年	まち塾@まちライブラリー実行委員会設置
	2011年	東京、大阪で「まち塾@まちライブラリー」活動
実験設置期	2011年	IS ライブラリーを IS まちライブラリーに改称
活動確立期	2013年	大阪府立大学サテライトキャンパスに まちライブラリー開設 (蔵書ゼロ冊からのライブラリー)
	同上	「マイクロ・ライブラリーサミット」開始
	2014年	『マイクロ・ライブラリー図鑑』発刊
活動展開期	2015年	『まちライブラリーのつくりかた』発刊 商業施設「もりのみやキューズモール」及び 立命館大学大阪いばらきキャンパスに まちライブラリー誕生
		関西地区「ブックフェスタ」開始
	2016年	北海道千歳市に中心市街地活性化の目途で まちライブラリー@千歳タウンプラザ誕生
	2017年	行政、企業のまちライブラリー増加 三井不動産 ららぽーと湘南平塚 岐阜市立図書館、津山市立図書館など
	2018年	NTT 都市開発 サービス付き高齢者向け住宅
	2019年	東大阪市文化創造館、町田市南町田再開発など

3-1-2 まちライブラリーの全体概況

前節でまちライブラリーの沿革を記載したが、ここではさらに活動の概況と活動を通して得られたデータの整理をする。2011年4月より2019年3月までの活動結果である。

都道府県別設置の推移は以下の表3-2のようになった。登録累計数は、2019年3月末で680カ所となっている。内、閉鎖は73カ所となり全体の10.7%が閉鎖している。地域的には北海道から九州、沖縄まで、海外は、米国シアトルに2カ所とフィリピン、シンガポールと広がっている。海外の登録者も現地にいる日本人である。このように広範囲に広がっているが、都道府県別に見ると大阪府の185を筆頭に、兵庫県98、東京都76、神奈川52となっている。47都道府県で過去に一度も設置されていない県は、秋田、福島、山口、愛媛、長崎の5県のみである。ただし、全国に広がってはいるとはいえ近畿圏では累計合計が341件で全体の50.1%、関東圏には同じく累計合計が172件で全体の25.1%となり、偏在していることが分かる。

全国にある公共図書館(3277館²²)との設置数比較をすると、まちライブラリーの全国設置累計数から閉鎖数を除いた607カ所は、公共図書館の18.5%となる。大阪府内では147館²³の公共図書館があるが、まちライブラリーは、大阪府内の累計数から閉鎖数を除いたものが152カ所になり、数の上では公共図書館と拮抗していることになる。

年度で見ると2013年から数が増えている。特に兵庫、大阪での伸びが顕著で、大阪府立大学 I-site なんばに設置されたまちライブラリーが影響していると推察される。2015年度からさらに設置数が増加しているが、商業施設であるもりのみやキューズモールに設置されたことが、影響していると思定される。また2014年、2015年に発刊された関連書籍も影響していると思われる。ただ2017年は、初めて前年の設置数を下回っている。またエリア別で見ると関東圏の伸びが大きく、この年に初めて近畿圏より多く、52カ所が登録された。

²² 第2章2-3-1に記載した図書館協会のデータ数。

²³ e-Stat(政府統計の総合窓口)による社会教育調査2018年度版を参照。(2019年12月参照)
<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00400004&tstat=000001017254>

表 3-2 都道府県別設置推移

(開設年は毎年4月から翌年3月末)

	都道府県	合計	閉鎖	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
北海道	1 北海道	10					1		3	6	
東北	2 青森	3						1	1	1	
	3 岩手	8						1	3	3	1
	4 宮城	4							3	1	
	5 秋田	-									
	6 山形	2							1		1
	7 福島	-									
関東	8 茨城	3						1			2
	9 栃木	2						2			
	10 群馬	2							1	1	
	11 埼玉	21	2		1			5	5	5	5
	12 千葉	16	1				1	2	5	3	5
	13 東京	76	15	8	5	5	4	14	13	18	9
	14 神奈川	52				1	4	5	11	24	7
中部	15 新潟	6				2	1	1		1	1
	16 富山	4								2	2
	17 石川	1									1
	18 福井	4					2		1	1	
	19 山梨	4					1			3	
	20 長野	4								1	3
	21 岐阜	13	2				1	2	8	1	1
	22 静岡	7					2	1	1		3
	23 愛知	19			1			3	10	4	1

	都道府県		合計	閉鎖	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
近畿	24	三重	2						1		1	
	25	滋賀	7				1	2	3		1	
	26	京都	22	2			1	2	6	5	5	3
	27	大阪	185	33	8	13	19	31	35	29	17	33
	28	兵庫	98	9		2	22	7	16	29	8	14
	29	奈良	22	1		1	1	0	4	7	6	3
	30	和歌山	5	1			1		2	1	1	
中国	31	鳥取	4						2	2		
	32	島根	4				1			2	1	
	33	岡山	9	1				1	2		5	1
	34	広島	5	1				2		1	2	
	35	山口	-									
四国	36	徳島	11				1	4	1	4	1	
	37	香川	3							1		2
	38	愛媛	-									
	39	高知	1									1
九州	40	福岡	23	3			1	1	1	17	1	2
	41	佐賀	2							1	1	
	42	長崎	-									
	43	熊本	1									1
	44	大分	1								1	
	45	宮崎	5					1			2	2
	46	鹿児島	3							2		1
	47	沖縄	2	2					1		1	
海外	48	海外	4				1		2	1		
合計			680	73	16	23	56	69	112	169	130	105
累計数					16	39	95	164	276	445	575	680

次に設置箇所と運営者を分析する。まず運営主体の分析をすると表 3-3 のようになる。個人 62.4%、団体 17.1%、企業、医療法人などの民間法人 14.9%、図書館 3.2%、行政 1.3%、学校 1.2%となっている。個人でも実施可能と想定したが、多くの個人が運営者になっている。この場合の個人には、小規模な個人会社も含まれているが少なくとも個人の意図で始め、組織的な意思決定を必要としない人をこの分類に入れた。団体とは、NPO 法人や商店街組合など団体の意思決定でやっているものをいう。さらに企業をはじめ、図書館や学校、行政組織まで運営主体が広がっている。

表 3-3 まちライブラリーの運営者分析

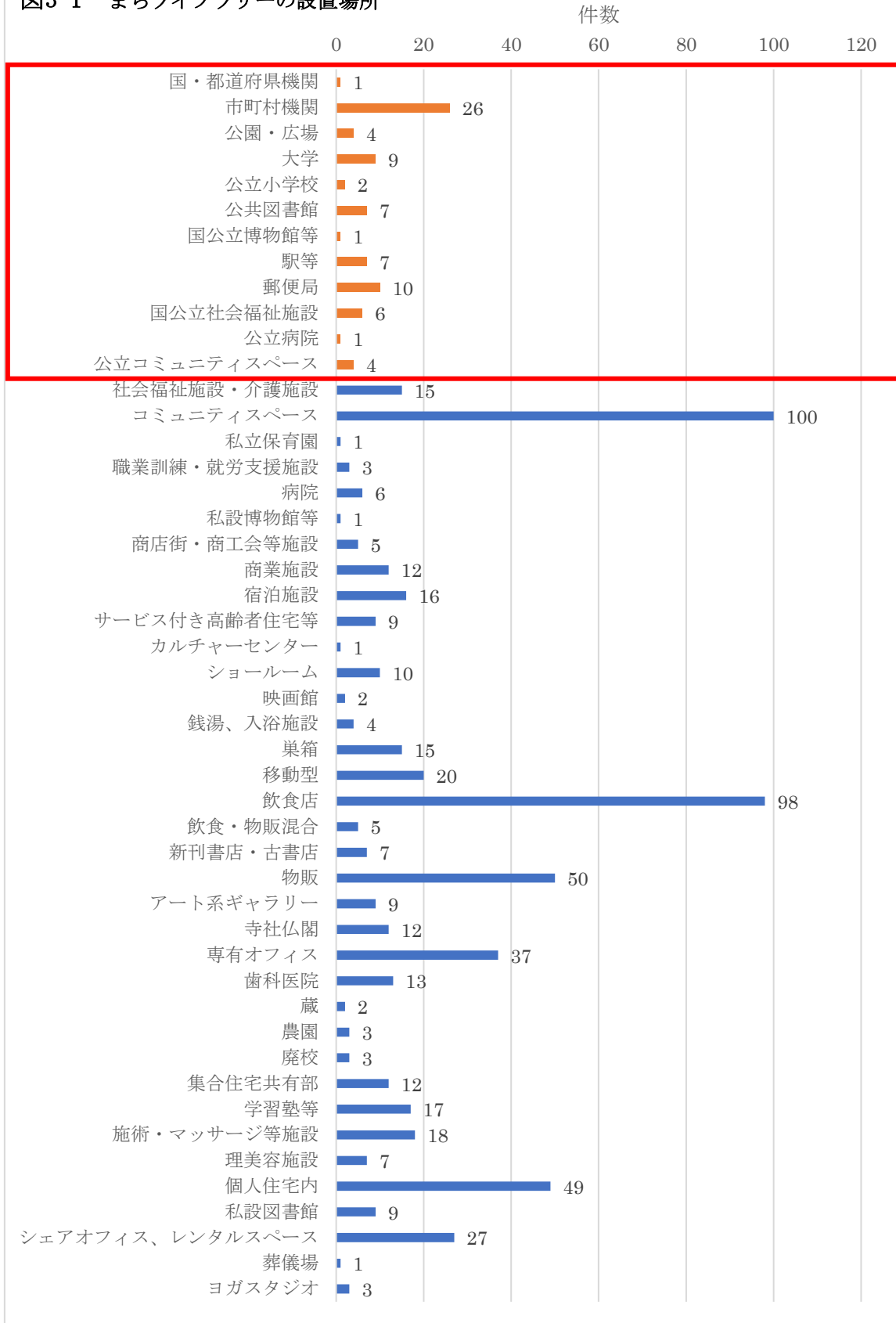
分類	件数	割合
個人	424	62.4%
団体（任意、NPO 等）	116	17.1%
企業、医療法人等	101	14.9%
図書館 ²⁴	22	3.2%
行政	9	1.3%
学校	8	1.2%
合計	680	100%

次に設置箇所は以下の図 3-1 のようになる。この中で公共空間は 78 カ所で 11.5%、残り 88.5%が民間施設に設置されている。公共空間としては、学校、図書館、市役所、公民館、駅や公園などである。民間施設としては、店舗、コミュニティ施設、病院、寺社、自宅、事務所をはじめ銭湯、農園、蔵など多岐にわたる。

なお本論文では、2011年4月から2019年3月末までに登録された参考資料1に記載したまちライブラリーを検証対象にする。閉鎖、非公開のものも含まれるが、それぞれ情報開示には配慮して記載した。

²⁴ 図書館が申請して、図書館以外の民間の施設に設置したものも数に含み 22 件とした。
図 3-1 にある公共図書館の数 7 件は、館内及び類似施設に設置された数を意味する。

図3-1 まちライブラリーの設置場所



3-2 まちライブラリーの事例

2-5-4 で記述したようにまちライブラリーは、個人から組織まで、小規模なものから大規模なものまで、場所や用途も多様なところに広がっていった。前述の図 3-1 を補完する意味でいくつかの事例を紹介する。なお、紹介するものは、公共的な場所、私的な場所の中から数が多いものを代表的に記載する。

3-2-1 公共的な場に設置された事例

公共的な場に設置されているものは、図 3-1 に示したように市町村機関、郵便局、駅、大学、図書館などに分布している。状況を示すために以下に具体的な事例を紹介する。

<事例 1> 行政施設に設置されている事例

行政主体で地区センターや公民館への設置も行われており、地域のコミュニティづくりに応用されている。香川県丸亀市では、市が設置した地区センターにまちライブラリーを設置し、指定管理者と自治会の有志によって運営されている。従来の地区センターがともすれば高齢者の集まり場所になりがちだったため子育て世代など若い世代の利用促進を目的にしている。その他には、埼玉県鶴ヶ島市では市役所のロビーや男女参画センターなどに設置されている。岩手県雫石町では、図書館司書が主体となり公民館に設置されている。このように自治体が主導し、公共施設にまちライブラリーを設置する場合は、公共施設の無機質で硬い雰囲気をやわらげ、利用促進または利用者層の拡大を狙う事例が多い。

<事例 2> 郵便局に設置された事例

横浜市緑区を中心に 10 カ所の郵便局が、利用者を対象にまちライブラリーを設置している事例である。郵便局は、明治以来、地域の社会的共通資本として位置付けられ整備されているが、近年その存在が薄れつつある中で地域の人に利用されやすい郵便局になることを目指してまちライブラリーが設置された。

＜事例 3＞ 公共図書館が主導する事例

公共図書館がまちライブラリーを設置する事例も全国で7事例ある。岐阜県岐阜市立図書館では、館内の本棚の一部を「みんなの本棚」と称して、利用者が選んだ本を1カ所に集めて公開している。同時に図書館周辺の商店街などの店舗にまちライブラリー専用の本棚を設置し、各店主がお気に入りの本を配架して来訪する人に貸出している。その他にも福岡県宮若市では、図書館の本をクリニックや歯科医院に貸出し、それを市民が利用できるようにしている。岡山県津山市では、図書館職員がまちの中に適地を見つけまちライブラリーを設置する支援をしている。これらに共通するのは、公共図書館がコミュニティ形成や本のある環境の整備をまち全体に広げていくことを目途としていることである。

＜事例 4＞ 大学施設に設置された事例

大阪府立大学では、サテライト施設 I-site なんばに2013年4月、まちライブラリーが設置された。「蔵書ゼロ冊からの図書館」として本棚までを大学が設置し、市民が本を集めていく方式で、育てる図書館として話題になった。立命館大学は、大阪いばらきキャンパスに新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学は、付属の大学図書館にてまちライブラリーを併設している。

以上、公共的な場に設置されているまちライブラリーについて記載した。運営者は、行政が直接運営するよりも図書館や指定管理者、市民団体等が運営している事例が多い。また郵便局が連携しながらまちライブラリーを実施する事例や、大学が当該大学のキャンパスや関連施設にて運営する事例もある。

3-2-2 私的な場に設置された事例

私的な場に設置されているものは、図 3-1 に示したように多岐にわたっている。いくつか具体的な事例を紹介する。

<事例 1> コミュニティスペース併設型

個人または団体が、空き店舗や空き家を使って地域のコミュニティスペースとして運営しているところに併設される事例である。コミュニティスペースは空間的には、空き家を利用したようなものから専用に設置されたものなど多岐にわたるが、地域の生活者に開放され、イベントの場としても利用されている事例といえる。

<事例 2> 店舗併設型

個人店主の店舗内にまちライブラリーが設置されている事例である。カフェ、バー、レストランなど飲食店舗に設置される事例や物販店舗に設置される事例がある。店舗内に置かれている本棚やテーブルなどを利用している。

<事例 3> 居宅開放型

居宅を開放してまちライブラリーにしている事例もある。離れを利用している事例もあるが、居宅の一部を開放している事例もある。4 章で詳述する亡妻の本を活用して活動している事例や、玄関先などを利用して図書を閲覧できるようにしている事例もある。

<事例 4> 事務所併設型

自らの仕事をまちライブラリーにしている事例である。オフィスビルの一角にサロンのように設置されたものや、建築事務所、会計事務所、特許事務所のように専門的な仕事をしている事務所の一角をまちライブラリーにしているところがある。

＜事例 5＞ 医療施設・歯科医院併設型

病院、クリニック、歯科医院、鍼灸院やヨガ関係の施設に併設されている。診察待合室内に小規模な本棚を設置している事例が多い。中には待合室全体を本箱で囲み、図書館のような雰囲気を創出しているところもある。また待合室を利用して定期的にイベントを開催するなど、健康普及のためには地域とのつながりが大事だという意識からまちライブラリーを始めている事例が多い。

＜事例 6＞ 移動型・巣箱型

公園や特定の場所に日時を決めて移動型で実施するまちライブラリーもある。その場に本を持ち寄り、紹介しあって貸し借りしたりしながらつながりを見つける方法である。

また屋外に巣箱のような形をした本箱を置き、自由に本の貸し借りをしている。米国の Little Free Library の創設者であるボル (Tod Boll) が始め、米国のみならず全世界で 90 カ国、9 万カ所以上に広がっている²⁵。ボルから筆者への依頼により 2014 年から日本でも広げるためまちライブラリーが窓口となっている。現在、屋内との併設も含めて 66 カ所に設置されている。第 4 章に後述するまちライブラリーホンノウ会の活動はこれに属する。その他にも 10 歳の小学生や図書館司書が近所の自宅や神社境内に設置している事例もある。

＜事例 7＞ 寺・神社設置型

寺社は、境内への立ち入りが自由な場合が多く、この境内地内に設置している事例がある。また、本堂や社務所を利用して設置している事例もあり、その併設型もある。古くから地域に根付いている場所であり、その利点を活用しているところもある。

²⁵ Little Free Library ホームページより
<https://littlefreelibrary.org/about/> 2019 年 9 月 15 日参照

＜事例 8＞ 書店設置型

本を販売する新刊書店、古本屋などに併設されている事例である。入口付近等に区分けされた本棚をまちライブラリーにしている事例もある。また本を持ち寄るイベントだけをしているところもある。並存させる効果を求めている事例もあれば本好きの定着を目指しているところもある。

＜事例 9＞ その他の事例

銭湯、農園、廃校、蔵などもある。その場所がもつ本来の役割と図書の掛け合わせの意外性があり、このような場所にも設置されるのがまちライブラリーの特色ともいえ、個々の人のアイデアが活かされている事例である。

＜事例 10＞ 商業施設に設置された事例

商業施設に設置されている事例は、2015 年、東急不動産が開発した商業施設「もりのみやキューズモール BASE」に誕生したまちライブラリーが代表である。約 50 店舗からなる商業施設であるが、同商業施設は地域の利用者の定着を図るべくスポーツと心の健康をテーマに、屋上にランニングコートやフットサルコートを設置し、階下にまちライブラリーを設置することになった。それ以外にも三井不動産が運営するららぽーと湘南平塚や富山県高岡市にある百貨店にも設置されている。

＜事例 11＞ 古いビルをリノベーションした事例

北海道千歳市では、中心市街地にあった閉鎖された大型商業ビルをリニューアルして全館をコミュニティ施設として運営する中で、もりのみやの 4 倍規模になる約 1000 m²のまちライブラリーが誕生した。当該施設は、かつてまちの中心商店街の中にあったデパートを北海道空港株式会社の子会社が改修したものである。宮崎県小林市にも地元のまちづくり会社が新築した複合ビルにまちライブラリーが誕生した。規模も千歳について大きなもので 500 m²ほどある。当該建物は、スーパーとアパート、商工会議所などを併設している。いずれの事例も中心市街地活性化への期待がかかっている。

＜事例 12＞ 高齢者施設等福祉施設に併設された事例

サービス付き高齢者向け住宅など高齢者住宅や福祉施設への設置も各地で見られるようになった。NTT 都市開発は、サービス付き高齢者住宅と同じ敷地内に一般分譲マンションを併設し、分譲マンションに入居する人が将来、サービス付き高齢者向け住宅に入居できるようになっている。当該サービス付き高齢者向け住宅側にカフェが設置され、まちライブラリーはそのカフェに併設されている。カフェは、サービス付き高齢者向け住宅入居者の食事を提供する場でもあり、同時に地域にも開放されている。その他、大阪などでもサービス付き高齢者向け住宅に併設されている事例や高齢者ならびに障がい者のデイケアセンターなどにも設置されている。ともすれば閉鎖的になりがちな高齢者や障がい者の施設を地域に開かれたものにするためにまちライブラリーを併設している。

以上、私的な場所に設置されている事例を紹介した。個々に多様な事例があるといえる。また小規模なものが多いが、中には企業が運営しているものもあり、大規模な商業施設や集合住宅への設置事例もある。

3-2-3 筆者が運営に関与している事例一覧

筆者が運営に関与しているのは4カ所、一般社団法人まちライブラリーで関与しているものは21カ所となる。なお21カ所のうち3カ所は閉鎖している。

表 3-4 筆者が関与しているまちライブラリー (2019年8月末時点)

関与者	数	設置名	設置場所・設置形態
筆者個人	4	IS まちライブラリー	オフィス
		IS まちライブラリー@奥多摩	住宅
		IS まちライブラリー@世田谷上北沢	巣箱
		まちライブラリー@奥多摩ブックフィールド	廃校
一般社団法人まちライブラリー	21	まちライブラリー@大阪府立大学	大学サテライト
		まちライブラリー@立命館 OIC	大学キャンパス
		まちライブラリー@もりのみやキューズモール	商業施設専用区画
		まちライブラリー@箕面キューズモール	同上巣箱
		まちライブラリー@尼崎キューズモール	同上巣箱
		まちライブラリー@千歳タウンプラザ	コミュニティ施設
		まちライブラリー@ウエリスオリーブ武蔵野関町	サ高住内カフェ
		まちライブラリー@ウエリスオリーブ東村山富士見町	サ高住内カフェ
		まちライブラリー@ウエリスオリーブ町田中町	サ高住内カフェ
		まちライブラリー@ウエリスオリーブ成城学園前	サ高住内カフェ
		まちライブラリー@ウエリスオリーブ津田沼	サ高住内カフェ
		まちライブラリー@ウエリスオリーブ新小岩	サ高住内カフェ
		まちライブラリー@ウエリスオリーブ鷺沼松が岡	サ高住
		まちライブラリー@ウエリスオリーブ鎌倉岩瀬	サ高住
		まちライブラリー@ららぽーと湘南平塚	商業施設
		まちライブラリー@ピッツァフォルノカフェ阿佐ヶ谷	カフェ
		ネスカフェドルチェゲスト Café & Library	商業施設カフェ
		まちライブラリー@リエゾンサロン北越谷	歯科医院
		*閉鎖カフェ 3カ所	カフェ

3-3 まちライブラリー運営者に対するアンケート結果と考察

3-3-1 アンケートの方法

前述の添付参考資料1のまちライブラリー一覧に記載されたまちライブラリー運営者680件を対象に調査をするが、運営者のアンケートに関しては、筆者が関与している表3-4のまちライブラリー25件に関しては、対象から除外した。

アンケート実施概要

対象者 まちライブラリー運営者655件（閉鎖されたものを含む）

（2011年4月～2019年3月末に登録された全件）

実施日 2019年7月10日から7月24日（2週間）

方式 メールでの案内によるWEB回答方式

回答数 106件（有効回答率 16.2%）

3-3-2 アンケートの結果

アンケート回答者概況は、以下の順に記載する。

- ①アンケート回答者概況
- ②知覚ルート
- ③始めた理由 1番目から3番目の動機
- ④運営体制方式
- ⑤運営状況の自己評価
- ⑥運営体制別自己評価の比較
- ⑦運営者の交流、人間関係への影響

①アンケート回答者概況

運営者の性別は、男性：女性＝45.3%：54.7%で、若干女性が多い。年齢は、20代から70代まで分布している。20代2.8%、30代23.6%、40代26.4%、50代26.4%、60代15.1%、70代5.7%となっている。職業は、自営業28.3%と一番多く、次に会社員17.9%、NPO等団体職員10.4%、パート・アルバイト9.4%、図書館職員8.5%となっている。自営業者が多いのは、自営店舗で開設する事例が多いからと推察される。図書館職員が一定数いることも興味深い。蔵書数については、10冊未満から5000冊以上までかなりの幅があり、一番多い層が200冊から500冊未満19.8%、次に100冊から200冊未満17.0%、50冊から100冊未満15.1%、10冊から30冊未満12.3%、30冊から50冊未満11.3%、10冊未満4.7%と小規模なものもある。逆に1000冊以上が12.3%と比較的大きなまちライブラリーもあり、蔵書数の量にかかわらずそれぞれに運営されている。定期的の開館しているところが72.1%で不定期開催が26.9%になっている。

②知覚ルート

表3-5には、まちライブラリーを知った理由を整理している。「講演会などで」30.5%と一番多く、次いで「知人の紹介」29.5%、「既存のまちライブラリーを訪ねて」23.8%、「メディア」17.1%、「まちライブラリー関連書籍」が14.3%である。関係者からの声掛けや情報提供が比較的影響している。

表3-5 知覚ルート（複数回答 N=105）

知覚ルート	比率
既存のまちライブラリーを訪ねて	23.8%
講演会などで	30.5%
知人の紹介	29.5%
メディア	17.1%
まちライブラリー関連書籍	14.3%
その他	19.0%
未回答	0.0%

③始めた理由 1番目から3番目の動機

次に表3-6にまちライブラリーを始めた理由について強い動機順に3つ挙げてもらった。結果は、1番目の動機としては「地域や施設を活性化させたかった」が41.5%と一番多く、次に「本が好きだったから」が20.8%となり、「人が来るようにしたかった」は11.3%になる。2番目の動機として挙げられた中では「人が来るようにしたかった」が26.4%と一番多く、次に「地域や施設を活性化させたかった」が18.9%となり、「本を読んでもらいたかった」と「人と出会いたかった」はそれぞれ15.1%になった。3番目に挙げられた中では、「本を読んでもらえるようにしたかった」、「人が来るようにしたかった」がそれぞれ17.1%で、次に「本が好きだったから」が15.2%で「落ち着ける場を創りたかった」が14.3%となった。運営者の意図としては、地域や施設の賑わいや人の来訪を求めている人が多く、そのために好きな本が活用できればという意図を持っている人が多いと考えられる。一部であるが、人との出会いとか落ち着ける居場所を求めている人も3番目の回答の中では14%程度いることが判明した。

表3-6 始めた理由1番目から3番目の動機 (N=106)

始めた理由	1番目	2番目	3番目
本が好きだったから	②20.8%	8.5%	②15.2%
本を集め、残したかった	0.0%	3.8%	2.9%
本を読んでもらいたかった	5.7%	③15.1%	①17.1%
人が来るようにしたかった	③11.3%	①26.4%	①17.1%
人と出会いたかった	4.7%	③15.1%	8.6%
会話を楽しみたかった	2.8%	0.0%	3.8%
落ち着ける場を創りたかった	3.8%	5.7%	③14.3%
地域や施設を活性化させたかった	①41.5%	②18.9%	11.4%
何かやるのに適当だった	0.9%	3.8%	3.8%
その他	8.5%	2.8%	5.7%

(表注) 1番目から3番目列の割合の多い順に各①～③の記述付記

④運営体制方式

次にまちライブラリーの運営体制について調べると表 3-7 にあるように運営者 1 人で運営している「お一人様型」が 46.7%、運営者とボランティアで運営している「並走型」23.8%、専属スタッフを置いて運営している「専属型」が 10.5%となっている。大半の運営が一人で活動していることが分かった。逆に専属の担当者がいるところは少数である。

表 3-7 運営体制方式 (N=105)

運営体制方式	比率
運営者一人で運営「お一人様型」	46.7%
運営者+ボランティアで運営「並走型」	23.8%
専属のスタッフで運営「専属型」	10.5%
その他	19.0%

⑤運営状況の自己評価

運営者の自己評価は表 3-8 になる。「非常にうまく運営できている」が 2.8%、「うまく運営できている」が 22.6%で合わせて 25.4%になる。「どちらともいえない」が 33%で、逆に「あまりうまく運営できていない」が 27.4%で「うまく運営できていない」の 14.2%と合わせると 41.6%になる。

約 4 分の 1 のグループが「うまく運営」でき、約 3 分の 1 が「どちらともいえない」で、「うまく運営できていない」は、4 割に達することが分かった。全体的に運営について自己評価は低く、運営に戸惑いがあることが分かった。

表 3-8 運営状況の自己評価 (N=106)

運営状況の自己評価	比率
非常にうまく運営できている	2.8%
うまく運営できている	22.6%
どちらともいえない	33.0%
あまりうまく運営できていない	27.4%
うまく運営できていない	14.2%

⑥運営体制別自己評価の比較

次に「お一人様型」、「並走型」、「専任型」のグループごとに運営内容について自己評価をしてもらったのが表 3-9 である。これで見ると「並走型」は、肯定的な評価が 28.0%で一番自己評価が高く、次に「専任型」27.3%となり、「お一人様型」が 10.2%になり、一番自己評価が低いのは「お一人様型」であることは明らかである。つまり仲間がいた方が自己評価は上がり、逆に一人でやっているると自己評価が低くなる傾向があることが分かった。

表 3-9 運営体制別自己評価の比較 (N=105)

運営体制	肯定的	どちらとも言えない	否定的
「お一人様型」 N=49	10.2%	40.8%	49.0%
「並走型」 N=25	28.0%	32.0%	40.0%
「専任型」 N=11	27.3%	27.3%	45.4%

⑦運営者の交流、人間関係への影響

まちライブラリーをやったことにより人間関係や人のつながりが増えたかという質問の結果は表 3-10 になる。「人の交流」は、71.5%の人が増えたと答えている。また「人間関係」も良好になったが 64.7%となっている。「近隣関係」は、60.0%の人が変化なしと答えているが、40.0%は増加したと答えている。

「まちへの愛着」は、45.7%の人が増したと答え、54.3%の人が変化なしと答えている。「本業への影響」は、52.4%が良好になったと答えており、変化なしの 41.0%を上回っている。まちライブラリーをやって人の交流や人間関係にプラスの影響が出ていることが分かる。

近隣関係は、関係者が近隣というより活動に興味があつてつながっている人が増えていると推察できる。まちへの愛着は、変化なしが過半を超えたが、45.7%がまちへ愛着を持てるようになっていることはまちライブラリー活動を通してまちへの関心が高まっている人もいるということの意味している。本業への影響もプラスに変化している人が過半数いるということは、自己肯定感が増した人もいると考えられる。

表 3-10 運営者の交流、人間関係への影響 (N=105)

運営体制	人の交流	人間関係	近隣関係	まちへの愛着	本業への影響
増加・良好	71.5%	64.7%	40.0%	45.7%	52.4%
変化なし	28.6%	35.2%	60.0%	54.3%	41.0%
減少・悪化	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.0%

3-3-3 運営者アンケートのまとめ

まちライブラリー運営者のアンケートからは、男性 45.3%、女性 54.7%と若干女性が多いが同じように活動に取り組んでおり、年齢も 20 代から 70 代まで多様な世代に広がっていることが分かった。また本の数は、200 冊から 500 冊未満の層が一番多いが、5000 冊を超えるものから 10 冊未満のものまで幅広く分布している。まちライブラリーを知るきっかけは関係者からの話を聞き、見たりしながら知った人が多く、伝聞によって広がる傾向が強い。また始める動機として一番目に「地域や施設の活性化」を挙げている人が 41.5%で、次に「本が好きだった」20.8%、「人が来るようにしたかった」11.3%となり、本に関心を持ちつつも場の活性化を期待している人が多いことが判明した。また、運営がうまくできていないと回答している者が 41.6%になっており、本を活用して場の活性化につなげられていないものが同数程度いることが判明した。

運営体制については、46.7%の人が一人で運営しており、個人でも始められるという想定通りであったが、仲間と共同で運営している人や専任の人を見つけてやっている人と比べれば運営に対する自己評価は低いことが分かった。また、運営者が、人の交流や人間関係において、きわめて多くが良好になったと回答している。しかしながら近隣関係については 60%の人が変化なしとしており、まちライブラリーでつながる人は近隣より少し広い範囲になっていると推察できる。さらにまちへの愛着も変化なしが 54.4%であるが、一方で 45.7%の人がまちへの愛着が増したとしている。一定程度の人は活動を通じてまちへの愛着を持つようになっていることも分かった。また本業にプラスになったが 52.4%となった点も、活動を通じて人の交流や人間関係が増えたことの肯定的な影響と考えられる。

3-4 まちライブラリー利用者に対するアンケート結果と考察

3-4-1 アンケートの方法

本節では、まちライブラリーを利用する人を対象としたアンケート調査の結果を記載する。調査対象は、表 3-11 の 13 カ所を対象とする。当該調査対象を選択した事由としては、運営する中間法人を通して運営状況が把握でき、また本の貸出に会員カードを発行しており利用者を特定しうる状況にあったからである。また該当の 13 カ所は、規模も中規模から大規模まで、さらに設置箇所が関西、関東、北海道、九州と各地域に分かれており、かつ施設も多様なことから様々な利用者を把握しやすいと判断した。

NO.1 は、筆者がまちライブラリーを始めた場所であり、個人所有の小規模ビルに設置されている。NO.2 と NO.12 は商業施設に併設されているが NO.2 は東急不動産のもりのみやキューズモール BASE、NO.12 は三井不動産のららぽーと湘南平塚に併設されている。NO.3 と 4 は大学の施設内に設置され NO.3 は大阪府立大学のサテライトキャンパス内、NO.4 は立命館大学大阪いばらきキャンパスの一角にある。NO.5 から 9 は NTT 都市開発が開発、運営するサービス付き高齢者向け住宅に設置されているカフェ内に併設されている。当該物件は同一敷地内に一般分譲マンションが併設されており、また当該カフェは外部利用もできる開放型のカフェである。NO.10 は、カフェを展開する会社が JR 阿佐ヶ谷駅の商業モール内で運営しているカフェ内に併設されている。NO.12 は、中心市街地にある元商業ビルをリノベーションしたものであり、まちライブラリーの規模としては全国最大である。NO.13 は、中心市街地に新築された複合ビルで小林市が設置したものである。

表 3-11 に取り上げた施設の設置地区、場所と特色を付記する。NO.1 から 12 は、各々設置者は別であるが一般社団法人まちライブラリーが運営あるいは運営に関与している。NO.13 は、現地に設立された株式会社 BRIDGE the gap が運営している。両団体ともまちライブラリーを設置者に代わって運営する中間法人になっている。

表 3-11 アンケート調査対象まちライブラリー

NO.	対象まちライブラリー	設置地区	設置場所	規模	会員数	回収数	常駐	カフェ
1	IS まちライブラリー	大阪市中央区	オフィスビル	100 m ²	714	74	○	×
2	もりのみやキューズモール	大阪市中央区	商業施設	240 m ²	5306	850	○	○
3	大阪府立大学	大阪市浪速区	大学サテライト	250 m ²	2146	118	○	×
4	立命館大学	大阪府茨木市	大学施設	80 m ²	892	65	○	×
5	ウエリス武蔵野関町	東京都練馬区	サ高住	100 m ²	34	5	×	○
6	ウエリス東村山富士見町	東京都東村山市	サ高住	100 m ²	57	22	○	○
7	ウエリス町田中町	東京都町田市	サ高住	150 m ²	207	35	○	○
8	ウエリス成城学園前	東京都調布市	サ高住	150 m ²	201	30	○	○
9	ウエリス津田沼	千葉県船橋市	サ高住	100 m ²	54	12	×	○
10	ピッツァカフェ阿佐ヶ谷	東京都杉並区	カフェ	100 m ²	105	38	×	○
11	ららぽーと湘南平塚	神奈川県平塚市	商業施設	100 m ²	296	97	×	×
12	千歳タウンプラザ	北海道千歳市	文化施設	1000 m ²	1912	256	○	○
13	TENAMU ビル	宮崎県小林市	複合ビル	500 m ²	564	36	○	○

(表注)

- ①規模は概算
- ②会員数は、本の貸出カード発行数。2019年6月末時点で発行数を各地の申告で記載。
- ③回収数は、アンケートの回収総数。メールでの会員へのアンケート、現場配布数両方を含む。
- ④常駐は、まちライブラリーの専属スタッフが常駐しているところが「○」、いないところは「×」で表記。
- ⑤カフェに○をつけたものはカフェを併設している。ただし、4番の立命館、11番のららぽーと湘南平塚は隣接した区画がカフェになっている。

＜アンケート対象の概要と特徴、運営者の特色と利用者像＞

アンケート対象まちライブラリーが設置された経緯、意図、運営の概要と特徴、運営者の特色と利用者像について以下に記述する。

アンケート対象1 ISまちライブラリー

初めてまちライブラリーが常設された場所である。第3章3-2-1活動の沿革で記したように大阪市中央区の小規模な賃貸オフィスの一角に2008年、30㎡程度のライブラリーが「サードプレイス研究会」で構想した場所として誕生する。2011年、その場所で「大阪まち塾」のイベントを数回実施し、さらに隣接の部屋をセルフビルディングで改修して「ISまちライブラリー」として両方の部屋を開放する。詳述は4章にゆずるが、当初は開館しても訪問者がいなかったため、月1回ペースで本と料理を楽しむ会「本とバルの日」を企画し運営していた。参加者は、毎回、10名から20名程度であるが、その間に蔵書数は約8000冊になった。日々の運営スタッフがつくまで日常の利用者はほとんどいなかったが、2017年4月より月曜から土曜まで開館するようにし、幼児を連れなお母さん、小学生、近隣で働く人、住民が利用を始めた。その結果、2018年1月より6月までで、延べ1238名が来館し、月平均206名の利用者が生まれている。

ISまちライブラリー諸元

- ①設置年：2008年（前身ISライブラリー）
2011年（拡張時にISまちライブラリーに改称）
- ②設置者：筆者（設置当時）
- ③運営：筆者（2011年-2017年3月）
一般社団法人まちライブラリー（2017年4月-現在）
- ④設置場所：大阪市中央区 アイエスビル 3階
- ⑤規模：約100㎡
- ⑥利用者：近隣住民、勤務者、アイエスビルテナント
貸出可能（登録料無料）
- ⑦会員数：714名（2019年6月末現在）
- ⑧累計蔵書数：約8000冊
- ⑨貸出：有 期間（1か月）

アンケート対象2 もりのみやキューズモール

東急不動産が企画、運営している商業施設「もりのみやキューズモール BASE」に設置されたまちライブラリーである。テナント数約 50 店舗で構成され、スポーツと健康をテーマに近隣商圈を大切にしたコミュニティ型商業施設を目指している。屋上には、ランニングコートやフットサルコート 2 面が設置されスポーツ好きの利用者を開拓する意図がある。同様にまちライブラリーを設置することで、本を核に日常の利用者を呼び込もうという意図である。

設置及び運営のコストは、東急不動産が負担し、まちライブラリーの運営は一般社団法人まちライブラリーが運営している。カフェが常設されピザやコーヒー、ビールなど飲食が可能であり、また FM 局のサテライトスタジオも併設され、毎週土曜日にはライブ放送が実施される。子どもコーナーもあり親子連れが気軽に利用できる場所になっている。面積は約 240 m²で、壁一面、天井まで本棚が設置されている。蔵書数は、現在は累計 1 万 6000 冊を超える。会員によるイベントは、月に 20 回程度実施される。会員は、2019 年 6 月末現在で 5306 名になり、来館者数も同時点で 63 万人を超えるまでになった。年間平均にすると 15 万人程度となるので大阪府中央区の公共図書館島之内図書館の 2018 年度年間利用者 14 万人を超えている²⁶。

もりのみやキューズモール諸元

- ①設置年：2015 年
- ②設置者：東急不動産株式会社
- ③運営：一般社団法人まちライブラリー（2015 年 4 月-現在）
- ④設置場所：大阪府中央区 もりのみやキューズモール BASE
- ⑤規模：約 240 m²
- ⑥利用者：商業施設利用者、近隣住民、テナント従業員など
貸出可能（登録料 500 円）
- ⑦会員数：5306 名（2019 年 6 月末現在）
- ⑧累計蔵書数：約 1 万 6000 冊
- ⑨貸出：有 期間（2 週間）

²⁶ 大阪府市立図書館統計 2019 年 9 月 16 日参照
https://www.oml.city.osaka.lg.jp/index.php?page_id=447

アンケート対象3：大阪府立大学 I-site なんば

大阪府立大学が 2010 年、大学の都心拠点をもとめて難波のオフィスビルを賃借することが決定される。大学側が、本棚等空間的な整備をし、市民からの寄贈本を配架していく方式で立ち上がった。なお当該施設の開館に際し、一般社団法人まちライブラリーが設立され、当該法人が本の寄贈を受け付け、当該法人の所蔵本として本を貸出し、利用者の会員登録業務を担っている。さらに当該施設で登録会員が実施するイベントを受け付け、運営補助を実施する。

なお蔵書は、「植本祭」（しょくほんさい）と称したイベント形式で集める方式が確立する。本を持ち寄り、本棚にそれぞれ持ち寄った本を寄贈することを植樹祭に見立てた造語である。例えば、「子育て」「食」「旅」といったテーマを決め、それに類する本を持ち寄り、本棚に配架していくという方式で市民の参加意識と多様なグループ形成を意図したものである。2013 年 3 月、I-site 開館前に「植本祭」を実施し、2日にわたり 24 組のイベントを実施する。延べ 500 名を超える参加者があった。また 2013 年 8 月に前述した「マイクロ・ライブラリーサミット」を当該地で実施している。2019 年 8 月現在、累計寄贈総数は約 1 万冊に達している。年間利用者は、2013 年度から 2015 年度までの年間のイベントは平均約 250 件で約 7000 人が参加した。

大阪府立大学 I-site なんば諸元

- ①設置年：2013 年
- ②設置者：公立大学法人大阪府立大学（設置当時）
- ③運営：一般社団法人まちライブラリー（2013 年度-2015 年度）
大阪府立大学地域連携室（2016 年度-現在）
- ④設置場所：大阪市浪速区 大阪府立大学 I-site なんば 3 階
- ⑤規模：約 250 m²
- ⑥利用者：大学教職員、学生、登録した会員（登録料 500 円）
*2013 年度登録一時金 2500 円、退会時 2000 円返却
2014 年度、2015 年度 登録料 2500 円
2016 年度から現在価格
- ⑦会員数：2146 名（2019 年 6 月末現在）
- ⑧累計蔵書数：約 1 万冊
- ⑨貸出：有 期間（2 週間）

アンケート対象4：立命館大学大阪いばらきキャンパス

2015年4月、立命館大学大阪いばらきキャンパス開設に伴ってまちライブラリーが設置される。大学は、地域連携の柱として各種活動を支援しており、まちライブラリーをその柱の一つと位置づけている。規模は約80㎡であるが、地域のコミュニティセンターとして機能している。設置場所は建物の1階で、外の防災公園（茨木市の公園）に面している。累計寄贈数は、約2000冊で会員によるイベントやまちライブラリースタッフによる本を持ち寄る茶話会などが実施されている。また大学全体で取り組む地域イベントなどにも教職員、学生、地域住民と連携して対応している。

立命館大学大阪いばらきキャンパス諸元

- ①設置年：2015年
- ②設置者：学校法人立命館
- ③運営：一般社団法人まちライブラリー（2015年度-現在）
- ④設置場所：大阪府茨木市 立命館大学大阪いばらきキャンパス
- ⑤規模：約80㎡
- ⑥利用者：大学教職員、学生、登録した会員（登録料500円）
- ⑦会員数：892名（2019年6月末現在）
- ⑧累計蔵書数：約2000冊
- ⑨貸出：有 期間（2週間）

アンケート対象5～9：NTT都市開発ウエリスオリーブ

NTT都市開発のサービス付き高齢者向け住宅（以下、サ高住）は、「つなぐTOWNプロジェクト」として同一敷地内に同社が分譲するマンションが併設されている。分譲マンション購入者は高齢期になったおりに優先的にサ高住に入居する権利があり、両親等高齢期の家族をサ高住に入居させながら近傍で生活できる環境を提供している。サ高住内には「つなぐカフェオリーブ」を併設し、サ高住の入居者の食事提供のみならず近隣住民も飲食ができる。

運営体制は各所により違いがあり、東村山富士見町、町田中町、成城学園前については、まちライブラリースタッフが常駐している。武蔵野関町は、カフェのスタッフが兼務で寄贈、貸出の対応をしている。津田沼は常駐の担当者はおらず、まちライブラリーのスタッフが月2回訪問し、本の寄贈、貸出対応をしている。

NTT 都市開発ウエリスオリーブ諸元

- ①設置年：武蔵野関町（2017年）、他4カ所2018年
ただし成城学園前は、2018年マンションギャラリーに開設され、建物完成後2019年4月に現在地に移転
- ②設置者：NTT都市開発株式会社
- ③運営：武蔵野関町：カフェ運営会社
東村山富士見町、町田中町、成城学園前：
一般社団法人まちライブラリー
津田沼：月2回まちライブラリーの訪問運営
- ④設置場所：表3-11参照
- ⑤規模：約100㎡～150㎡、表3-11参照
- ⑥利用者：サ高住入居者、分譲マンション入居者、近隣住民他
- ⑦会員数：30名～200名程度 表3-11参照（2019年6月末現在）
- ⑧累計蔵書数：各拠点で約500冊～2000冊
- ⑨貸出：有 期間（2週間）

アンケート対象10：ピッツァカフェ阿佐ヶ谷

JR 阿佐ヶ谷駅ガード下に株式会社グリーンズプラネットオペレーションズが、ピッツァカフェとして出店した。業態としては飲食店であるが、館内各所に本棚が設置され、本に囲まれたブックカフェのような形でまちライブラリーが運営されている。カフェの店員が本の寄贈、貸出対応している。駅下であり、かつ本が目立つカフェとして駅周辺利用者が多く利用している。貸出、閲覧のみの対応も可能だが、多くは飲食利用をした来訪者が本の閲覧をしていると思われる。

ピッツァ フォルノ カフェ ビーンズ阿佐ヶ谷諸元

- ①設置年：2017年
- ②設置者：株式会社グリーンズプラネットオペレーションズ
- ③運営：同上、まちライブラリースタッフ月2回巡回
- ④設置場所：東京都杉並区
- ⑤規模：約100㎡
- ⑥利用者：カフェ利用者（貸出登録料500円）
- ⑦会員数：105名（2019年6月末現在）
- ⑧累計蔵書数：約1300冊
- ⑨貸出：有 期間（2週間）

アンケート対象 11：ららぽーと湘南平塚

2016年、三井不動産が企画・運営する商業施設「ららぽーと湘南平塚」内に設置された。当該施設は約250店舗ある大型の郊外型商業施設である。当該施設の書店前のコミュニティ施設「SHONAN TREE HOUSE」内に併設されている。居心地のよい空間でヒト・コト・モノから日常のヒントを得る場というコンセプトのもと、各種イベントを実施し、利用者が自由に利用できる空間を提供している。イベントが実施される週3日間だけ受付担当者が配置されているが、まちライブラリー専任のスタッフはおらず、月に2回まちライブラリースタッフが巡回し、会員登録ならびに本棚の整理等をしている。

ららぽーと湘南平塚諸元

- ①設置年：2016年
- ②設置者：三井不動産株式会社
- ③運営：ららぽーとエージェンシー株式会社、
まちライブラリースタッフ巡回
- ④設置場所：神奈川県平塚市
- ⑤規模：約100㎡
- ⑥利用者：商業施設利用者（貸出登録料無料）
- ⑦会員数：296名（2019年6月末現在）
- ⑧累計蔵書数：約1700冊
- ⑨貸出：有 期間（2週間）

アンケート対象 12：千歳タウンプラザ

北海道千歳市では、ビル所有者が中心市街地にあった元商業ビルをリニューアルし、コミュニティ施設として運営している。当該施設は、かつてまちの中心商店街の中にできたデパートであったが、デパート撤退後、北海道空港開発の子会社セントラルリーシングシステム株式会社が、商業施設として運営していた。しかし数年前に収益性の面から商業施設としての運営を断念し、2016年同社が、大規模なリニューアルをした。1階にまちライブラリーを含めてカフェ、イベントスペース、2階に子どもの遊び場などを設置して地域のコミュニティセンターに変え、現在にいたっている。設備投資、運営負担はビル所有会社が負担し、一般社団法人まちライブラリーが運営委託を受けて運営している。

千歳タウンプラザ諸元

- ①設置年：2016年
- ②設置者：セントラルリーシングシステム株式会社
- ③運営：一般社団法人まちライブラリー
- ④設置場所：北海道千歳市
- ⑤規模：約1000㎡
- ⑥利用者：商業施設利用者（貸出登録料500円）
- ⑦会員数：1912名（2019年6月末現在）
- ⑧累計蔵書数：約2万4000冊
- ⑨貸出：有 期間（2週間）

アンケート対象13：TENAMUビル

2017年、市街地活性化を目的として、宮崎県小林市にTENAMUビルが誕生した。当該建物は、地元の小林まちづくり会社が投資し、スーパーとアパート、商工会議所などを併設した複合ビルである。同建物2階には、TENAMU交流スペースとして大規模なまちライブラリーが設置された。「TENAMU（てなむ）」とは地元の方言で「一緒に」という意味で、市民の力を合わせてまちを活性化させようという思いから名付けられた。TENAMU交流スペースには、まちライブラリーの他に子どもスペース、フードスペースなどが併設されている。また同じ2階に商工会議所やビジネス支援センター、小林市法人会など民間団体が入居している。まちライブラリーの運営費は小林市教育委員会が負担し、地元にした地域おこし協力隊のメンバーが株式会社BRIDGE the gapを設立して運営にあたっており、市街地の活性化への応用が期待されている。

TENAMUビル諸元

- ①設置年：2017年
- ②設置者：小林まちづくり株式会社、小林市教育委員会
- ③運営：株式会社BRIDGE the gap
- ④設置場所：宮崎県小林市
- ⑤規模：約500㎡
- ⑥利用者：地域住民（貸出登録料500円）
- ⑦会員数：564名（2019年6月末現在）
- ⑧累計蔵書数：約5千冊
- ⑨貸出：有 期間（2週間）

アンケート実施概要

対象者 ①まちライブラリー会員

表 3-11 の NO.1 から NO.12 までの会員のうちメール保有者 9341
名に送信、うち送信できたものが 7074 通

(2019 年 7 月末までに登録された会員)

13 番は 145 名配信

②各地まちライブラリー利用者

メール不保持者の会員

(下記期間中に現地に来訪した利用者)

実施日 2019 年 7 月 10 日から 2 週間

方式 対象者①には、メールによる案内で WEB 回答方式

対象者②には、アンケート用紙配布による記述回答

回答数 合計 1642 件 (対象者①と②の合計)

会員回答は一部、現地配布からの回答もあるため明確な内訳は不明。

3-4-2 アンケートの結果

表 3-11 に記載したまちライブラリーの利用者に対するアンケート結果は以下の順に記載する。

- ① 地区の特性
- ② まちライブラリーの雰囲気
- ③ 利用頻度
- ④ 利用目的
- ⑤ 利用してよかったことについて
- ⑥ 利用して「人のつながり」を感じるか
- ⑦ 「人とのつながり」を感じる時は
- ⑧ まちライブラリーはどのような場所か

① 地区別の特性

全体の回答者のうち、会員登録をしている者が56.5%、非会員が43.5%であった。男女比は、表3-12にあるように全体では男性34.9%、女性65.1%である。ただし、地区によってかなり開きがあり、NO.2のもりのみやキューズモールやNO.6、8、9のウエリスオリーブのように女性が70%から80%を超えるなど女性が中心になっているところと、NO.3の大阪府立大学のように男性が75.4%と男性が多いところがある。運営時間、利用目的、設置している団体やその場所により違いが大きい。商業施設では買い物をする女性が多く、大阪府立大学では勉強会や大学院の利用者を中心に男性が多いと推察できる。

表3-12 まちライブラリー地区別男女比 (N数以外の数値は%)

NO.	まちライブラリー地区別()内略称	N数	男性 (%)	女性 (%)
全体	全体	1614	34.9	65.1
1	ISまちライブラリー (IS)	74	40.5	59.5
2	もりのみやキューズモールBASE (もり)	836	29.3	70.7
3	大阪府立大学 (府大)	118	75.4	24.6
4	立命館 OIC (立命)	64	35.9	64.1
5	ウエリスオリーブ武蔵野関町 (関町)	5	40.0	60.0
6	ウエリスオリーブ東村山富士見町 (東村山)	22	18.2	81.8
7	ウエリスオリーブ町田中町 (町田)	35	31.4	68.6
8	ウエリスオリーブ成城学園前 (成城)	30	20.0	80.0
9	ウエリスオリーブ津田沼 (津田沼)	12	16.7	83.3
10	ピッツァ フォルノ カフェ阿佐ヶ谷 (カフェ)	36	36.1	63.9
11	ららぽーと湘南平塚 (平塚)	92	33.7	66.3
12	千歳タウンプラザ (千歳)	254	37.0	63.0
13	TENAMU ビル (小林)	36	36.1	63.9

年齢は表 3-13 のように全体では 9 歳以下から 80 代以上まで分布している。9 歳以下 0.6%、10 代 9.4%、20 代 11.7%、30 代 21.0%、40 代 23.7%、50 代 15.0%、60 代 12.1%、70 代 5.4%、80 代 1.1%となっている。職業は、会社員 29.5%、専業主夫・主婦 17.6%、パート・アルバイト 9.3%、自営業 8.4%、無職 6.3%、大学・大学院生（短期大学ふくむ）4.5%となっている。ただし、各まちライブラリーにより男女比、年齢層、職業などは差異がある。それぞれの場所特性、施設特性による差が大きいといえる。なお、NO. は表 3-12 の地区と連動させており、以下の表 3-20 まで同様とする。

表 3-13 まちライブラリー地区別年齢比 (N 数以外の数値は%)

NO.	略称	N 数	9 歳	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代	80 代
全体		1618	0.6	9.4	11.7	21.0	23.7	15.0	12.1	5.4	1.1
1	IS	74	1.4	9.5	5.4	16.2	20.3	21.6	20.3	5.4	0.0
2	もり	837	0.1	4.7	11.7	24.0	27.4	16.7	10.5	4.3	0.6
3	府大	118	0.0	0.8	14.4	21.2	25.4	13.6	15.3	6.8	2.5
4	立命	64	0.0	3.1	6.3	7.8	25.0	25.0	23.4	9.4	0.0
5	関町	5	0.0	0.0	0.0	20.0	20.0	20.0	20.0	20.0	0.0
6	東村山	22	4.5	9.1	4.5	4.5	13.6	22.7	18.2	9.1	13.6
7	町田	35	0.0	0.0	11.4	20.0	17.1	8.6	20.0	17.1	5.7
8	成城	30	0.0	6.7	6.7	53.3	6.7	10.0	13.3	3.3	0.0
9	津田沼	12	41.7	25.0	8.3	0.0	16.7	8.3	0.0	0.0	0.0
10	カフェ	38	0.0	10.5	13.2	23.7	21.1	10.5	15.8	2.6	2.6
11	平塚	92	2.2	21.7	10.9	18.5	26.1	9.8	7.6	1.1	2.2
12	千歳	255	0.0	27.5	13.7	14.5	16.1	9.4	11.0	7.5	0.4
13	小林	36	0.0	5.6	22.2	25.0	19.4	11.1	5.6	8.3	2.8

② まちライブラリーの雰囲気

表 3-14 のように全体では「とても良い」52.1%、「良い」40.5%となり、合わせると92.6%の人が、雰囲気を肯定的に捉えている。「普通」6.3%、「あまり良くない」1.0%となっており、おおむね多くの人が肯定的に捉えている。地区により差異があるが、否定的な反応は少ない。

表 3-14 まちライブラリーの雰囲気について (N 数以外の数値は%)

NO.	略称	N 数	とても良い	良い	普通	あまり 良くない	良くない
	全体	1635	52.1	40.5	6.3	1.0	0.1
1	IS	74	47.3	45.9	5.4	1.4	0.0
2	もり	849	53.7	40.3	4.9	0.9	0.1
3	府大	118	48.3	44.9	5.1	1.7	0.0
4	立命	65	46.2	43.1	7.7	3.1	0.0
5	関町	5	60.0	20.0	0.0	0.0	20.0
6	東村山	22	59.1	27.3	13.6	0.0	0.0
7	町田	35	65.7	34.3	0.0	0.0	0.0
8	成城	30	70.0	30.0	0.0	0.0	0.0
9	津田沼	12	58.3	25.0	16.7	0.0	0.0
10	カフェ	38	34.2	60.5	5.3	0.0	0.0
11	平塚	96	37.5	40.6	19.8	2.1	0.0
12	千歳	255	54.5	38.4	6.7	0.4	0.0
13	小林	36	52.8	38.9	8.3	0.0	0.0

③ 利用頻度

表 3-15 にあるように月に 1 回以上利用する人は、全体では 51.5%になる。半年に数回程度の人は 15.0%、年に数回程度の人は 12.7%となっている。ほとんど利用しない人は 6.4%で、初めて来た人は 14.4%であった。過半の人が日常的に利用していると考えられる。ただし、NO. 5 関町、NO. 9 津田沼で月 1 回以上の利用者が 20.0%、25.0%となっており常連の利用が少ない。立地条件が悪いのと、当該地では常駐のまちライブラリースタッフがいない影響があると考えられる。他のまちライブラリーはおおむね 40%から 60%程度の人たちが常連利用者となっていることが分かる。

表 3-15 利用頻度について

(N 数以外の数値は%)

NO.	略称	N 数	月 1 回以上	半年に数回程度	年に数回程度	ほとんど利用しない	初めての利用
	全体	1626	51.5	15.0	12.7	6.4	14.4
1	IS	74	48.6	13.5	21.6	14.9	1.4
2	もり	843	47.5	17.2	13.0	5.3	17.0
3	府大	118	48.3	12.7	18.6	16.9	3.4
4	立命	65	47.7	21.5	20.0	10.8	0.0
5	関町	5	20.0	20.0	0.0	20.0	40.0
6	東村山	22	59.1	22.7	9.1	4.5	4.5
7	町田	35	54.3	17.1	8.6	0.0	20.0
8	成城	29	62.1	6.9	0.0	6.9	24.1
9	津田沼	12	25.0	50.0	16.7	8.3	0.0
10	カフェ	38	39.5	7.9	10.5	2.6	39.5
11	平塚	96	51.0	9.4	8.3	9.4	21.9
12	千歳	254	69.3	9.1	9.4	0.8	11.4
13	小林	35	54.3	14.3	8.6	11.4	11.4

④ 利用目的（複数回答）

表 3-16 に見るように全体では、本を読む 42.7%、カフェ 35.4%、勉強・仕事 28.2%、本を借りる 25.4%、休息 20.3%、イベント参加 18.1%、子連れで利用しやすい 13.1%、打ち合わせ 8.7%、本の寄贈 8.5%となっている。ただし、各地でその様相は大幅に違いがある。カフェのあるところではカフェの利用が一番になっているところが多いが、その中でも NO.2 もりのみやのように本の貸出が活発なところと NO.10 のカフェのように常駐のまちライブラリースタッフがいないところでは貸出は低調など、利用の仕方が分かれる。NO.12 千歳、NO.13 小林のように勉強や仕事の場として活用しているところもある。

表 3-16 利用目的について

(N 数以外の数値は%)

NO.	略称	N 数	本 閲覧	本 貸出	本 寄贈	勉強 仕事	打合 せ	イ 参加	イ 主催	カフ ェ	子連	交流	休息	他
	全体	1629	42.7	25.4	8.5	28.2	8.7	18.1	4.8	35.4	13.1	4.7	20.3	3.3
1	IS	74	39.2	45.9	8.1	21.6	18.9	20.3	5.4	2.7	5.4	13.5	21.6	6.8
2	もり	847	50.2	30.6	7.9	20.2	7.0	12.3	3.2	50.8	17.2	2.5	19.8	3.2
3	府大	117	42.7	15.4	8.5	56.4	4.3	30.8	4.3	1.7	0.0	6.0	15.4	1.7
4	立命	65	33.8	35.4	23.1	12.3	7.7	58.5	21.5	1.5	1.5	12.3	21.5	4.6
5	関町	5	0.0	40.0	40.0	0.0	0.0	60.0	0.0	60.0	40.0	0.0	20.0	20.0
6	東村山	22	50.0	36.4	27.3	13.6	13.6	22.7	0.0	59.1	13.6	13.6	18.2	4.5
7	町田	35	37.1	37.1	14.3	8.6	20.0	14.3	11.4	62.9	20.0	11.4	31.4	0.0
8	成城	29	37.9	31.0	10.3	6.9	6.9	10.3	0.0	75.9	41.4	3.4	20.7	6.9
9	津田沼	12	16.7	58.3	25.0	33.3	8.3	0.0	0.0	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3
10	カフェ	37	27.0	5.4	5.4	37.8	5.4	0.0	0.0	67.6	8.1	2.7	18.9	2.7
11	平塚	96	26.0	9.4	5.2	28.1	5.2	27.1	1.0	4.2	8.3	1.0	29.2	1.0
12	千歳	254	33.9	11.0	5.1	50.4	11.8	18.9	7.9	18.5	7.9	6.3	18.9	3.1
13	小林	36	33.3	5.6	2.8	50.0	25.0	33.3	11.1	11.1	16.7	8.3	25.0	5.6

(表注) ①質問項目の「イ参加」はイベント参加、「イ主催」はイベント主催の意味し、「子連」は子ども連れが利用しやすいからの略である。

⑤ 利用してよかったことについて (複数回答)

表 3-17 のように利用してよかったことは、全体では居心地が良い 59.7%、思いもよらない本に出会えた 38.9%、勉強・仕事がかどった 26.1%、本を通して新しい知識を得られた 21.1%、イベントに参加して新しい知識を得られた 14.8%、イベントに参加して新たな人とつながりができた 12.7%、スタッフと交流できた 12.5%、探していた本に出会えた 11.3%、日常の利用の中で、新たな人とつながりができた 6.4%となった。各地で違いがあるものの、全体的には居心地が良いと回答しているところは多い。

表 3-17 利用してよかったことについて (N 数以外の数値は%)

NO.	略称	N 数	本探求	本意外	本知識	イ知識	イ人	日常人	居心地	勉強仕事	ス交流	その他
	全体	1562	11.3	38.9	21.1	14.8	12.7	6.4	59.7	26.1	12.5	3.8
1	IS	73	11.0	54.8	38.4	19.2	16.4	11.0	52.1	19.2	27.4	2.7
2	もり	808	13.7	45.0	22.8	10.5	7.9	2.8	64.1	19.7	6.6	4.1
3	府大	118	9.3	36.4	26.3	30.5	21.2	5.1	53.4	50.8	21.2	3.4
4	立命	65	9.2	53.8	32.3	46.2	35.4	20.0	33.8	4.6	33.8	4.6
5	関町	4	0.0	25.0	0.0	50.0	25.0	0.0	50.0	0.0	0.0	25.0
6	東村山	22	9.1	31.8	4.5	4.5	31.8	18.2	45.5	13.6	40.9	4.5
7	町田	33	6.1	51.5	18.2	15.2	6.1	9.1	66.7	6.1	30.3	12.1
8	成城	25	12.0	24.0	12.0	4.0	12.0	0.0	84.0	8.0	8.0	0.0
9	津田沼	12	25.0	41.7	8.3	8.3	8.3	8.3	25.0	33.3	25.0	8.3
10	カフェ	36	2.8	44.4	22.2	0.0	0.0	2.8	72.2	22.2	2.8	0.0
11	平塚	86	8.1	15.1	12.8	19.8	4.7	1.2	53.5	34.9	3.5	2.3
12	千歳	246	8.1	22.8	13.8	13.4	18.7	13.0	56.5	45.1	14.2	2.8
13	小林	34	8.8	11.8	5.9	17.6	32.4	23.5	64.7	35.3	35.3	2.9

(表注) 質問項目は以下の通り。本探求：探していた本に出会えた、本意外：思いもよらない本に出会えた、本知識：本を通して新しい知識を得られた、イ知識：イベントに参加して新しい知識を得られた、イ人：イベントに参加して新たな人とのつながりができた、日常人：日常の利用の中で新たな人とのつながりができた、居心地：居心地が良い、勉強仕事：勉強・仕事がかどった、ス交流：スタッフと交流できた

⑥ 利用して「人のつながり」を感じるか

表 3-18 で見ると全体では、「どちらともいえない」46.9%、「はい」34.3%、「いいえ」18.8%になっている。過半近くの人はずながりを感じるまでにはいたっていないが、3分の1の34.2%の人が感じていることになる。場所ごとの違いがあり、比較的小規模なNO.1のISやNO.4から6、9のサ高住ではその傾向にある。NO.12、13の千歳、小林では規模が大きいわりに「はい」と回答している層が多い。

表 3-18 人のつながりを感じるか

(N数以外の数値は%)

NO.	略称	N数	はい	どちらともいえない	いいえ
	全体	1604	34.3	46.9	18.8
1	IS	74	54.1	39.2	6.8
2	もり	832	25.7	51.7	22.6
3	府大	118	42.4	41.5	16.1
4	立命	65	64.6	29.2	6.2
5	関町	3	66.7	0.0	33.3
6	東村山	22	72.7	22.7	4.5
7	町田	34	47.1	50.0	2.9
8	成城	26	38.5	50.0	11.5
9	津田沼	12	50.0	41.7	8.3
10	カフェ	37	13.5	64.9	21.6
11	平塚	95	24.2	51.6	24.2
12	千歳	252	42.5	39.3	18.3
13	小林	34	55.9	41.2	2.9

⑦ 「人とのつながり」を感じるときは（複数回答）

どのようなときに「人とのつながり」を感じるのかは、以下の表 3-19 のような結果になった。全体ではスタッフと会話 52.4%、イベントに参加 44.7%、他の来館者と会話 32.2%、本の感想カードを利用 28.9%となっている。この傾向は、多くのまちライブラリースタッフが常駐または訪問対応しているところといえる。例えば津田沼は、スタッフが常駐していないが月に 2 回訪問するだけでもその傾向は顕著である。逆に不在のカフェや平塚などは相対的に低い。

表 3-19 「人とのつながり」を感じるときは（N 数以外の数値は%）

NO.	略称	N 数	他の来館者と 会話	スタッフ と会話	イベント に参加	本の感想 カード利用	その他
	全体	553	32.2	52.4	44.7	28.9	4.7
1	IS	39	38.5	74.4	25.6	28.2	5.1
2	もり	218	14.7	44.5	40.4	43.1	5.0
3	府大	52	30.8	61.5	59.6	19.2	5.8
4	立命	41	70.7	58.5	56.1	29.3	0.0
5	関町	2	50.0	50.0	50.0	0.0	0.0
6	東村山	17	47.1	64.7	41.2	29.4	0.0
7	町田	16	50.0	81.3	31.3	6.3	6.3
8	成城	9	77.8	66.7	33.3	11.1	0.0
9	津田沼	6	50.0	83.3	16.7	50.0	0.0
10	カフェ	6	0.0	50.0	0.0	66.7	16.7
11	平塚	23	21.7	34.8	65.2	13.0	4.3
12	千歳	107	42.1	48.6	48.6	14.0	5.6
13	小林	17	52.9	52.9	64.7	5.9	5.9

⑧ まちライブラリーはどのような場所か（複数回答）

利用者はまちライブラリーをどのような場所と捉えているのかは、表 3-20 の通りとなった。全体では一人でゆったりするところ 58.0%、読書等に集中 44.0%、友人と会話 20.2%、イベントに参加 17.2%、人から刺激 14.2%、スタッフと会話 9.4%、他の来館者との交流 7.3%、イベント主催 5.2%となっている。一人での利用や友人などとの利用が主体となりつつも、イベント参加や人から刺激を受ける場所となっていることが分かる。スタッフや他の来館者との会話が少ないがこれらが得られた時には、つながりを感じやすいともいえる。

表 3-20 まちライブラリーはどのような場所（N 数以外の数値は%）

NO.	略称	N 数	人から刺激	一人で*1	読書等に集中	友人と会話	ス会話*2	他来館者交流	イ参加*3	イ主催*4	その他
	全体	553	14.2	58.0	44.0	20.2	9.4	7.3	17.2	5.2	8.5
1	IS	39	31.0	39.4	42.3	15.5	29.6	14.1	25.4	5.6	5.6
2	もり	218	10.1	64.1	46.0	18.8	3.4	3.5	11.5	3.4	10.3
3	府大	52	24.6	63.6	63.6	9.3	12.7	11.9	28.0	6.8	1.7
4	立命	41	53.1	28.1	15.6	9.4	28.1	32.8	46.9	21.9	9.4
5	関町	2	33.3	33.3	33.3	0.0	33.3	100.0	100.0	0.0	0.0
6	東村山	17	4.5	50.0	27.3	22.7	40.9	9.1	22.7	0.0	13.6
7	町田	16	2.9	62.9	28.6	28.6	28.6	8.6	14.3	5.7	8.6
8	成城	9	14.8	63.0	29.6	37.0	14.8	11.1	18.5	0.0	11.1
9	津田沼	6	0.0	36.4	54.5	36.4	27.3	9.1	9.1	9.1	9.1
10	カフェ	6	2.7	62.2	45.9	16.2	5.4	0.0	0.0	0.0	0.0
11	平塚	23	2.3	62.5	40.9	18.2	4.5	0.0	22.7	0.0	4.5
12	千歳	107	16.1	49.0	44.2	26.9	8.8	10.0	18.1	8.4	8.8
13	小林	17	19.4	44.4	27.8	52.8	30.6	13.9	33.3	11.1	5.6

（注）質問項目は以下の通り

*1：一人でゆっくり *2：スタッフとの会話 *3：イベントに参加

*4：イベントを主催

3-4-3 利用者アンケートのまとめ

まちライブラリー利用者のアンケートから見ると、13 地区全体でまちライブラリーの雰囲気はおおむね肯定的に捉えられている。また日常的に利用されているということも、大半のまちライブラリーで月 1 回以上利用する人が多いことから推定される。しかしながらその利用方法は、それぞれに違いをみせている。同じように本を核にした場であるが、その利用のされ方は場所ごとに相当違いがあるといえる。

例えば、カフェのあるところではカフェの利用が主で、次に本に関する回答が多い。また NO. 3 府大、NO. 11 平塚、NO. 12 千歳や NO. 13 小林は、勉強・仕事の利用も多い。人のつながりについては、全体では「どちらとも言えない」と回答した人が 46.9%で約半数になっているが、34.3%は「はい」と回答しておりまちライブラリーで人のつながりを感じている人も相当数いることが分かった。地区別にみても「はい」と回答したところは 13 カ所中 8 カ所になっており、比較的小規模な場所や千歳や小林地区のように大都市でないところでは規模が大きなまちライブラリーであっても、人とのつながりが醸成される場所になっていると言える。人のつながりを感じる時は、「スタッフとの会話」が 52.4%となっておりイベント参加や他の来館者との会話より多い。あなたにとってまちライブラリーがどういう場所かという問いに 58.0%の人が「一人でゆっくりする場所」や「読書などに集中する場所」44.0%と回答していることから一人でゆっくりし、勉強や仕事をする場所として利用しながらもまちライブラリーのスタッフと会話があると、非常に肯定的に捉えやすいと考えられる。

以上からまちライブラリーは、多様な場所にあるだけでなく多様な利用がされており、それも場所や規模によって違いが生まれていることが分かった。また多くの人との交流を求めているのではなく、目の前にいるまちライブラリースタッフや他の来館者との軽い会話が、つながりや居心地のよさにつながっていると考えられる。

3-5 まちライブラリーの概括とアンケート結果の小括と考察

まちライブラリー概括より判明した小括

- ① まちライブラリー運営者は、個人が 62.4%で個人からでも実施できる活動であることが明らかになった。NPO 等の団体が 17.1%、企業などの法人が 14.9%、図書館、行政、学校が 5.7%となり、小規模から大規模まで、個人から組織までに広がりがあった。
- ② まちライブラリー設置数は、全国で累計 680 カ所（2019 年 3 月末現在）となり、広がりをもつことが判明した。ただし、既に閉鎖された箇所が 73 カ所になる。また地域によるばらつきがある。例えば大阪地区では、累計 185 カ所（閉鎖 33 カ所）を有するだけでなく大阪府立大学、立命館大学、もりのみやキューズモールなど拠点となるまちライブラリーが組成されており存在感と実態が伴っている。一方でまちライブラリーがない県もあり、その存在感、実態は場所により大幅に違う。
- ③ 設置場所に関しては、多岐にわたって設置されることが判明した。公共施設 11.5%、民間施設 88.5%となり、設置箇所も公共施設では、学校、図書館、市役所、公民館、駅や公園などであり、民間施設では、店舗、コミュニティ施設、病院、寺や神社、自宅、事務所をはじめ銭湯、農園、蔵などである。

まちライブラリー概括の考察

まちライブラリーは、想定したように個人でも企業、図書館、行政といった大規模な組織でも運営でき、また私的な場所でも公的な場所でも設置が可能であるということが証明できた。これは、第 2 章 2-5-2 から 2-5-4 で記したようにまちライブラリーの場づくりの仕組みが、個人でも組織でも運営が可能で、運営にあたっての負担が少ないと考えられる。その結果が、全国で累計 680 カ所まで広がり、公民両方の多様な施設に広がったと考えられる。特に大阪府内では、公共図書館が 147 カ所であるのに対して、まちライブラリーは、152 カ所（2019 年 3 月末現在、設置継続数）と設置箇所では拮抗している。もちろんその蔵書数や施設の規模は、大きな違いがあるが、少なくとも本が設置されている身近な場所が、大阪では成立しつつある。また、75 ページで紹介した企業

が運営しているもりのみやキューズモールのまちライブラリーは、来街者数が年間 15 万人を超えており、近傍の公共図書館を超える規模の来街者を集めている。このように一部の地区ではあるが、地域の場としての存在感を持ち得ていると考える。

運営者アンケートより判明した小括

- ④ 活動の知覚ルートは、身近なつながりや実際の活動にふれて始める人が多い。知覚経路別に見ると「講演会」30.5%、「知人の紹介」29.5%、「既存のまちライブラリーを訪ねて」23.8%、「メディア」17.1%、「関連書籍」14.2%、となっている。
- ⑤ 始めた動機については、「地域や施設を活性化」41.5%、「本が好きだから」20.8%、「人がくるようにしたかった」11.3%が柱になっている。本を活用して場を活性化させたい人が多いことが分かった。
- ⑥ まちライブラリーの運営は、一人で運営しているところが多かった。運営タイプ別に見ると「一人で運営（お一人様型）」46.7%、「ボランティア（並走型）」23.8%、「専属スタッフ型」10.5%となっている。
- ⑦ まちライブラリーの運営に関しては、迷いが多いことが分かった。「あまりうまくできていない」27.4%、「うまくできていない」14.2%となり合計で41.6%が運営に迷いを感じている。
- ⑧ 運営に関しては、一人でやるより仲間がいた方が、自己評価が高いことが分かった。「お一人様型」で運営しているタイプでは、「うまくいっている」と答える人が10.2%で、「並走型」の28.0%と比べると落ち込んでいる。
- ⑨ まちライブラリー運営者は、人との交流が増え、人間関係が良好になっていることが分かった。「人の交流が増えた」71.5%、「人間関係が良くなった」64.7%と回答している。「近隣関係が増加した」は、40.0%であった。本の活動は、隣近所より少し距離が離れたところの人とつながる傾向にあると推測できる。「まちへの愛着は変わらない」と答えた人が54.3%で、「愛着が増えた」は45.7%になった。まちライブラリーが、運営者のまちへの愛着にある程度影響している。「本業が良くなった」と52.4%が回答しており、自己肯定感が出ている人もいる。

運営者アンケートの考察

運営者のアンケートからは、身近な人や周辺のまちライブラリーに関する情報を得て始めていることも分かった。このことから言えるのは、身近な人がやれるなら、自らもやれるという模倣しようという力が働いていると言える。第1章の背景に記したように、社会的な活動をしたいがその術が見つけられずに断念している人が多い中で、まちライブラリーはその術になりえるということを示している。

始める動機は、本を活用して場所を活性化させていこうという、場づくりの手法として捉えている人が多くいることが分かった。しかしながらその運営には苦慮している人も多いことが分かった。これは、単に本を設置するだけでは、人の来訪数をあげたりする手段としては難しいことを示している。前述のみのみやのようになるためには、本を置くだけでなく、専任運営スタッフの設置、蔵書数、施設の位置や空間の魅力などの要素が絡み合っ結果を出していると推定される。ただ、1人で運営しているところより、伴走者の出現が運営上の支えになることも分かった。1人でやるより、同じ目線で伴走している人がいる時の方が、お互い励ましあって自己評価が高まる傾向にあると考えられる。1人からでも始められるまちライブラリーではあるが、運営するにあたって伴走してくれる人を見つける方が、運営上の効果があるといえよう。

また、まちライブラリーは、多くの人々が人との交流が増えたり人間関係がよくなったりしていることも判明した。本を通じた地域の間として、そこでのソーシャル・キャピタルが上昇しやすいと言える。第2章2-3でみてきた公共図書館等で求められている地域の間としての機能を果たしていると考えられる。

利用者アンケートより判明した小括

- ⑩ 全国 13 カ所のまちライブラリーの利用者を対象にアンケートを実施した結果、性別、年代、職業も多様であったが、13 カ所全体ではまちライブラリーの雰囲気について 92.6%の人が肯定的に捉えていることが分かった。個別に結果をみても肯定者が 78.1%から 100%で多数いることが分かった。
- ⑪ 利用頻度は、全体で月 1 回以上の利用が 51.5%でおおむね定着しているといえる。各施設別にみてもまちライブラリーは日常に溶け込んでいるといえる。ただ関町 20.0%、津田沼 25.0%、カフェ 39.5%であったが、関町、津田沼では常駐のまちライブラリースタッフも不在で、また施設の特徴として一般利用がしにくいところであると考えられる。またカフェは、同じく常駐のまちライブラリースタッフがいなく、駅下施設で利用者の多くが一時的な利用者であることが他の施設より定着率が低い理由と考えられる。
- ⑫ 利用目的については、施設ごとの特性が出ていて差異が大きい。全体では、本の閲覧 42.7%となり本があることが大きな利用目的になっているといえる。カフェのあるところでは、カフェ利用が第一になっているが次に本の閲覧、貸出を挙げる人が多く、本の存在が利用者にとって利用動機になっていることが分かる。
- ⑬ 利用してよかったことについては、全体でも、各施設をみても「居心地」を挙げる人が多かった。まちライブラリーを居心地のよいところと認識していることが分かる。それ以外には「意外な本と出会えた」という点を挙げている人が多く、多様な人により本が持ち寄られている特性が出ていると思われる。千歳や小林では勉強・仕事を挙げている人が多い。地方のまちで学生や社会人が勉強や仕事をする場所があまりないためだと考えられる。
- ⑭ まちライブラリーで人とのつながりを感じるかという質問には、多くの人が「どちらともいえない」（全体：46.9%）と言っている。しかしながらどんな時に感じるかで「まちライブラリースタッフとの会話」（全体：52.4%）を挙げている。どのような場所であるかについては「一人でゆったり」（全体：58.0%）、「読書など集中」（44.0%）などを挙げている人が多い。これらから利用者は、一人の時間を過ごしたいが、まちライブラリーのスタッフなどに声をかけてもらったり話したりすることにより心地よさを感じてい

ると推察できる。必要以上に人の接触を求めているが、自らの存在が確認できる場所と考えているといえる。

利用者アンケートの考察

利用者のアンケートからは、まちライブラリーは雰囲気がよく、居心地が良い場所であると捉えている人が多いことも分かった。ただし、その利用目的は様々であり、多様な場所として利用されていることが明らかになった。肯定感が高い背景としては、利用者各自が各々の目的でまちライブラリーを利用できていることがあげられる。本の利用はもとよりカフェ、勉強や仕事、イベント参加や実施など多目的な場所として自らの趣向にあった利用が可能な場としてとらえていることが、1つの理由として考えられる。

利用頻度が、月に1回以上という人が50%を越えているのは、アンケート対象のまちライブラリーにおける本の貸出期間が2週間から1か月となっており、その貸借で利用が促進されていると想定される。本の存在が、日常的な利用を生み出しているともいえる。

まちライブラリーで、人とのつながりを感じる時は、不特定多数の人とのつながりを求めるというよりまちライブラリーのスタッフのようにその場におけるホスト役に期待しているところが大きいことも明らかになった。上記のように本の利用、カフェ、勉強や仕事といった一人で過ごせる空間でありながら特定の人とのつながりの両方を得られる場所としてまちライブラリーを捉えており、それが居心地につながっているとも言える。

このように利用者からみたまちライブラリーは、本を核にしながらもそれぞれの目的に応じて利用できる地域の間となつている。また公共図書館に求められている地域の間としても機能するだけにとどまらず、むしろ制度に依拠していないため、飲食やイベントなど本のある場所で自由な使われ方がされているといえる。

第4章 まちライブラリー関係者の観察

4-1 観察対象と手法

まちライブラリーの関係者へのヒアリング、グループ討論、公開発表等の形式を通じて発言と、発言者の活動概況を加味して取り組んだ意図や心境を読み解き、その人が地域の場づくりにどのような役割をもたらしているのかを考察する。

関係者とは、まちライブラリーを運営する運営者、利用者、ボランティアなどで活動するサポーターとアルバイト等のスタッフ、また同種のマイクロ・ライブラリーを実施しているものも含まれる。これら関係者について以下に整理する。

①運営者：

まちライブラリーあるいは同種のマイクロ・ライブラリーを設置し、運営している者（組織も含む）をいう。

②利用者：

まちライブラリーで本の閲覧、貸出、寄贈またはイベントの主催、参加、カフェ利用等をしている者をいう。

③ボランティア（サポーター）：

まちライブラリー活動をサポートするためにボランティアでイベントの企画、運営や本の配架、整理等において積極的に役割を担っていく者をいう。利用者との区分はあいまいで、サポーター会議（場所によって呼び方は違う）に出席すれば、ボランティア（サポーター）として認知される。

④まちライブラリースタッフ

上記、運営者、利用者、ボランティア（サポーター）やその関係者の知人の中から有償で一般社団法人まちライブラリーの運営に携わる者をいう。各まちライブラリーの設置法人が、スタッフの費用を負担している。

以上、関係者を群類に整理したが、同一の人物が複数の立場に位置していることもある。運営者が他のまちライブラリーの利用者であったり、ボランティ

ア（サポーター）であったり、場合によってはスタッフとなったりして活動している。また筆者自身も関係者の一人である。よって本研究の手法となっているまちライブラリーが始まるにいたった経緯とその当時の記録や発言を整理し、その省察を踏まえて、他の関係者の発言と比較し、どのような過程を経て場が形成されてきたのかを以下のような手順で検証する。

第4章4-2にまちライブラリーが始まるにいたる経緯を節目となる時代区分別に記し、それに対する筆者の省察を記載する。そのうえで4-3にまちライブラリーの実験設置期に関与していた人のヒアリングをし、どのような意図で活動に参加したのかを記す。次にまちライブラリーが広がっていった大阪市中央区のまちライブラリー関係者からのヒアリングを記載し、それぞれにどのような場づくりを目指しているのかを記したい。

次に大阪市中央区と同様に地域で広がりを見せている岩手県雫石町、埼玉県鶴ヶ島市、兵庫県加西市、岡山県津山市、東京都文京区、大阪府泉南地区の6カ所の関係者へヒアリングした内容を検証する。これら地区同士の比較検証を経たうえで継続的に活動しているまちライブラリーと既に活動をやめた運営者に始めた動機や活動の状況をヒアリングし、その違いを明らかにしたい。

以上、運営者の発言を整理したうえで4-4にまちライブラリーの利用者、4-5にボランティア、4-6にスタッフをしている人たちからヒアリングをし、活動をするにいたった動機や意識していることについてヒアリングした結果を記す。

4-2 まちライブラリー活動の変遷と筆者の省察

まちライブラリー活動の変遷を柱に、筆者の省察を実施する。省察の目的は、まちライブラリーは筆者自身のアイデアで始まっており、その始まった経緯を明らかにし、他のまちライブラリーと参照し、検証していくためである。

4-2-1 まちライブラリー活動成立までの変遷

まちライブラリーが成立するまでの過程は以下の4つの時期を経ている。

①活動前期（2005年～2010年）

2005年、「サードプレイス研究会」を立ち上げ、収益性のある場づくり事業を各地に展開することを企画し、構想する。2008年に大阪の実家のビルを一部改装して「ISライブラリー」をパイロット事業として開設する。

②構想準備期（2010年～2011年）

全国80カ所以上の限界集落を歩き、各地に人とのつながりを作る若者と出会い、地域に生きる人々に焦点をあてる活動を目指して「まち塾@まちライブラリー実行委員会」を設立し、構想実現に向け検討を開始する。

③実験設置期（2011年～2012年）

「東京まち塾」「大阪まち塾」と称したイベントを実施し、その場所にイベント参加者が持ち寄った本を10冊から30冊程度設置し、実験的なまちライブラリーができる。2011年11月には、千代田区立日比谷図書文化館にて図書館全体を借り切り、32組に分かれて各組ごとにテーマを決めて本を持ち寄った「人のライブハウス」というイベントを実施し、延べ230名以上が参加した。

④活動確立期（2013年～2014年）

大阪府立大学のまちライブラリー開設にあたり本を持ち寄る「植本祭」と称したイベントを実施した。2日間で48組の話題提供者を集め、館内すべての場所で本を持ち寄り、語り合うイベントを実施した。各組に10名程度の参加者が集まり、延べ500名を超える参加があった。

4-2-2 当時の記録と筆者の省察

以上、まちライブラリー活動が始まるまでを4つの時期に区分したが、これら変遷を契機に、筆者自身の心境と行動が変化し、結果としてまちライブラリーが確立していく。筆者の省察をしながら場づくりへと変遷するまちライブラリーの実態を把握していきたい。筆者の省察はオートエスノグラフィー的手法により行うが、残された印刷物、筆者のメモ、報道記録などの記録を最初に記述する。またなるべく客観的な事実関係を呼び起こすために、第三者による筆者へのインタビューを実施し、その発言を引用して当時の心境を明らかにする。なお発言は、斜体で記述した。なお、筆者へのインタビューは、2018年4月、5月の2回に分けて実施した。

①活動前期（2005年～2010年）

■当時の記録 2005年実施の研究会レジメより

「Library Think」という当時の企画書には、「ライブラリーオフィス型」と「ライブラリーカフェ型」に分けチェーン展開を企画し、設置規模についても100㎡以上を「タイプL」、30㎡～100㎡を「タイプM」、30㎡未満を「タイプS」などに分け、収益を図る事業モデルを構想している。

(2005年7月「Library Think」企画書より)

この時期は、筆者自身がアカデミーヒルズを離籍し、仕事への喪失感があり、自らの社会的な役割を見つけるために「サードプレイス研究会」を立ち上げていた。筆者インタビューでは以下のような発言をしている。

アカデミーヒルズに長く関わり、かつ思い入れもあったために「喪失感」がありました。これを埋めるべく活動を実施し、夢の実現と事業化を同時に進行させ場づくりの構想を立案していました。

新規ビジネス事業として場づくりを展開したい気持ちが強かったと思われる。

②構想準備期（2010年～2011年）

■当時の記録 2010年から2011年、筆者メモより

東京まち塾は「東京の元気人を探して東京を元気にする」、同様に大阪まち塾を立ち上げ、双方でそれぞれ現地にふさわしい塾長を決め、それをサポートする。「まち塾」を通して教育的活動を主眼にしながら各地に独自の教育的活動が広がり、その活動拠点を「まちライブラリー」にする。

(筆者構想メモ 2010年9月から2011年8月より)

構想準備期は、人とのつながりを大切にしたいという意識が高く、限界集落を歩いてきた若者のような人材を見つけ、つながりを求めている時代とも言える。当時の雰囲気を書者は次のように発言している。

仕事で行き詰まり、つらい時期でもあり、組織での活動より個人の生きがいや存在感を求めています。全国80近い限界集落を歩き、その体験を語ってくれた若い仲間との出会いが大きな転機になりました。彼の行くところに伴走し、その場での今まで会うことのない人との出会いを通じて、東京でのサラリーマン人生とは別の生き方もあるのだという安堵感を得ていました。

さらにこの時期に結成した「まち塾@まちライブラリー実行委員会」に関しては、

「まち塾」が行われる場所が、付随的にまちライブラリーになることを考えていた時代でした。(森ビルの)森泰吉郎さんが始めたアーク都市塾を私の中で再現してみたいという気持ちが強かったと思います。

というように「まち塾」という活動を通して、自ら波長が合う人を求めて、各地に「まち塾」が展開する夢を見ていた時期といえる。

③実験設置期 (2011年～2012年)

■当時の記録 報道記録より

『TOKYO 図書館紀行』(2012, 玄光社 MOOK) に以下のように取り上げられる。「まち塾@まちライブラリーは、館のない図書館。現在、東京・横浜に10カ所、大阪に13カ所設置されているすべての本棚がまちライブラリー」、「磯井さんは組織や巨大施設にできることには限界があると感じたという。そこで注目したのが魅力的な『個人』だ」、「磯井さんにとっての『本』は『大阪のおばち

ゃんがくれるアメ』であり、相手との距離を縮めるためのツールなのだという。こうして本を介して集まったのが、2011年11月23日に日比谷図書文化館を貸し切っておこなわれた、まちライブラリー初の大規模イベント『人のライブハウス』である」と紹介している。

(『TOKYO 図書館紀行』(2012, 玄光社 MOOK) より)

「まち塾@まちライブラリー」活動が、東京、大阪で徐々に始まり、千代田区立日比谷図書文化館での大型イベントを終えても、その実態は関係者の本だけが設置され、利用者も望めない状況であった。筆者の振り返りインタビューでも以下のように述べている。

実際の活動が進むにつれて充実感と同時に場づくりという視点からは、限界があると感じていました。「まち塾」と「まちライブラリー」の両方が並立しており、どちらかに絞りきれなかった。図書館のように本だけで場づくりができるという気持ちにならなかったように思います。

千代田区立日比谷図書文化館のイベントは、まち塾@まちライブラリーの自信になったが、次にどうすればよいかはまだはっきりしていなかったです。

このように実験段階から抜け切れていない状況であったといえる。

④活動確立期 (2013年～2014年)

■当時の記録 報道記録より

2012年10月23日付の産経新聞夕刊には「蔵書ゼロ冊 並ぶのは交流の心」というタイトルで、大阪府立大学のまちライブラリーが、従来の図書館のように蔵書を用意するのではなく、講演会やワークショップを通じて市民が持ち寄った本を集めながら図書館を作ることを報じている。記事の中で当時の学長である奥野武俊は、「次第に本が増えていくいわば育てる図書館です。本と一緒に人を集め、集まった人を交流させるという大いなる実験をしようと思う」と発言し、筆者は「難波に来れば全国のライブラリーにふれられるようにしたい」と発言している。

(2012年10月23日付産経新聞夕刊1面：大阪版より)

大阪府立大学でのまちライブラリーの開設は、偶発的なものであったが、その結果まちライブラリーを取り巻く環境も筆者自身の意識も大きく変わっている。筆者インタビューを見ると以下のような発言になる。

大阪府立大学のサテライトキャンパス構想と「個」から始めるまちライブラリーとは当初はつながらなかった。(中略)大阪府大のまちライブラリーを全国に展開するまちライブラリーの“甲子園球場”のような存在にしようと思いました。この時にはじめて小規模なまちライブラリーと大規模なまちライブラリーを同じ土俵のうえで考えるようになりました。

このように実験設置期にあった迷いは消え、40番目にできた大阪府立大学のまちライブラリーを新たな拠点として、全国に広がりつつあるまちライブラリーのモデルを作っていくようになった。

以上、4つの転換点での筆者発言を整理すると①活動前期は、自らの役割を確認したくて「サードプレイス」構想を進めていたと言える。結局、資金や組織が直接的な原因で事業化をあきらめた。②活動準備期は、自らを受け止めてくれる人や場所を求めていた。自分を受け止める人を通して居場所を探していたともいえる。③実験設置期は、まち塾@まちライブラリーを実際にやり始めて多少の手ごたえがあったものの、同時に「まち塾」という教育事業なのか「まちライブラリー」という場づくりの活動なのか、その方向性は絞れていなかった。④偶然にも大阪府立大学にまちライブラリーが誕生することになり、それを核に「まちライブラリー」という場づくりへシフトしたと考えられる。結果として活動が確立していくきっかけとなっている。

以上、まちライブラリーという場づくりにたどりつくまでの流れと筆者の視点の変化を見てきた。これらが他の関係者からはどのように見えていたのか、また他の関係者はまちライブラリーにどのように関わってきたのかを次節に記す。

4-3 大阪市中央区のまちライブラリー検証

前節でまちライブラリーの立ち上がりまでを見てきたが、本節では最初にまちライブラリーが立ち上がった大阪市中央区の様子を記述する。特に第1号のまちライブラリー立ち上がりに関わった関係者を取り上げ、次に当該地区に展開するまちライブラリー運営者を中心にヒアリングした結果を記載する。

4-3-1 地区の概況と当該地選択の事由

<地区の概況>

大阪市中央区は、面積 8.88km²、総人口 98,513 人（推計人口、2019 年 4 月 1 日）で大阪市の中心区である。大阪城を含め周辺には大阪府庁や政府機関が入居する官公庁街、御堂筋、堺筋を中心とした業務地区、心斎橋等に代表される商業地区と大阪を代表するいくつもの顔をもっている。近年、都心回帰もあり住民が増えている。

<当該地選択の事由>

このように当該地区は、大阪市の中心地であるがまちライブラリーの第1号ができた天満橋、谷町地区があり、まちライブラリーが集積しており、筆者の活動前期から活動展開期まで一貫して見る事が可能である。特に関係者が集積しており、その関係性が場づくりにどのような影響を与えたか、その知見を得ることで他の地区でのまちライブラリーと比較検証できるものとする。

4-3-2 大阪市中央区のまちライブラリー概況

中央区には、以下の表 4-1 にあるように累計 32 のまちライブラリーが誕生した。ただし 2019 年 3 月末時点では 11 カ所が閉鎖、1 カ所が移転しており、20 カ所が現存している。またもりのみやキューズモールのまちライブラリーも中央区に位置し、大中小と様々なタイプのまちライブラリーがある地区でもある。

表 4-1 大阪府中央区まちライブラリー一覧

(注) 登録は、まちライブラリーの累計登録番号を意味する。

登録	状態	ライブラリー名	区分	設置年度
1		IS まちライブラリー	個人	2008
2	閉鎖	まちライブラリー@丸善ボタンショップ「BOTA BURZO」	個人	2011
3	閉鎖	まちライブラリー@手造り時計 CRAFTZ osaka	個人	2011
4		まちライブラリー@クラブ	個人	2011
5		まちライブラリー@建築工房櫟（らく）	個人	2011
6	閉鎖	まちライブラリー@谷町空庭	個人	2011
16		やままちライブラリー	個人	2011
17		まちライブラリー@住みよいまち&絆研究所	個人	2012
21		まちライブラリー@圓周寺	個人	2012
36		まちライブラリー@シュール・ムジュール デサキ	個人	2012
37		まちライブラリー@2nd Lab.	個人	2012
63	閉鎖	まちライブラリー@nonamanis（ノナマニス）	個人	2013
64	閉鎖	まちライブラリー@箱庭 hakoniwa	個人	2013
65		往来	個人	2013
66	閉鎖	まちライブラリー@Links	個人	2013
67		まちライブラリー@北浜 KITA LI CITE	個人	2013
72		down to earth 谷町	個人	2013
93	閉鎖	まちライブラリー@ジェッターレ	個人	2013
96		C Flat まちライブラリー	個人	2014
124		まちライブラリー@川の駅はちけんや	個人	2014
152	閉鎖	まちライブラリー@アワヒニ天満橋店	個人	2014
149		まちライブラリー@もりのみやキューズモール	法人	2015
170		まちライブラリー@イチハチ	個人	2015
232	閉鎖	Go Color まちライブラリー	個人	2015
243	閉鎖	まちライブラリー@ATTEND+本町	個人	2015
269		ことばを食べるカフェ みずうみ	個人	2015

402		TSS 研究所	個人	2016
416		まちライブラリー@サクセスファクトリー	個人	2016
420		小さなお庭と猫の図書館まちライブラリー	個人	2016
443		まちライブラリー@ビーハイブホテル大阪	個人	2016
562	移転	キャンディ・ライブラリー	団体	2017
616		飲食店のためのまちライブラリー	個人	2018

設置年度別に見ると以下の表 4-2 のようになる。全国の増加数と比較すると中央区は 2013 年までに設置累計の過半数が誕生し、2015 年に開設されたもりのみやの影響で設置件数が増加している全国の状況とは違いがある。周辺に規模の大きなものができるも地区内ではほとんど影響を受けておらず、逆に当初の 3 年の間に伸びている。

表 4-2 中央区と全国のまちライブラリー年度別設置数

年度	中央区	全国	出来事
2011	7	16	IS まちライブラリー開設
2012	4	23	
2013	7	56	大阪府大開設、マイクロ LS
2014	3	69	
2015	5	112	もりのみや開設、ブックフェスタ
2016	4	169	北海道千歳開設
2017	1	130	
2018	1	105	NTT 都市開発

4-3-3 IS まちライブラリーの概況と関係者のヒアリング

当該地区初のまちライブラリーが IS まちライブラリーである。IS まちライブラリーは、筆者自らが個人的に誕生から今日まで関与してきており、まちライブラリーの第1号でもある。当該まちライブラリーに関係した人を観察することにより、筆者の省察と比較する。立ち上げに関係し、自らもまちライブラリーを設置した3名とサポートに徹して運営に協力してくれたメンバー1名からヒアリングをした。

<IS まちライブラリーの概況>

筆者の実家のあったところに建築された小規模なオフィスビル（アイエスビル）を2008年に一部リノベーションして、クリエイティブオフィスとした。その際に、3階に約30㎡の「IS ライブラリー」を設置し、入居テナントがラウンジ的な利用ができるようにするとともに外部の会議室利用にも対応した。2010年第2期のリノベーションを実施、2011年から後述するアイエスAなどによりセルフビルディングで本棚を作り、同じ3階に約70㎡の区画で拡張した「IS まちライブラリー」を開設する。

開設当初は利用者がほぼなく、対策として「本とバルの日」と称した、手作り料理を提供し、参加者が本を持ち寄り紹介し、寄贈を受ける活動を2012年3月から実施する。ほぼ順調に2016年10月まで毎月実施し、参加者も10名から20名程度いた。2015年から1階の玄関先に巣箱型の本棚を設置した。2017年4月より月曜日から土曜日まで開館することにし、利用者も幼児、小学生、近所の居住者、勤務者と広がりを見せている。土曜日は、ボランティアによる運営である。蔵書数約8000冊、月間200から300名程度が利用するまちライブラリーになっている。

<IS まちライブラリー関係者の発言>

以下に4名の関係者からのヒアリング結果を記載する。アイエスA、B、Cはアイエスビルリニューアル後に当該ビルに入居したテナントであり、Dは立ち上げ時の「大阪まち塾」に参加し、その後2016年までISまちライブラリーの「本とバルの日」というイベントの企画、運営に携わっていた中心人物である。

①アイエス A 建築家 まちライブラリー登録番号 5²⁷

(2019 年 2 月聴取 斜体部分が対象者の発言)

アイエスビルが 2008 年にリニューアルされた折に、同ビルに入居する。自らも事務所に「まちライブラリー@建築工房櫛」を設置する。アイエス A は、2011 年、IS まちライブラリーの本棚をセルフビルドする提案をし、参加者を巻き込んで本棚を整備した中心人物であった。まちライブラリーとの関わりについてアイエス A は、以下のように発言している。

磯井さんから「本を持ち寄るライブラリーを作りたい」と言われて、みんなで本棚づくりのワークショップから始めて、人を巻き込みながらやっていくと思いが詰まってくると提案させてもらった。そうやって巻き込まれたんです。

まちライブラリーがうまくいくと思ったかの質問には、以下のように答えている。

それなりにうまくいくとは思っていましたが、こんなに広がるとは思っていませんでした。せいぜいこの地域に広がるくらいかなと、思っていました。(中略)

外に置いた巣箱型の本棚も大正解だった。やっぱり 3 階まで上がってくるのは怖いし、鉄の扉を開けるのも勇気がいるが、外に巣箱型の本棚を置いたらサテライトのような効果があった。

まちライブラリーをやって良かったことはという問いには、次のように答えている。

ビルの中での横のつながりも出てきました。それで居心地のよさも出てきて離れられないのです。(中略)

自分の興味のある本を置いてあるので、それを借りてくれる人がいると、この人も同じことに興味があるんだなと分かるじゃないですか。それは面白いですよ。

²⁷ まちライブラリー登録番号は、まちライブラリーに登録された順に附番される番号である。参考資料 1 に 1 番から 680 番までのリストを添付している。以下、同様に番号を記している。

発言を見ると、強い思いを持ってまちライブラリーを始めたというより入居したテナントビルを選んだ段階でその周囲の人間関係や雰囲気から受け身としてまちライブラリーに関与を始めている。その結果、周りとのつながりを得て、当該ビルでの居心地も上がっていると発言している。本を通じて共通の興味を持つ人とのつながりが得やすいこともその要因と考えられる。

②アイエスB ウェブ制作会社経営 まちライブラリー登録番号4

(2019年2月聴取 斜体部分が対象者の発言)

アイエスビルテナントで2010年に移転してくる。自らは、「まちライブラリー@クラブ」をオフィス内で運営する。ウェブデザインの会社を運営している。大学時代、地域デザイン等のコンペにも参加している。まちライブラリーに関与したきっかけについては以下のように述べている。

「大阪まち塾」の会合の日に入りの扉にA4の紙で案内が貼ってあったのを見て、面白そうだなと飛び入りで参加した。本棚ワークショップは、アイエスAさんとのつながりのある大工さんと協力してワークショップ形式で本棚とブックエンドを作ることになった。大工さんと一緒に手順書を作ったが、その1週間はなかなか幸せな1週間でした。

その後のまちライブラリーについてどのように見ているかという問いには、

ISまちライブラリーの拡張は、磯井さんにとっては、決断と覚悟があったと思います。ビルの家賃をどうするのかとか、実際苦勞もしました。当時は誰もいなくて持ち回りで管理をしたり、僕の会社のアルバイトを入れたりしていました。

(中略)

僕の家は吹田ですが、吹田と同じくらいここが自分の場所になっている。まちを歩いていて声掛けできるような関係が広がりました。アイエスビルにしかまちライブラリーがなければ、自分にとっては地元感があまりなかったかもしれない。最初に数カ所できたのは意味があった。直近で僕がうれしいのは、ISまちライブラリーに地元の子も達が集まってくれて安心、安全に遊べる公園のような場所になっていることです。かつて公園を作りたいと思ってきた者として、想像もしていなかったことです。

アイエスBにとっては、偶然入った「大阪まち塾」からつながり、アイエスAが提案した本棚ワークショップで普段できないことをやれた楽しさを表現している。その後の運営における発言を見ても運営当事者と言える。自ら場づくりに積極的に参加していることが分かる。人間関係が生まれたことで住居がある場所同様に職場周辺に親しみをもっている。子ども達が来館する姿を見て公園のような場所になったと我が事のように喜んでいる。

③アイエスC まちづくり NPO 法人代表 まちライブラリー登録番号 17

(2019年2月聴取 斜体部分が対象者の発言)

市内別所から NPO 法人の移転先としてアイエスビルシェアオフィスのメンバーになる。前述のアイエスAも同 NPO 法人のメンバーで、アイエスCが勤務していた大学の社会人学生からのつながりがある。自らは、IS まちライブラリーの一角で「まちライブラリー@住みよいまち&絆研究所」を主宰する。まちライブラリーに関わったきっかけについては、以下のように発言している。

正直やろうと置いていなかったが、IS まちライブラリーが立ち上がって、徐々に広げていこうという時だったのでここにいる限り応援しようという気持ちでやった。大阪生まれだったが、ずっと滋賀で働いていたので、大阪に知り合いや友達がたくさんいるわけでもなかった。そういう意味でここに移転してきて人のつながりがいっぱいできて、それが財産になっている。

まちライブラリーをやってどう思うかという問いには、以下のように答えている。

東京、大阪である程度広がるとは思ったが、こんなに全国に広がるとは最初は思っていなかったですね。公共図書館に行っても本と出合っても、人とつながるといえることはないじゃないですか。衝撃だったのは、まちライブラリーで本を通じて自己紹介するやり方だったんです。知らない人同士で自己紹介するとみんなドキドキして何をしゃべろうかなと思うのですが「今、僕はこの本に興味があるんです」と言って話し出すとみんなすっとうって来てくれる。「ああ、面白い」と思いました。パーソナリティと本の魅力が重なってくる。

アイエスCにとって受け身での始まりであったが、結果として自らの人間関係構築につながっている。特に本を紹介しあう方式について高い評価をしており、初対面での会話を導き出す効果を体験して、人と本の魅力が重なりあう様子を語っている。

以上が、まちライブラリーの活動準備期における関係者からのヒアリング結果である。整理するとアイエスAは、筆者の構想をもとに本棚をつくるワークショップを提案し、アイエスBは「大阪まち塾」のイベントに飛び込みで参加しながら本棚ワークショップでも積極的に役割を果たし、アイエスCはアイエスAの紹介でシェアオフィスに入居し、周囲の活動を応援する視点でまちライブラリーの活動に参画してきている。同じビルに入居するという機会を捉えてそこから人のつながりが生まれていることが分かる。またアイエスA、アイエスCは当時のまちライブラリーについて、当該地区や筆者が関係する東京では広がると考えていたが全国に広がるとは思っていなかったと発言している。アイエスBは、まちライブラリーを通して当該地区で道を歩いても話しかける人が現れたことにより、思い入れを持てるようになってきていると発言している。

このように本への思い入れや自分自身の課題からまちライブラリーに関り始めたのではなく、筆者が言い出した活動を応援してやろうという気持ち強い。しかしながら関係するなかでアイエスBのように地元的意識を持ったり、アイエスCのように自らの人脈づくりにつなげたりしており、我が場所としての思い入れが芽生えている。

次にISまちライブラリーの活動をボランティアで支援した人の発言を記す。

<ISまちライブラリー支援関係者の発言>

④アイエスD 当時大阪府中央区アイエスビル近傍に住む

本とバルの日の食事やイベント企画担当

(2017年7月聴取 斜体部分が対象者の発言)

2011年の「大阪まち塾」に参加した。アイエスビルと同じ町内に住んでいた女性である。料理が好きで、ISまちライブラリーの「本とバルの日」に食事を

提供するなど、運営に長く関わっていた。2011年の「大阪まち塾」に参加したおりの感想を次のように語っている。

多種多様な方の集まりに行ったのが初めてだったので、こういうことをツールにこんなにたくさんの方が集まるんやっていうのはびっくりしましたね。共通の空気感みたいなものを感じましたよね。何年間も会わないチャリ子さんという友人にばったり再会したんですよ。「こんなところで？」って。同じ空気感というか、そういう感覚の人が同じ場所に集まって来るんやなってことを思いました。

本とバルの日を始めてからについて以下のように発言している。

2012年の3月から「本とバルの日」を始めて最初は楽しかったですね。自宅でやろうと思っていたことができたんです。ただSNSを使って広がるとぜんぜんジャンルの違う方が来られます。最初は本に興味のある方が来られて、私たちと同じようなエネルギーを持った人たちがいたのに不特定多数の人にワッと広がることで、なんか違う空気感の人も来られますよね。そここのところがやっぱり、私にとっては違うかなみたいな感じにはなってきました。それで2016年にはやめたんです。

アイエスDは、料理を仲間と楽しく食べながら人の輪をつなぐことが大切で、当初のISまちライブラリーはそのような場所であったが、時間が経つにつれて仲間とは思えない人が来るようになってその場を自らの場とは考えられなくなっている。誰でもよいのではなく、感性や思い入れのある人とのつながりを大切にすることが大事で、それが薄まることにより関与をやめていることが分かる。

以上、アイエスビルにできたISまちライブラリーに関わる関係者からのヒアリングをもとにISまちライブラリーにおける場づくりが、どのような過程で生まれてきたかを見てきた。それぞれの関与の立ち位置は異なるが、各々の目標を見つけ、結果として様々な人間関係を構築してきたことが分かった。まちライブラリーを軸につながる関係性が普遍的なものかどうかを探るために次節以降、さらに地域を広げて観察した結果を記載する。

4-3-4 大阪市中央区の他のまちライブラリー運営者のヒアリング

前述した IS まちライブラリー関係者以外で当該地区の 11 名のまちライブラリー運営者について 2019 年 2 月 14 日から 16 日にヒアリングをした。その運営者メンバーの発言骨子を以下の表 4-3 に記載する。

表 4-3 大阪市中央区の他のまちライブラリー関係者発言一覧

(注) 登録欄は、まちライブラリーの累計登録番号を記載している。

登録	発言者	概況（上段）と発言骨子（発言部分斜体）
2	中央区 A	筆者が訪ねたことをきっかけにまちライブラリーを始めた。伯父がやっていた老舗の会社を引き継いだ。地域のことに興味があり当該地区の公園を中心としたまちづくりを手伝っている。 <i>まちライブラリーは、人が常駐していないので継続できなかったが 2 階にあるサロンでイベントをやったりして人の輪が広がっている。</i>
21	中央区 B	お寺の住職、筆者の高校時代の教師で元教え子と偶然会い、その折にまちライブラリーの活動を知り、活動に協力している。 <i>知らない本を紹介されたり、自分が読んだ本を紹介できたりするのがいいね。檀家さんの中には、こんな本を紹介してもらってよかったという人もいる。縦や横のつながりも大事だけど、斜めのつながりが大事だなと思います。</i>
36	中央区 C	中央区 A さんのところで 10 冊程度本が置いてあるまちライブラリーを見つけて、やるようになった。周辺のまちライブラリーと「だいたい満月に、ぶらりまちライブラリーラリー」という会をやっている。 <i>人のつながりはとても増えている。まちライブラリーは、大きなものより小さなものがつながって動いていくのが一番いい。先祖が大阪に出てきて育ててもらった。大阪という地域には貢献したいと思って活動している。</i>
37	中央区 D	かつてビブリオバトルをやっていた会場があるビルの地下 1 階のカフェに、ビブリオバトルで紹介された本をまちライブラリーとして置いている。現在、カフェのみ存続している。 <i>新刊書じゃないけど、マニアックな本があつていいなと思っている。本がきらいではないけどどうしても紹介したいという気持ちはなくて、まちライブラリーにしてもビブリオバトルにしてもその人たちとつながりたいのでやっている。</i>
65	中央区 E	本業は、人材教育や紹介で情報発信を担い、空堀に「往来」というコワーキングスペースを作ってまちライブラリーに登録している。2 畳大学という畳 2 畳を大学にみたくて勉強会をする場づくりを自宅でもやっている。 <i>2011 年に「大阪まち塾」ではじめてまちライブラリーのことを知った。本を使ったコミュニケーションができるなということが分かっていたのでやった。本は手に取りやすいし、分かりやすい。やるほうも 10 冊もあれば始められる。</i>
67	中央区 F	レンタルスペースで文化サロン、特に和文化を大切にしているサロンを実施している。（2019 年 6 月にレンタル期間終了により閉鎖） <i>目論見がくるったのは、始めて 1 か月で母が亡くなりそれどころではなくなった。まちライブラリーが稼働するのは、ブックフェスタのイベントのときくらいだが、私自身の居場所としてここを持ち続けたいと思っている。</i>
72	中央区 G	まちライブラリー@谷町空庭（登録 6 閉鎖）を見て、店舗内に設置した。環境問題を意識した雑貨をそろえた店をやっている。 <i>私の考えていることが本から分かるかなと思って始めました。雑貨店なのでたびたび来る人はいなかったけど、たまに来た人がずっと本を見て過ごしている時がしばらくありました。そんなときは良かったなと思いました。</i>

96	中央区 H	語学学校を経営しており、そのサロン部分に設置している。始めたきっかけは、知り合いがやっているまちライブラリー@箱庭 hakoniwa (登録. 64 閉鎖)を見たのがきっかけとなっている。
		語学や旅の本とかをネタに誰でも来てくれたらいいなと思って始めました。語学学校といってもいろいろな語学を教えたい先生たちに場所を貸しているのです。この場所をつくったのは、会社で働いていたときにどんどん若くて優秀な人が入ってきて自分の居場所がないなと思ったからです。本を置いていろいろな本関係のイベントもやれるようになった。
269	中央区 I	中央区 E が運営している「往来」があるビルの一角 (3 m ² 程度) を賃借し、人の話を聞く場所を運営している。その部屋の外に置いている冷蔵庫に本を入れてまちライブラリーとして登録している。
		コールセンターをやめた時に人の話を聞くのが好きなのでこの場所を作りました。本を置くと知的な活動の場所だということが表現でき、人も本につられてくるのでそれはすごいなと思います。昼間は無人で誰でも入ってゆつくりでき、夜は仕事を終えた私がきていろいろ話を聞いたりしていますが、私が落ち着く居場所です。
416	中央区 J	弁理士事務所を経営し、事務所内打ち合わせ室にまちライブラリーを置いている。もりのみやで読書会に参加して設置にいたる。
		本を置いてよかったのは、来訪者と本を話題に盛り上がる時です。私のように本が好きな人間にとっては、考えていることをアピールできる場になっているので、それに共感してもらえると嬉しいんです。
616	中央区 K	大阪府大 OB で I-site に行き、マイクロ・ライブラリーサミットにも参加するなどまちライブラリーを認知する。公認会計士の資格をとって飲食業専門の会計士事務所をつくり、まちライブラリーを始める。
		お店をやっている人はなかなか本業が忙しくて本を読めない。だったら僕が代わりに食や飲食店に関する本を読んで勉強してそれを提供しようと思ったんです。もともと図書館が好きだったので知識が増えた分、アドバイスに役立っています。

以上のように各まちライブラリーをやっている人の話を通覧すると様々な思いで活動を開始していることが分かる。中央区 A は、すでにまちライブラリーをやめているがサロン活動ができて、地域への関心も高い。中央区 B は、教え子の縁を大切にしてお互いに賛同して檀家さんをはじめ斜めの関係性ができることを大切にしている。中央区 C は、まちライブラリー同士のつながりを大切にしている。興味深いのは、近隣のまちライブラリーと連携して「だいたい満月に、ぶらりまちライブラリーラーという会」をやり、月ごとにイベントのホスト役を持ち回りでやるようにして、継続性と負担の軽減を図っている。中央区 D は、ビブリオバトルをやる若い人とのつながりを大切にしている。中央区 E は、場づくりのツールとしてまちライブラリーを認識している。中央区 F は、自らの夢である和の文化を大切に、また自らの居場所だと考えている。これは、中央区 I も同様である。中央区 G は、自ら読んでいる本を店に置き、コンセプトを出しやすいと考えている。中央区 H は、語学に関心のある人を集める

手段として考えている。中央区 J や中央区 K は、顧客とのコミュニケーションの一助と認識している。

大きく分けると「集客」「人の会話」「つながり」「自己表現」「自身の居場所」となり、まちライブラリーに関する思い入れも様々であるが、自らの活動に寄与すると判断して実施している人が大半である。本好きでたくさんの蔵書を収集するというより、本を介して人と出会ったり、自分の業務をやりやすくしたりと人を絡めていることが分かる。むしろ本を活用して人との出会いや輪を広げていくことに主眼が置かれている。

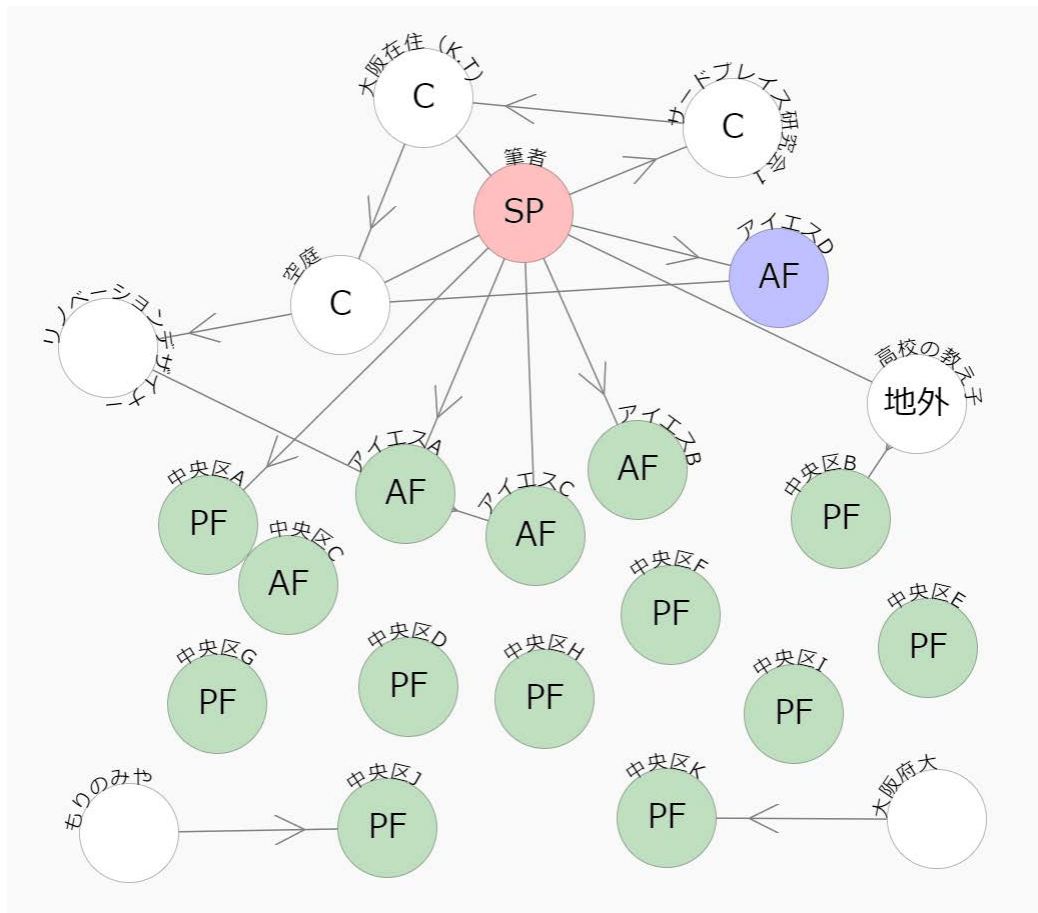
4-3-5 大阪府中央区の人的ネットワークから見た広がり

ヒアリングをした人物をソーシャルマップにすると以下の図 4-1 のようになる。筆者自身が、最初の行動を起こしているのを「SP」(Startup Person)と記している。次にその行動に協力的な立ち位置にあった人物を「AF」(Active Follower)とし、その他でまちライブラリーを実施したものを「PF」(Passive Follower)と表記する。さらに人を紹介することでネットワークを広げた人を「C」(Connector)と表記し、図 4-1 大阪府中央区まちライブラリー関係者ソーシャルマップとして表記する。緑色がヒアリング対象者である。

このように見ると、当初の数名は筆者が直接つながりをつけているが、後の人物は、まちライブラリーという活動の情報を独自かどこか別のルートから得ている。このようにして地域に複数のまちライブラリーが誕生している。誰かの号令や行政的な支援で広がっていないことが分かる。筆者自身、当該地区の生まれであるが大学入学以降東京に在住しており、当該地区で知るものはおらず、東京でやっていたサードプレイス研究会で知り合った人を介して、大阪で活躍する人物に出会った。そこから地域の中で幅広く活躍する空庭さんを紹介され、リノベーションする会社の人物と出会い、アイエスビルのリノベーションを実施し、当該地区でのまちライブラリーを始めることになった。

ただその後も当該地区に在住しておらず、ほとんどを現地にいる人に頼って運営していた。また他のまちライブラリーとの関係も筆者とのつながりから始めたというより、誰かの活動を見て始めている人が多く、まちライブラリーをやってからそれぞれゆるいつながりである。このような関係性でも、自生的にまちライブラリーが広がってきたのが大阪府中央区の事例といえる。

図 4-1 大阪市中央区まちライブラリー関係者ソーシャルマップ



4-3-6 大阪府中央区のまちライブラリー小考察

筆者の個人的な思いで始まったまちライブラリーであったが、当初はその思いに応答してくれた数名の者が、IS まちライブラリーの運営を支援し立ち上がってきた。アイエス B のように IS まちライブラリーやその周辺のまちライブラリーを通して自らの居住地同様に思い入れがあるという者も現れている。

しかしながら他のまちライブラリーをやっているものと筆者が直接つながっているわけではなく、まちライブラリーの様子を見たり、聞いたりして開始するようになっている。しかももりのみやのように全国に拡大のきっかけを生んだまちライブラリーでも、当該地区ではその拡大への弾みにはなっていない。あくまでも個々の運営者が、それぞれつながっている人からの情報を得て、広がっている。筆者の影響も限定的であり、大きなまちライブラリーも全体的には限定的な影響しか与えておらず、身近な人物からの影響が大きいと言える。

このような地区での拡散は、大阪府中央区だけの特別なものかそれとも他の地区でも同様に起こりえるのかを検証するために、次節では全国の他の地区で連坦しながら広がっているまちライブラリー活動を観察し、どのような環境でその活動が趣旨を受け継ぎ、広がり得るのかを検証する。

4-4 地区で連坦して広がっているまちライブラリー

4-4-1 全国の事例

前節で大阪市中央区のまちライブラリーの活動前期から現状までを記した。次に、全国にあるまちライブラリーの中から市区町村単位で個人、あるいは行政、図書館などの組織が主導しながら広がっているところを整理すると表 4-4 のようになる。

表 4-4 地域で連坦している全国事例

地区	主体	設置	地区	概要
1	図書館 個人	4	岩手県雫石町	日本版 CCRC を目指していた雫石町の依頼を受けてまちづくり会社が企画実施したまちライブラリーの講演、ワークショップから図書館、個人が反応して町内 4 カ所に広がる。それぞれ別々に立ち上がっている。
2	行政	9	埼玉県鶴ヶ島市	元図書館司書で現在、市の教育委員会職員の鶴ヶ島 A が、市役所のロビー、女性センター、まちのカフェや個人宅に声をかけて広がっている。主体として動いている鶴ヶ島 A が自ら各場所を回って順次仲間に入れている。
3	個人 行政	6	東京都文京区	サラリーマンの文京区 A が、自宅マンションでまちライブラリーを始めるとともに行政施設やコミュニティ施設にまちライブラリーを広げている。社協や地元の自治会なども協力している。文京区には 8 カ所設置されているが、うち 6 カ所に参与している。
4	図書館	6	横浜市港北区	元横浜市港北区図書館館長がまちライブラリーの講演会を企画し、また区内に伝承するために自ら各地に向向いてまちライブラリーを広げてきた。区内の行政施設、地区の子育て支援施設などに設置されている。区を越えて設置されているところもある。
5	郵便局	10	横浜市緑区	横浜市緑区内の郵便局が連携して同時にまちライブラリーを実施している。区内には、他の 3 カ所のまちライブラリーがあるが特段の連携はない。郵便局長が、まちライブラリーの講演を聞いて始めたものである。
6	行政	3	横浜市金沢区	区役所主導でまちライブラリーの講演会を実施し、区内の地区センター、スポーツ施設、子育て施設にまちライブラリーが設置されている。設置後の広がりはないが、区内施設として連携している。

7	図書館	10	岐阜県岐阜市	岐阜市立図書館館長の意向で図書館館内に「みんなの図書館～おいてま書架」をまちライブラリーとして登録し、周辺の商店街に専用の本箱を設置して広げる活動をしている。まちライブラリアン養成講座を開き、人材育成にも努めている。
8	個人 行政	9	愛知県東浦町	東浦町ぐるぐる図書館 図書館と図書館をサポートするグループが始めた活動と主婦が自宅でまちライブラリーを始めて融合した活動。図書館だけの活動に任せたくなかった一人の主婦が仲間を増やしている。
9	個人	20	大阪市中央区	前述の IS まちライブラリーが起点となり、区内各所に広がり生まれた。小規模なものから商業施設に設置されているものまである。横の連携は特段なく、2019年に実施されたブックフェスタの折に初めて横断的な会合を開く。累計 32 件で 11 件閉鎖、1 件移転となっている。
10	個人	14	大阪府泉大津市 貝塚市・岸和田市 和泉市・堺市	ホンノワまちライブラリー 子育て世代の主婦を中心に巣箱型のまちライブラリー仲間 14 名が連携して域内で活動している。専用の HP で巣箱図書館の図面を公開し、またオーナー同士が集まってイベントや悩み事を相談する会なども実施している。
11	行政	11	兵庫県加西市	加西市が主導する形でまちライブラリーを導入した。説明会を実施、まちライブラリーに関する感想カードやブックポケット、看板などを加西市が用意し、実施希望者に配布している。当初 14 件であったが 3 件閉鎖。
12	図書館	3	岡山県津山市	図書館の副館長、津山 A が主導する形で図書館がある複合施設に設置されている交流センターや商店街にある観光センター、地元企業が運営している交流拠点に設置している。他の施設や個人への伝搬は見られない。
13	図書館	13	福岡県宮若市	図書館が主導してまちのクリニックや歯科医院、バス停などに設置されている。図書館の本を貸し出す方式で各地に設置されているのが特色である。

(表注) 主体：連坦の主体、設置：域内まちライブラリー設置数

上記表 4-4 のうちから 1、2、3、10、11、12 について運営者にヒアリングをしたものを以下に記述する。

4-4-2 では、行政、図書館など組織が主導しながら地域に広めようとしている事例である 1、2、11、12 を取り上げる。4-4-3 では、個人を主体として広がっている事例として 3 と 10 を取り上げる。

4-4-2 行政、図書館など組織が主導しながら取り組んでいる事例

本節では、4 地区で展開しているまちライブラリーの関係者からのヒアリング結果を記載する。

①地区 1：岩手県岩手郡雫石町

以下図 4-2 に岩手県雫石町概要を記載する。当該地区におけるヒアリング対象者は、図 4-3 である。当該地区対象者の発言骨子は、表 4-5 に記載する。表中上段は活動概況、下段、斜体は発言内容である。

図 4-2 地区 1：岩手県岩手郡雫石町ならびにまちライブラリー概況

面積：608.82 km ²
人口：16,771 人（2018 年 8 月）
特長：宮沢賢治を賢治先生という。岩手山、星空の美しさは町の人々の自慢である。小岩井農場が明治に開設された。
まちライブラリー：4 カ所
きっかけ：2016 年 2 月、町が進める日本版 CCRC を目指している「14ha 町有地（雫石町沼返）活用プロジェクト」の一環としてまちづくり会社、株式会社コミュニティネットが主催してまちライブラリー講演会とワークショップを実施する。

図 4-3 雫石町まちライブラリーヒアリング対象者

①雫石 A NPO 法人まちサポ 理事長 まちおこしセンターしずく×CAN 指定管理者 まちライブラリー@しずく×CAN（登録 271）
②雫石 B 同 上 学生アルバイト（ヒアリング当時）
③雫石 C 雫石町立図書館司書 以下 2 カ所のまちライブラリー運営者 しずくいし まちライブラリー よもっか（登録 319） まちライブラリー@おかると（登録 320）
*2018 年 6 月ヒアリング実施
*登録番号は、まちライブラリー登録番号を意味する。

表 4-5 地区 1、岩手県雫石町関係者発言

発言者	概況（上段）と発言骨子（発言部分斜体）
①雫石 A	<p>自分が経営する親子カフェでまちライブラリーを始める。その後、地域センター「しずく×CAN」の指定管理者になり、当地でまちライブラリーと親子カフェを組み込んで運営している。</p> <p><i>仕組みをお聞きして「ここに置いてある本が人との交流になるんだな」という楽な気持ちで始めました。カフェを始めたのは、娘が3歳ぐらいの頃で、イオン以外に小さい子どもを連れ出していくところがないから、自分で作っちゃえっていう感じでした。地域センターをやっていて責任感もありますけど、やっぱり面白いですよね。私は子どものときからゲームが好きで、RPG ゲームとかやっています。今は、リアルの世界でそれを行っている感じです、誰と誰を組ませてまちの課題に挑戦できそうとか。雫石町は町の中心にしか図書館がなくって、図書館に行ったことのない子もたくさんいて。本をただで借りられるってことを知らないんですよ</i></p>
②雫石 B	<p>大学院の授業でこの「地域づくり会議」に参加する機会があって、もともと雫石が好きで、全地区参加した。参加しているうちに雫石 A と知り合い、雫石 A の NPO 法人まちサポでアルバイトを始める。</p> <p><i>借りていかれる方もいらっしゃるんですけど数は少ない。中高生は、親の世代がくるここにこない。商店街の空き店舗を活用して中高生の場づくりをしたいという話もたくさん聞いた。バイト先の人に聞いたら、本を借りるっていう行為が億劫だと言われて。本を読むことが自体が贅沢な時間に思えるという話もありました。</i></p>
③雫石 C	<p>雫石町立図書館の司書で、隣接する公民館に 200 冊ばかりの本でまちライブラリーをやっている。ノートで貸出をしている。自宅でもオカルト本のライブラリーをやっている。</p> <p><i>話を聞いて「これだけ、手間がかからないかな」と思ったんです。全部登録しなくちゃならないとかですね、そういうのでしたらお手上げでした。個人でも「まちライブラリー@おかると」を運営しています。私の終活です。管理しなくてもうまくいくのがまちライブラリーのすごいところだなと。やってよかったと思っています。図書館に寄贈を受けた、行き場がない本などを活かす場になっています。無人なので本がなくなったりもするんですが、まあ痛手はないです。利用者は、小学生から老人まで様々。人気あります。税務署の確定申告のときに、まちライブラリーの本を持って行って、順番待ちしている間に読めるようにしたんですが、評判いいんですよ。臨時のまちライブラリーを開設したんです。そうしたら、けっこう読んでるんですよ。実用書やぱらっと読めるもの、芸能人の本などですね。</i></p>

<発言の総括>

表 4-5 にあるように雫石 A は、子育て中に親子で行く場所の課題を解決するために親子カフェを始め、さらに地域のコミュニティセンターの指定管理を受ける。それによりゲーム感覚でまちづくりに関与する人材を差配するようになった。本棚についても今後増設を考えていると発言している。同センターのアルバイト、雫石 B はセンターでのまちライブラリー利用はあまり進んでいないと感じている。また中高生にとっては、居場所となりにくいと指摘している。仕事仲間の声として本を借りるのは億劫であり、本を読む時間が贅沢だという声があることを紹介している。図書館の雫石 C は、まちライブラリーが管理し

なくて、楽な仕組みで、図書館に寄贈される本の行き場だと解釈している。公民館にまちライブラリーを設置し、図書館とは違った気軽な運営をしている。寄贈本の処理などの点からも利点があったと発言している。さらに税務署での申告時に臨時のまちライブラリーをやったりし、利用者目線で工夫をしている。個人的にもオカルトに関する本を 2000 冊以上集めて、退職後の夢にしている。

②地区 2：埼玉県鶴ヶ島市

以下図 4-4 に埼玉県鶴ヶ島市と当該地区まちライブラリー概要を記載する。当該地区におけるヒアリング対象者は、図 4-5 である。当該地区対象者の発言骨子は、表 4-6 に記載する。表中上段は活動概況、下段、斜体は発言内容である。

図 4-4 地区 2：埼玉県鶴ヶ島市とまちライブラリー概要

面積：17.65 km ²
人口：69,987 人（2017 年度）
特長：関越自動車道と圏央道を結ぶ鶴ヶ島 JCT があり、狭山茶が有名である。
まちライブラリーの数：7 カ所
きっかけ：2015 年着工の市役所 1 階リニューアルに伴う本棚設置を受けて、図書館司書がまちライブラリーを提案して始まる。

図 4-5 埼玉県鶴ヶ島市まちライブラリーヒアリング対象者

①鶴ヶ島 A	鶴ヶ島市役所 生涯学習スポーツ課 つるがしまどこでもまちライブラリー@鶴ヶ島市役所 (登録 261)
②鶴ヶ島 B	同 上 女性センター主査 つるがしまどこでもまちライブラリー@ハーモニー (登録 309)
③鶴ヶ島 C	鶴ヶ島市議会議員 つるがしまどこでもまちライブラリー@議会図書室 (登録 577)
④鶴ヶ島 D	Water Ship Cafe オーナー つるがしまどこでもまちライブラリー@Water Ship Cafe (登録 340)
⑤鶴ヶ島 E	カフェ 小春びより オーナー つるがしまどこでもまちライブラリー@小春びより (登録 548)
⑥鶴ヶ島 F	ギャラリー明日荷 オーナー つるがしまどこでもまちライブラリー@ギャラリー明日荷 (登録 449)
*2018 年 6 月ヒアリング実施	
*登録番号は、まちライブラリー登録番号を意味する。	

表 4-6 <地区 2、埼玉県鶴ヶ島市関係者発言>

発言者	概況（上段）と発言骨子（発言部分斜体）
①鶴ヶ島 A	<p>市役所 1 階のリニューアル工事で窓口に本棚を作ることになり、市長から図書館で本棚の運営を任せられ、2016 年 1 月に第 1 回植本祭をやってスタートした。蔵書は寄贈だけで、常に 50 冊ぐらい、できるだけ負担をなくすために本の登録はしていない。</p> <p>本当に楽しんでやっている。他の仕事はある程度四角四面にやらなくてはいけない部分もある。その中で、まちライブラリーがあるということが、心のオアシスみたいな感じになっています。</p> <p>「まちライブラリーをやりませんか」と一生懸命働き掛けても実現しないこともあるので、あまりピーアールしすぎないで、誰かが持ってきてくれた話や情報に乗ったほうがうまく回るのではないかなという気がする。</p>
②鶴ヶ島 B	<p>図書室の予算が少なくて、買った本の回読率をあげることを狙って女性センターの図書室の中の本を選んで、外側の本棚に置き、利用者の増加や感想を聞きあうことをしている。</p> <p>同じ本でも、図書室の外に出してであると全然違いますね。発信する手段が一つ増えたので、職員側の意識が高くなったような気がします。</p> <p>まちライブラリーのイベントでは、普段来ないような人が来てくれることもあります。とにかく利用する人を増やしたいのに増えないのが悩みです。これはまちライブラリーとしてではなくて、この図書室そのものがそうなんです。予算が減っておりまして、去年は 4 冊ぐらいしか本が買えなかったのです。</p>
③鶴ヶ島 C	<p>議会図書室の一部がまちライブラリーになって、イベントをしながら市民に来てもらうことを意図している。</p> <p>まちライブラリーの仕組み自体、正直、ゆるいじゃないですか。一つ的手段として、ゆるく人が集まる働きかけをするのにちょうどいいように思ったのです。議会というのは、先行事例がないと新しいことをやるというのは難しいのですが、まちライブラリーに取り組むことがほぼ先行事例を作っているようなものです。</p> <p>市民との交流という面で、これがどういうチャンネルになるのか、今後どういうふうを活かしていけるのか模索中です。課題は本をどう増やし、管理・維持していくかですね。</p>
④鶴ヶ島 D	<p>『旅』『食』『動物』『音楽』というテーマの喫茶店の一角にあるまちライブラリーで、テーマに沿った本の寄贈を求めている。</p> <p>知人の紹介でお話を聞いて面白そうだなと思って即答しました。</p> <p>どんな企画も、まちライブラリーの皆様がサポートして盛り上げてくださるので、地元の人たちとの交流も増え、お店も知ってもらえるようになりました。夢は、本のあるところに集まる人たちへ贈る大きなイベントを開催することです。</p>
⑤鶴ヶ島 E	<p>亡くなった弟の家の隣を買って、食事を提供する自宅のような場づくりをしている。本は最初から置いていた。</p> <p>鶴ヶ島 A と鶴ヶ島 B が訪ねてきて、やることを決断した。</p> <p>「これ、なあに？」ってときどき聞かれますけど。けっこうお年寄りの方が多いので、この本は面白い、これはこういう本で面白かったわよって紹介して、借りるねって持っていく。けっこうお年寄りの方は、話したい。お一人の方もけっこう多いし、男のお一人の方も多い。</p> <p>そんな儲からなくても、ちょっと人にいいことをして死にたいな。ちょっと人の役に立てたらいいな。</p>
⑥鶴ヶ島 F	<p>15 年くらいお花の教室をやっていた場所を利用してまちライブラリーにしている。</p> <p>知らないところに引っ越してきたので、お花の教室をやった。今はギャラリーです。貸出もしますよと Facebook など発信はしているのですが、金曜日の 4 時間ぐらいしか開けていないというのあって、ただやっている感じの状況です。本を読む読まないに限らず、本がある空間がいいのかなというの思いますね。本があると会話が弾むということもありますから。ここにあるものは、すべてつながりで自然に集まったもので、これからも自然の流れに任せてやっていきます。</p>

<発言の総括>

表 4-6 にあるように鶴ヶ島 A は、元図書館勤務で市役所職員であるが立場を越えて個人的な楽しみをまちライブラリーに見出している。当初は、鶴ヶ島のどこにでも広げようと考えていたが、現在は無理やり広げるのではなく個人的なつながりで生まれてくる情報に乗って広げている。鶴ヶ島 B は、女性センターの活性化を目途にまちライブラリーを活用しているが、センター自体の認知と予算の削減に悩まされていることが分かる。鶴ヶ島 C は、まちライブラリーの緩やかさに注目して、しなやかな議会図書館、ひいては議会と市民の関係性の変化を目指している。鶴ヶ島 D は、飲食店経営をしながら興味のある分野のイベントと絡めて蔵書を集めている。交流や人間関係づくりに関心がある。鶴ヶ島 E は、68 歳を過ぎてから起業したが飲食を通じて人に役立つ場づくりを目指している。他人への貢献が鶴ヶ島 E の喜びにつながっている。鶴ヶ島 F は、自らが移住してきたおりにお花の教室をやって地域とのつながりを求めてきたが、その延長線上にまちライブラリーを考えている。

③地区 3 : 兵庫県加西市

以下図 4-6 に兵庫県加西市と当該地区まちライブラリー概要を記載する。当該地区におけるヒアリング対象者は、図 4-7 である。当該地区対象者の発言骨子は、表 4-7 に記載する。表中上段は活動概況、下段、斜体は発言内容である。

図 4-6 地区 11 : 兵庫県加西市とまちライブラリー概要

面積 : 150.22 km ²
人口 : 44,825 人 (2016 年度)
特長 : 広大で優良な農地が広がっている。
自慢 : 網引駅前の大イチョウが県の景観形成重要建造物に指定される。 (2018 年 9 月 20 日)
まちライブラリーの数 : 14 カ所
きっかけ : 2016 年 8 月「加西まち活ゆめ広場」(加西市観光まちづくり協会)でのまちライブラリー説明会である。

図 4-7 加西市まちライブラリーヒアリング対象者

①加西 A まちライブラリー@ええもん王国 (登録 384)
②加西 B まちライブラリー@いまココ HOUSE (登録 379)
③加西 C うずらの南お大師堂まちライブラリー (登録 382)
④加西 D まちライブラリー@網引ステーション (登録 376)
*2018 年 3 月ヒアリング実施
*登録番号は、まちライブラリー登録番号を意味する。

表 4-7 <地区 11、兵庫県加西市関係者発言>

発言者	概況（上段）と発言骨子（発言部分斜体）
①加西 A	<p>衣服を売る大型の店舗を改装して、コミュニティ型の飲食店と物販できる場所になっている。飲食スペース側にカラーボックスを利用した本棚を設置している。</p> <p><i>加西市の方からも話を聞いていたし、ここでまちライブラリーの講演を聞いたなら、なるほどねと思ったから始めたけど、まちライブラリーのチラシを置いても「何なの、それ？」みたいな感じ。伝え方が難しいというか、そこはすごく苦勞します。「本とつながる」というのも、一般の人には分からないみたいで。スタッフも日々バタバタしているから、説明する余裕がないです。最初に集めた本がもうほとんどないです。</i></p>
②加西 B	<p>地域おこし協力隊として加西市に移住した。農家だった空き家に住み、コミュニティハウスになっている。玄関に本棚を設置。</p> <p><i>市から本棚を設置してみませんかという案内を受けて、この場所自体も人がつながるといテーマなので置かせてもらえたらと興味を持った。「いまココ HOUSE」のまちライブラリーの活用というのはなかなかつながらない。正直、置いてある感じになっていると思いますね。これを使ってどう利用していくのかという認知までつなげられていないと思います。</i></p> <p><i>感想カードがあつたりするけど、実際にこういうふうを書いて、それってどういう意味があるのかとか追求しない人が多い。僕からすると、そういう対話がない地域なんですね。</i></p>
③加西 C	<p>お大師さまを祭っているお堂に設置されている。絵本や児童書を中心に 100 冊程度配架した本棚がある。</p> <p><i>ええもん王国に磯井さんが来てくださった時に、「本でつながっていうことができるの？」と思って聞きに行こうと思ったんです。ここにお大師堂があるじゃない。いつも開いていて、誰でもどうぞというように、鍵もかかかっていないしここを使えたらなと、ふと思ったんです。</i></p> <p><i>でも疲れたんです。長年やっている読み聞かせイベントを企画し、実行したが、結局一人で考えるのでね。1 回やってもその次にやってもなかなか子どもたちが集まらない、すごくストレスになってきたんです。体調も崩したし、入院もしました。</i></p> <p><i>夢は、たまり場的な場所をおしゃべりしながら、一緒に作れたらいいのになあと思ったんです。小さな子どもさんを持っておられる方が、「夏休み困るねん」って言われるのね。そんなとき子どもらで集まって一緒にできるところをここでしようと思った。やっぱり、私がここにいることが大事かな。</i></p>
④加西 D	<p>2013 年に九会地区の住民や各企業等に寄付してもらって建築業者のボランティアで建った北条鉄道の無人駅、網引駅の壁際の本棚に加西 D の蔵書 400 冊以上が配架されている。地元自治会の責任者として運営している。</p> <p><i>電車に乗らない人の利用がけっこう多い。来てくれる人に聞くと、図書館は返却期限があるけど、ここはゆるくて、いつでも都合のいいときに持って帰れるので気軽だ、みたいなことを言われます。常時いられないので、メッセージカードを書いてよと言っているんだけど、なかなか書いてもらえない。他のまちライブラリーでは交流会をしているじゃないですか。そういうふうなものをぜひやりたいけど、定期的にやるには、どういうふうにやったらいいのか、まだ十分把握し切れていなくて。</i></p>

<発言の総括>

表4-7にあるように加西Aは、コミュニティに根差した飲食店をやっており、加西市から勧められてその一角にまちライブラリーを設置したが運営方法に戸惑いがある。実際、あまりうまくいっていない。加西Bも同様に加西市から勧められたが、まちライブラリーの趣旨を他の仲間にうまく伝えきれていない焦燥感がある。実際、本の貸し借りもうまくいっていない。加西Cは、自ら絵本の読み聞かせを長年にわたりやってきた経験を活かして地元の場所でまちライブラリーを始めたが、イベントの企画、集客に追われて自らも苦しみ心身ともに疲れている。加西Dは、無人駅をコミュニティの場所にしようと自らの蔵書を持ち込み近場の図書館として運営しており、利用者の反応もある。加西市地区全体のまちライブラリーにもっとつながりを持たせようとしているが自らの力ではどのようにしてよいか分からないので戸惑っている。

④地区4：岡山県津山市

以下図 4-8 に岡山県津山市と当該地区まちライブラリー概要を記載する。当該地区におけるヒアリング対象者は、図 4-9 である。当該地区対象者の発言骨子は、表 4-8 に記載する。表中上段は活動概況、下段、斜体は発言内容である。

図 4-8 地区 12：岡山県津山市とまちライブラリー概要

面積：506.33 km²

人口：103,746 人（2015 年度）

特長：津山城を中心として商業、農業で発展したまちである。

まちライブラリーの数：3 カ所

きっかけ：2016 年 10 月 24 日（月）津山市立図書館本館での筆者の講演会。

図 4-9 津山市まちライブラリーヒアリング対象者

①津山 A 津山市立図書館副館長

②津山 B 株式会社マルイ営業本部 食育推進室
まちライブラリー@Ziba Platform（登録 493）

③津山 C 津山まちなか活性化委員会
つやま まちライブラリー@まちなかさろん再々（登録 502）

④津山 D 株式会社パソナ岡山
津山 E つやま まちライブラリー@まちカレ（登録 582）

*2018 年 3 月ヒアリング実施

*登録番号は、まちライブラリー登録番号を意味する。

表 4-8 <地区 12、岡山県津山市 関係者発言>

発言者	概況（上段）と発言骨子（発言部分斜体）
①津山 A	<p>図書館副館長として地域の人にまちライブラリーを勧めている。</p> <p><u>なぜ図書館がまちライブラリーをすすめるのか？</u></p> <p>磯井さんの講演会とき、「まちライブラリーが近くに欲しいですね」という声からあって、できるならその道を作っていきたいという私の”野望”の始まりです。</p> <p>子どもも高齢者も身近に本に出合える場所があれば本を手にしやすし、そこでコミュニケーションができたり、いろいろなチャンス、出会いも生まれたりすると思います。図書館員なので、基本、本の力というものを信じて思いはもちろんあるんですけど、今は本と場の力を合体させたい。</p> <p><u>やってみて思うこと</u></p> <p>3カ所のまちライブラリーを行ったり来たりしながら、いろんな話ができるのは単純にうれしいですね。図書館って、安全圏だと思うんですね。そこで話しかけても怪しまれない。</p> <p>本はものすごくエクスキューズにもなれば、動機にもなるし、読んだらそれはそれでその人のものになると思います。</p> <p>どんどん人口が減って、地域のコミュニティ自体が難しくなっていくという予想がされているなかで、地域の居場所づくりに関わられたらと思います。</p>
②津山 B	<p>スーパーを経営する（株）マルイがコミュニティスペース内にまちライブラリーを設置している。登録している本は、図書館の団体貸出の本とスタッフがセレクトした本。全部で200冊で構成される。</p> <p>地域に磁力をうみ出す多様な人の接点、知恵の集積拠点としての地域貢献の場として利用促進したいという思いがあります。</p> <p>津山市立図書館の本を毎月入れ替えるということもあって、自分もこの本を置きたいなという思いが出てくるので、本に囲まれているという楽しさがありますね。皆さん最初に目を止められるのが本棚のようで、それだけで「入りやすい、親しみやすさがある」と言われました。初めて来た方から「津山ってこんなふうに変わり始めているんだね」というリアクションはいただくので、こういう本が読める場所と図書館とのつながりで波及効果が生まれるのかなと思っています。</p>
③津山 C	<p>地元出身の地域おこし協力隊2年目の津山 C が、観光協会のメンバーとして空き店舗だったところを地域活性化拠点として情報発信や商店街の休憩スペースにまちライブラリーを設置して、商店街、地域のために実施している。</p> <p>もともと本に興味があったのと、本にはいろいろな広がりがある。商店街のお店をどうやったら活性化できるかみたいなこと、まちライブラリーという取り組みの話聞いて、すごくいいなと思って始めました。商店街の活性化を目的とした感じです。</p> <p>知っている人からはいい取り組みだねと言われるのですが、なかなか認知度が低いというか、全然広まっていなくて。この場所に立ち寄るきっかけにと思ったけど、全然立ち寄ってくれない。</p> <p>本を持ってくる人がもったいたらと思うんですけど、2~3人なんですよ。一度か二度、読書会みたいなイベントをやったのですが、それっきり。まだコンテンツを作れていない感じです。</p>

発言者	概況（上段）と発言骨子（発言部分斜体）
④津山 D 津山 E	<p>津山市中心部の活性化のために、アルネ津山 4 階に津山市と（株）パソナ岡山の共同運営地域交流センター「まちカレ」内で始まる。</p> <p><i>津山市には 2 つのまちライブラリーがあり、3 カ所目を作らないかというお話を津山 A さんからいただきました。もともと本は置いてあったんですけど、上手に活かせていませんでした。人が集まる場所にしたいなというところから始めました。</i></p> <p><i>まちライブラリーは今日オープンです。まちカレ自体も集客がまだまだ課題になっていますし、やはり人集めの難しさみたいなのところはあります。どうしたら地元の人たちの心に刺さる訴えかけができるのかなというのは考えています。相乗効果で、まちライブラリーにも人が来る、まちカレにも人が来るという流れを作っていきたいです。</i></p>

< 発言の総括 >

図書館の津山 A は、図書館員としての使命感から、また地域の将来への課題からまちライブラリーに注目し、実行する人に呼び掛けて 3 カ所立ち上げた。本と場の組み合わせで過疎化が言われるような地区への対策としてもまちライブラリーが効果的ではないかと考えている。津山 B は、コミュニティスペースを運営する中で本棚の存在は人が入りやすくなっていると効用を感じている。図書館から毎月定期的に配架される本にも触発を受けている。津山 C は、商店街おこしの一環でまちライブラリーを見ているが、認知度や利用者の少なさが気になっている。寄贈本の集め方にもイベントにも苦労している。津山 D、津山 E は、企業のスタッフとしてまちライブラリーに対応しているが、自社で実施している「まちカレ」への活性化につなげたい気持ちである。始まったばかりでこれからの集客に期待を寄せている。

<組織が主導する事例全体の考察>

雫石町では、まちライブラリーの講演に参加した人がそれぞれ別々に触発されて活動を開始している。雫石 A は、自らの親子カフェにあった図書をそのまままちライブラリーにできると気軽に始めているが、その後、地区センターの指定管理を受けるなどまちライブラリーを利用して自らの活動の領域を広げ、まちづくりにまで関心を持つようになっていく。アルバイトの雫石 B は、自らの生き方を見つけるために雫石に移住しているが、同世代より若い世代とのつながりを重視している。雫石 C は図書館員だが、まちライブラリーを気軽な活動だと捉えている。気軽であるがゆえに、業務としても個人活動としても我が事としてテーマを見つけている。

鶴ヶ島市の特徴は、鶴ヶ島 A の広げ方である。当初はまち全体に広げようという意気込みだったが、肩の力を抜いて自然な形で広げようとしているところが特色といえる。そのために参加する運営者もどちらかという自分の課題とすり合わせる形でまちライブラリーに取り込んでいる。本の活動を広げようという意識より、自らの活動に付加することによりさらに自らの活動の幅を広げ、潤滑油にしようとしている。

加西市は、観光協会の担当者が熱心にまち全体に広げようとしたところから始まっている。当初は 14 カ所に広げたが、趣旨の伝達に課題がある。それぞれまちライブラリーを漠然と概念的に捉えており我が事にできている人が少ない。その中で加西 C のように自らの絵本の読み聞かせ活動のようにきっちりやろうとして壁にぶつかり苦しんでいるケースもある。加西 D は、比較的我が事として捉えているのでこつこつと活動をつなげているように感じる。ただし、当初のまち全体でのまちライブラリーのネットワーク化に課題意識をもっている。

津山市は津山 A の個性で広がっているように感じる。ただし、各所とも組織でやっているまちライブラリーでその組織のメンバーの温度差があると感じられる。組織で運営をする時は、スタッフが我が事と思えているかが鍵になっている。

4 地区を整理すると組織が一方向的に広げようとしても運営者も運営する場所も各々別々で、まちライブラリーの意義や意図のすり合わせは困難である。鶴ヶ島市の鶴ヶ島 A のように組織の立場を越えて、個人的にネットワークを組ん

で運営していく方が趣旨を伝えていきやすい。雫石町の雫石 A と雫石 C に見られるようなおおらかで、ゆるくまちライブラリーをやることが結果として継続性や内容の充実につながっている。

以上、概括的に見ると最初にまちライブラリーの音頭をとった人物のまちライブラリーの捉え方や進め方が地区全体に影響を与え、広がり方の特色を生んでいるように考えられる。比較的ゆるやかに捉えたところでは、個性的な活動が活かされている。逆に、地域の活性化や集客にとらわれているところは、その後の展開で期待通りの成果が出なく、壁にぶつかっている様子が伺える。

4-4-3 個人が主導しながら取り組んでいる事例

次に個人を主体としている地区 3、10 の事例を紹介する。

⑤地区 3：東京都文京区

以下図 4-10 に東京都文京区とまちライブラリー概要を記載する。当該地区におけるヒアリング対象者は、図 4-11 である。

図 4-10 地区番号 3：東京都文京区とまちライブラリー概要

面積：11.29 km²

人口：233,9266 人（2019 年 6 月 1 日推計）

特長：23 区の中央北部にあたり、東京大学をはじめ学校が集積し、マンション居住者が増加しているが、同時に古くからの街並みも残り「谷根千」という下町文化もある。

まちライブラリーの数：8 カ所

きっかけ：2015 年 5 月 東京都港区西麻布での筆者の講演会を文京区 A が聞いたのが始まり。

図 4-11 ヒアリング対象者

文京区 A：都内の AI 会社に勤務。以前に勤務していた大手コンサル会社勤務時にまちライブラリーの講演を聞いて、文京区内で広げようと思っていた。

*2019 年 5 月 9 日 下北沢「Bookshop Traveller」にてトークイベントの形で筆者と対談

<文京区 A の発言>

谷根千っていうところに住んでいます。まちライブラリーの話聞いて、これは使えると。谷根千で自分も何かやってみたいと考えたんです。私は今仕事で認知症の高齢者の自立支援というのをテーマに、成年後見制度という仕組みを広げるための仕事をしています。実現するためにはやっぱり社会と

触れ合う場所が要るんだと、だからまちライブラリーがすごく使えるなあという印象がありました。

(中略)

もともと私は、文京区全体でやるつもりはなくて、谷根千エリアでやろうと思ったのですが、文京区の社会福祉協議会の方がいろいろお手伝いしてくれたおかげで文京区の中で広げるというような活動になりました。

文京区は全部でまちの数が 20 あるので、30 カ所くらいすぐできるだろうという印象なんですけども。そうやって、特色ある活動をやったりしてまちを盛り上げていくと、全国からファンがやってくるかもしれないよという、行政が観光的な視点で協力してくれるかなということをやっています。

<考察>

文京区 A は、もともとは老人の居場所としてまちライブラリーに注目するも、地域全体を巻き込んでいき、まちづくりやまちの文化づくりに関心をもって進めている。特に文京区全体の地区数が 20 あるので、まちライブラリーを 30 カ所くらいにはしたいという全体目標をもっているのが特徴である。数の増加については、文京区社協のメンバーで協力している人の存在も大きい。谷根千の地区からの広がりを与えており、行政への距離も近くなっている。ただまだ広がり端緒であり、どの程度の定着があるかは見ていく必要がある。

⑤地区 10：大阪府泉南地区とホンノワネットワーク

以下図 4-12 に大阪府泉州地区とホンノワまちライブラリー概要を記載する。当該地区におけるヒアリング対象者は、図 4-13、図 4-14 である。当該地区対象者ホンノワ A は、当該ホンノワネットワーク代表で、発起人である。ホンノワ A には、2015 年から 2018 年にわたり 3 回ヒアリングをし、図 4-14 のメンバーの 1 人としてグループヒアリングをしている。

図 4-12 地区 10：大阪府泉大津市、貝塚市、岸和田市、堺市、和泉市
大阪府泉州地区とホンノワまちライブラリー概要

面積：365.72 km²（上記市総計） *各地区の人口・面積データは役所 HP より筆者合算

人口：1,364,943 人（上記市総計 2019 年 6 月 1 日推計）

特長：大阪府の泉南地区を中心地区。海岸線から山際までと一部、ニュータウンと旧来の街並みによって構成されている。

ホンノワまちライブラリーの数：14 カ所（正式な登録は 11）

自宅の前に置いた巣箱型まちライブラリーのネットワークである。泉大津市のホンノワ A を起点としてママ友のつながりが広がったものである。

きっかけ：2014 年マイクロ・ライブラリーサミットにホンノワ A が参加したのがはじまり。

図 4-13 ヒアリング対象者

ホンノワ A

（ホンノワまちライブラリー、ホンノワネットワーク代表）

2 児の母、大阪府泉大津市出身で東京在住であったが、2015 年、仕事の関係で大阪が拠点の生活になった。巣箱型本箱を父親が作成し、自宅前に設置している。

<ヒアリング>

2015年より3度にわたりホンノワAにヒアリングを重ねている。さらに2019年6月、仲間のメンバーとのグループ討論を交えた結果を記載する。

<ホンノワA 発言>

①2015年10月に実施されたマイクロ・ライブラリーサミットにて

磯井さんがまちライブラリーの活動を発酵にたとえて、「初めから大きな変化を起こすことはすごく難しいけれど、一人ひとりが酵母菌のような存在になって自分自身や周りを変えていくことによって、それがやがて大きな変化になっていきますよ」と話されたのが私にはすごく印象的で「今、新しい酵母菌ができたな」という時や「今すごくいい感じに発酵してるんじゃないか?」というときがあって、活動を続けていくモチベーションになっています。

②2016年3月に実施した運営者グループ討論にて

まちライブラリーを始めてから変わったことですが、自分でも思っていなかったことで、地域に対する、自分の見方がすごく変わりました。私は、若いときは自分が住んでいるまちに全然魅力を感じていなくて、自然もないし、文化的な活動もないし、早く出たいと思って、それで東京へ行ったんですけど、また戻ってきてこういった活動をして、地域とかかわっていて、泉大津のことをすごく愛して、すごい魅力があると感じるようになったんですね。小さな町なので、行政と市民の距離が近いということも感じるようになりました。この活動も、行政の方がサポートしてくれ、小回りが結構利く町なんだなと思って、泉大津にいま5カ所（発言当時）まち角本箱ができていますけど、それがもっと市内に広がれば、文化的な活性にもなるんじゃないかなと思って、それが夢ですね。

③2018年6月筆者ヒアリング

この活動を通じていろいろな人と出会って、つながっていく、また広がっていくというのは、自分の生き方の一つとして楽しいと思います。人間関係って煩わしい部分もいっぱいあるじゃないですか。でも、そういう人との出会いとかつながりなしでは人って健全に生きていけないんだなという気持ちになってきました。今って、作らないと思えば、いくらでも人間関係を作らないで生活できていく時代じゃないですか。地域でも、自治体でも。でも、なんか煩わしい、大変そうな人間関係はあえて作らなくても、本箱は何かゆるい人間関係でつながれる、そういう媒体かなと思ったりしています。

以上、3回にわたる発言を聴取しているが、2019年6月さらにまちライブラリーホンノワグループで意見を聴取する。

図 4-14 グループヒアリング対象者

ホンノワ A

(ホンノワまちライブラリー 代表) まちライブラリー番号 112

ホンノワ B (わがま{ま}ちライブラリー) まちライブラリー番号 293

ホンノワ C (ハピネスバコ) まちライブラリー番号 646

ホンノワ D (fam) まちライブラリー番号 650

質問：ホンノワまちライブラリーができて広がったきっかけは？

ホンノワ A：

一番初めに私が磯井さんのところに話を聞きに行って、九州に行った H さんが近くに住んでたんですよ。自分の家で始めるって言ったら H さんも始めたいって言って、一緒にグループを作ろうかって言う話になって名前をいろいろ考えて、本の輪がいいかなって、ホンノワになったんです。

質問：それ以外の人への広がりとは？

ホンノワ A：

私がまだ泉州のほうに引っ越しして来て間もなくで、あんまりつながりがないうのをマイクロ・ライブラリーサミットに参加したおりにご自分でもまちライブラリーをやっている図書館司書の T さんに話したら、ホンノワ B さんを紹介してくれました。T さんは、自身がイベントに参加できない時でも、イベントに役立ててって言って、関連の絵本を図書館からセレクトして貸してくれるんです。

ホンノワ B：

T さんのこと本ソムリエって言ってます、私。

質問：ホンノワまちライブラリーをやってみてどうか？

ホンノワ A：

不思議なのが東京に住んでたときって、地域のつながりとか、地域で何かしたいとか考えていなかった。完全にサービスを受ける側でその生

活に何にも疑問も抱いてなかった。まちづくりとかまちのこととかに全然関心がなかったのに、まちづくりのことに興味もちだした。社会に目を向けさせてもらったっていうのは、すごいありがたいなってほんとに思ってます。

ホンノワB:

私なんかはずっと芸術の世界、グラフィックデザインとかやってきたから、たいていアートを通したワークショップとかそういう切り口が多かったんです。でもアートとか言われると「うちの子は下手やし」とか「苦手やからできんかも」とかちょっと敷居が高くなるのも常々感じてて、でも本やったらあんまり読まへん人でもそれなりに身近にあたりするから、私の求めることってアートを通さなくても伝わる方法が「本やった」と思っています。私はそこから本っていいなあって、つながれるって。これをやってなんか居場所ができた感じがします。

ホンノワD:

私は、実家が駄菓子屋だったのでその場所で何かやりたいねって言ってまちライブラリーをつくりました。「fam」(ファム)という名前にしたのは、家族的なつながりの象徴にしたかった。

質問：行政との関係は？

ホンノワC:

今回貝塚ブックフェスタもやってみて、私らが盛り上がり、貝塚公民館と図書館が協力してくれる形やったんやけど、これが貝塚公民館、図書館発で私らがお手伝いやったら、ほぼああいう形にはなれへんかった。やっぱり行政が来ると縛り感が出るんです。こっちはこうしたいんです、協力してくれますかっていう感じで提示の仕方をしたから、わりと自由度が増した状態で広報をしてもらえる。

ホンノワA:

私は全然行政とつながりなかったんですけど、市民活動の助成金を出す市民協働推進課っていうところがあって、そことつながってから、広報をやってくれるっていうのはすごい大きかったですね。でも初め、助成金申請するのに、「1年後本箱いくつにするのが目標ですか？」と、そういうふうに出さないと、成果がでましたってならないんだなっていうのはありました。

質問：仲間ですることについて？

ホンノワC:

今回ブックフェスタで、他の人に任したら思ってたよりもいいものができる。貝塚では、巣箱まちライブラリーが少ない。車でまわらないと

行けない。子どもも学区を出て外出できないのでイベントのスタンプラリーの仕方を子どもが歩きやすいように考えないとだめだと話している。

<考察>

大阪府泉州のホンノワまちライブラリーは、ホンノワ A が当地に戻ってきて身近な近隣関係の欠如から始めたが、地域への愛着や行政やまちづくりへの関心を喚起させている。またゆるやかな人間関係を生みだしながら仲間づくりをし、自らも新しい仲間の発掘をしてモチベーションを高めているといえる。近隣との緩い関係、仲間の発掘による助け合える関係と 2 通りの場づくりをしているといえる。

ホンノワグループは、女子会ののりで事が進んでいる。気軽に出てくるその場のアイデアを大切に、無理せずネットワークが広がっている。お互いに干渉もしないが、必要に応じて協力しているところがとても興味深い。文京区 A のケースのようにどこまで広げるかなどの目標をまちの規模から考えるのではなく、子どもが歩きやすい距離にできたらいいと考えるなど、女性らしい視点である。またホンノワ A が言っているように本来まちづくりなど地域に関心を持たなかったような人でも自然とまちのこと、行政のこと、地域の政治にも関心を持つようになってきているのも新たな発見であった。行政主体で動くのではなく、ホンノワのように緩いつながりの生活者たちが、主体性をもって行政と接した方がうまくいくと考えているのも知恵であると感じた。

4-4-4 地区で連坦して広がっているまちライブラリー小考察

4-3、4-4-2、4-4-3 で見てきた地区で連坦して広がっているまちライブラリーの事例を以下表 4-9 のようにまとめた。

表 4-9 地区別拡大の一覧

地区	設置数	広がりにおける主導的役割	主体	拡張意欲
大阪市中央区	32	当初、筆者が一斉に設置、他は各々個別に設置	個人	普通
雫石町	4	まちライブラリーの講演がきっかけで別々に設置	組織	低い
鶴ヶ島	8	市職員が個人的なつながりを利用してゆっくりと広がる	組織	普通
加西市	14	市による一斉設置。一部追加と閉鎖。	組織	強い
津山市	3	図書館館長のつながりにより派生	組織	強い
文京区	8	個人がきっかけとつながりをつくっている。一部は自生的に派生。	個人	強い
ホンノワ	14	個人がきっかけとネットワークをつくって拡大	個人+集団	普通

4-4 では、大きく分けて個人が主導しているものと図書館や行政が主導しているものに分けて調べてきたが、それぞれに派生が生まれている。個人が主導する場合でも、文京区 A は意図的に派生を手伝っている。ホンノワ A は、文京区 A とは違い、仲間づくりのネットワークを通じて自然と横のつながりを持ちながら広がっている。組織的な取り組みでも雫石町の当初は企業が意図的に仕掛けたが、特段、横のつながりがないままに個々に設置者が自生的に生まれている。鶴ヶ島市や津山市は、組織的な対応をしているように見えるが、中核の人物の個人的なつながりを中心に広がっている。鶴ヶ島市と津山市の違いは、設置を促された相手が鶴ヶ島市の場合はすべて個人であり、津山市の場合は逆に組織が運営母体になっている。加西市は、一斉に設置支援したものである。

それぞれに利点と課題があるように考えられるが、個人が主体になっている方がまちライブラリーの意図は伝わっていると考えられる。逆に組織が主体となるとそれが薄れていると考えられる。ただ組織が主体の場合でも個人的なつながりが強い方が、まちライブラリーの意図は伝わっている。それぞれの地区

内での拡張への意欲は、主導するものの考え方により違いがある。数字目標をあげて拡大を目指している文京区の文京区 A のようなケースもあれば鶴ヶ島の鶴ヶ島 A のように自然の流れに任せている事例もある。

これを中央区と比較すると現在の文京区 A は、筆者の当初と多少近似的なところがあったが、現在の筆者は鶴ヶ島 A と同様に自然体である。ただ、文京区 A、鶴ヶ島 A の両方とも各々が知り合っていて広がっているが、中央区ではすでに筆者とのつながりは限定的になっている。むしろ第 2 次、第 3 次のつながりが派生する事例や逆に他のつながりや情報収集によりまちライブラリーが誕生している事例が見受けられる。加西市は、市の担当者が開始のうちにまちライブラリーの共通フラッグや感想カードなどの関連する部材を設置希望者に配ることで各地の設置準備の負担は軽減しているが、形式的な広がりになっているところが出てきている。ただし、その中でも加西 D のように自らの課題や夢を見出して実行している人も出てくる。

総じてどのような方式でも広がりは生まれるが、まちライブラリーを我が事として受け止めて広げるには時間と人間的なつながりが必要不可欠であり個別対応をした方が望ましいと感じる。ただし、必要以上の支援をすると個々の自発性が落ちて、結局一斉設置方式と変わらなくなる危険性もある。ホンノワのように緩やかな集団化や中央区 C がやっているような近隣数カ所のまちライブラリーの連携は、個々の個性と連携を両立させるには興味深い方法と考えられる。

4-5 個人が単独で運営している事例

本節では、個人が単独で運営している事例をみていきたい。本節の目的は、個々の人がどのような動機や目的でまちライブラリーを始め、結果どのような場づくりにつながっているのかを考察することにある。以下、現在運営を継続しているところとすでに閉鎖したものに分けて記載する。4-5-1 で運営を継続している事例を、4-5-2 で運営を停止した事例を取り上げる。ナラティブな観察とヒアリング結果を以下に記載する。

4-5-1 運営を継続している事例

①コミュニティづくりが目的で始めたのではないマイクロ・ライブラリー事例

発言者：個人 A 30代、女性

児童文庫の主宰者

<概況>

大学が運営していた子ども図書館が、建物の老朽化による閉館が決まり、当時の司書と地域住民で2万7000冊ほどあった蔵書を地域で活用していく方法を模索し、区の担当者も協力し、何カ所かに本を預けることになった。ところが区の担当者が変わり、結局2011年に蔵書を撤去するように言われた。その一部を引き継いでできた児童文庫である。

2013年8月に実施された「マイクロ・ライブラリーサミット」にて個人AとAの妹、個人Bが発表している。個人Bは、疾病のため障がいがあり、発話が多少不自由であったが絵本の『ぼちぼちいこか』を大きな声で暗唱した。その個人Bが亡くなったのはサミット10カ月後の2014年6月であった。姉、個人Aは児童文庫を始めた理由について次のように述べている。

なお発言は、2016年5月、もりのみやキューズモールのまちライブラリーにて「本のあるコミュニティ」というテーマでトークイベントをした時のものである。

<個人 A の発言>

今回、コミュニティがテーマと聞いていたのですが、先日、堺のほうから見に来てくれた方に、地域コミュニティのために頑張られていてすごいですねっというようなことをおっしゃっていただいたのです。

それを聞いて私は即座に「私はコミュニティのためにやっているつもりはなくて、自分は本が好きだから活動しているだけです」というふうに、自然にぼろっと言ってしまったんですね。

私にとっても、この活動を続ける動機の大きな一つは、妹の個人 B の存在で、とにかく妹は大学が運営していた児童図書館がすごく好きで、ここがなくなるときに「嫌だ」と言って書いた署名を私は今でも持ち歩いています。妹にとってすごく大事な場所。障がいのある妹だったんですけど、障がいがあっても受け入れてくれるような場所、そういう温かい場所で本があってという場所がすごく大事だったので活動していたという部分が、すごく大きな私の動機の 1 つです。その妹が急にいなくなってしまったので、ほんと、どうしようかなと思ってはいたのです。でも、なんか分からないですけど、活動から自分自身が引くことはできなかった。それは妹の思いじゃなくて、自分の意思だったなとは思いますが。今まで妹の思いによるところが大きかった活動が、その時、ある意味初めて、自分の意思でやる活動になったように思います。

<考察>

児童文庫誕生の様子を個人 A に語ってもらったが、彼女の妹への思いが強いのが分かる。障がいを持つ妹と 2 人で子ども時代から通っていた児童図書館の環境をいつまでも続けたい気持ちの裏側に妹への思いがある。きわめて個人的な動機で、また冒頭の発言のようにコミュニティを作ろうというような気持ちがまったくないのに、周りから見るとコミュニティの拠点のように思われる活動になっており、実際そのような場として運営されている。個人的な思いが、地域社会で利他的な場づくりにつながっている事例である。役所の対応も担当者が変われば継続性がなくなる顕著な事例で、結局個人の思いが継続性の柱になっていることをうかがわせる。

②亡妻の遺した本を活かす自宅でのまちライブラリー事例

発言者：個人C（70代、男性 奈良県大和高田市）

まちライブラリー@大和高田はるえ文庫（登録88）

<概況>

個人Cは、2013年夏、9年間寝たきりの妻を看取った。筆者に連絡がきて「2000冊の本を遺しており、自分の家をまちライブラリーにしたい。本が好きでなくどうしたらよいか相談にのってくれ」というものであった。何名かのまちライブラリーのボランティアが集まり、遺された本を整理して始まる。その後、個人Cの活動は、新聞や地元のケーブルテレビなどで紹介されるようになった。

<個人Cの発言>

2014年5月放送CATVでの発言

妻が亡くなったころは、早く妻のところに行きたかった。でも今では、（まちライブラリー）はるえ文庫ができたので一日でも長く生きて、少しでも見てもらいたい。

2018年5月筆者ヒアリング時の発言

奥まで行かなくても本にふれられるように玄関にも本棚を作った。近所の人が利用してくれるけど、誰も来ない日もあるな。玄関の外に置いている巣箱型の本棚には、子ども用に漫画の『名探偵コナン』なんかも買って入れている。最近は、週3回くらい老人ホームでボランティア麻雀に行ったり、その仲間が家に来たりするよ。

<考察>

本が好きでもないが、亡くなった妻への想いが強く、その想いをまちライブラリーを通じて表現している中で本人の生きがいを見つけている。近隣の人が、どんどん利用しているような環境ではなくても、活動を通じて自ら地域や趣味の仲間との接触が増えているのが特色である。個人Cの自宅は、まちライブラリーの利用というより同好の趣味人の集まりに変化した場といえる。

③障がい乗り越えるまちライブラリーとカフェを実施している事例

<発言者>

個人D (40代、女性：聴覚障がいのある方、カフェ運営)

個人E (カフェ運営のパートナー)

東京都小平市

まちライブラリー@サインカフェ ベリーユー (登録 213)

<概況>

小平市で「サインカフェ ベリーユー」という店でまちライブラリーをやっている個人Dは、生まれつき耳が聞こえない。子どもの頃に、障がいがあるためにいじめられ、いやな思いをした時には図書館に逃げていたという。個人Dが、障がいのある人でも来やすい本のある飲食店をやろうと考えたのが「サインカフェ ベリーユー」である。「ベリーユー」は、「あなたらしく」という意味である。

<個人Dと個人Eの発言>

個人D:

今まで接客を経験したいと挑戦しましたが、耳が聞こえないために採用されなく、採用されても裏方作業でした。「聞こえなくてもできますか？」という思いを試してみたいという気持ちが原動力になっていると思います。

個人E:

お客さまも彼女には話しやすいらしく、筆談しているうちに深い話になることもある。筆談だと名前が分からないと話づらいので、お名前を教えてください。多く、お客さまとの関係が近いかもしれない。彼女と話すために手話を学び始めたという方もいらっしゃいます。

個人D:

地元でも仲間を増やしたいと思い2名ほどまちライブラリー仲間を見つけたが、10カ所はほしい。地域活性化になるし、地域の交流になる。これからは、地域の方々と障がいのある方々が「対等な関係」で何かをすることに役立てたらと考えています。

<考察>

個人Dは、自らのハンディを乗り越え、人との会話を楽しめる場所が自分でもつくれることを証明するための一つとしてカフェとまちライブラリーをやっている。その中で自ら来訪者とコミュニケーションすることに自信を持ち、さらに地域への関心を広げている。筆談ゆえに名前を名乗り合って会話を進めるために、より深いコミュニケーションができるのも特色となっている。個人Eも障がい者への理解が深まることを求めており、個人Dの役割をサポートしている。個人Dも健常者、障がい者、お客さまが対等な関係性で新たな展開が生まれ、それが「場」へと発展することを望んでいる。社会的な役割をそれぞれが感じられる場づくりの事例といえる。

④遺された米屋をまちライブラリーとギャラリーにした事例

<発言者>

個人 F、個人 G 夫妻

(50 代、夫婦：東京都世田谷区在住、故郷・埼玉県東松山市)

まちライブラリー@comeya 東松山 (登録 221)

<概況>

個人 F、個人 G 夫妻は、個人 F がデザイナー、個人 G がライターで世田谷の自宅を仕事場にしている。両親の他界により埼玉県東松山市にある米屋の店舗が空き家となっていた。週末、しかも土曜日だけの運営でも大丈夫だと確認し、気軽な気持ちでスタートした。ギャラリーは入りづらいということに気付き本棚が見える場所に置いて、気軽に入ってもらおうようにしている。また近所の洋館に住む高齢者の話を聞き、冊子にまとめて差し上げたら評判になり、他の人からも依頼を受け、徐々にお付き合いの幅が広がっている。

<発言>

個人 F:

この場所でやってみようと思ったのは、家を残したいという気持ちより知りたいということかな。曾祖父が本町通りで米屋をやっていて、そのあたりの昔がどうなっていたのか知りたいと思ったんです。

個人 G:

主人の妹が「このまちが嫌いなんだ」と言って石垣に移住した。なんでかなという目で見て歩くとそんなに嫌いでもなくて、以前から素敵だなと思っていた古いお宅があって、お話を聞きにいったんです。家主さんと娘さんがとってもいい人で、昭和 2 年生まれの家主さんの話をまとめて『まちといえとかぞくのはなし』という冊子にしました。どなたにもドラマがあって映画化したいくらい。

個人F:

僕たちはお話を聞かせてもらうのが楽しいんですが、冊子を作ってあげると家族に自分のことを知ってもらえたと感謝されるんです。このまちに馴染めるかどうか不安でしたけど、始めてみたら住んでいる世田谷より濃い人間関係を作れている。本棚の効用としては、本好きが来てくれて、そこから広がる。僕たちがどういう人物かも知ってもらえる。

<考察>

個人F夫妻のまちライブラリーは、週に1回土曜日だけ、午後1時から5時までの限られた時間の開館ながら極めて深い地域とのつながりを作っているという点で興味深い事例である。時間とか回数とか量的なものでなく夫婦でまちのことを知ってみようという好奇心が大切であると感じる。始めるきっかけも「ゆるさ」があったからという発言からみても負荷のない活動であると感じている。「本」を媒介にお互いの考えていることが垣間見えることが伺える。またまちへの愛着が、妹さんが感じていたものと夫婦が見たもので違った風景になっているのも興味深い。身近な人間関係や関心事によって地域への愛着が変わることを示唆しているといえる。

4-5-2 運営を停止した事例

次にまちライブラリーを閉鎖した事例を取り上げる。

①貸会議室とコワーキングスペースに併設した事例

<発言者>

個人 H、大阪市在住 40代 男性：会社社長

まちライブラリー@梅田茶屋町（登録 123）

2017年9月ヒアリング

<概況>

個人 H は、大阪府中央区谷町地区の紳士服屋の次男として生まれる。東京の大学を出て、東京で就職したが、27歳の折に実家の紳士服業を継いだ。自分の強みは IT で、それを使って業績を上げた。家族全員が商売に携わる一家である。2012年くらいから自分の会議室が欲しくて調べているうちにまちライブラリーを発見した。

<個人 H の発言>

まちライブラリーを図書館というイメージより会議室として考えていた。本が好きなので本を並べて、セミナーやコワーキングルームの集客にしようという動機だった。ただ会議室ビジネスは収益が上がらず成立しなかった。コワーキングもほとんど機能しなかった。よってまちライブラリーもその閉館とともにやめることになりました。

<考察>

個人 H のように家族全てが商売人であるという環境から、商売をして利益を得ることが社会への貢献であると思える環境にあったと思われる。個人 H にとってまちライブラリーは、一つのマーケティング手段として考え、環境整備の一環であったが、本来のコワーキングスペースやミーティングスペースとしての事業がうまくいかず、場所の閉鎖にいたったのである。「場づくり」のマーケティング手段としてまちライブラリーを利用することの難しさが表われている事例である。

②古いアパートのリノベーションに併設した事例

<発言者>

個人 I 福岡市在住 20代、女性：役所勤務
まちライブラリー@桜坂山ノ手荘（登録 99）

<概況>

2013年、福岡のアパートをリノベーションした不動産会社の担当者と連携して実施して開設したが、2017年に閉鎖。

（2017年9月にヒアリング）

<個人 I の発言>

特にメッセージカードはすごく面白いなと思って。『耳をすませば』のシーンに出てくるようなメッセージを書き合うというのが、デジタルが進んだ今の世の中で面白さがありそうだなと思いましたね。

本に関するイベントを、1~2カ月に1回くらいやっていた。課題としては、建物自体が気軽に入れないので、夜だけでも開けようということになったが、仕事が忙しくて、やめることになったんです。

福岡テンジン大学なんかにかかわっていますが、けっこう違って、まちライブラリーは癒やされるような感覚でしたね。他のところでは、活発な方が多くて、向上心が強いというか、ガツガツしている。まちライブラリーに来られる方というのは、本が好きとか、なんだかすごくほっとするような感じでしたね。

<考察>

個人 I は、若く行動力も好奇心もある中でまちライブラリーをやりたいという気持ちを出した結果、場所も人も見つかり、望んでいたことがかなっていく実感を得たことが大きいといえる。ただ本人も役所職員として多忙になり、定期的な開館が難しくなったので閉鎖となった。興味深いのは、まちライブラリーの場合、他の NPO 活動などと比べて、活動意欲に引っ張られてくる人ではなく、本が好きだという集まりでもあり「癒しの場」となっているとしていることである。

③閉める勇気が必要と考えた事例

<発言者>

個人J 20代、テレビ局在職、初任地が大阪、転勤先が沖縄
まちライブラリー@水上家（登録189）

<概況>

2011年、東京まち塾に参加後、初任地大阪でISまちライブラリーに出会い、その後、沖縄で自らまちライブラリーを実施するも、最後に閉鎖をする。
(2017年9月ヒアリング)

<個人Jの発言>

大阪へ赴任してISまちライブラリーに参加したんですが楽しかった。都会の中に家族みたいな関係性があるのがすごく楽しくて。

2013年の夏に沖縄に異動して、まちライブラリー的な場所がなくなったので、けっこうしんどくて。まちライブラリーは、楽しかったというのと同時に、必要だったんだなと思ったんです。

後半2年で、まちライブラリーをやろうという仲間と出会って、芋づる式に広がった。ただ初めて僕自身が場所のホストになり大変でした。それは予想外でした。中心人物たちがみんな沖縄を離れていくんです。この辺から、毎月やっていくのがすごくしんどくなる。終わった時には、すごくほっとしたんです。

にぎわい広場というところで本を持ち寄って紹介する会をやった。本棚は要らなかったんだな、集まった人たちで話したりするのがまちライブラリーなんだと。ストーンと腹に落ちてやめることができました。

<考察>

個人Jは地域の多世代の人の集まりを求めており、まちライブラリーは生活の中での楽しみであり、必要であると感じている。そんな彼でも実際の運営側に回るとその責任感が問われた結果、苦しい思いをする。身近な仲間の流出による孤独感といったものであろう。その後、場所ではなくつながりが大事であるということが個人Jの中で昇華された形で終わっている。場づくりというハードにとらわれずに中身を大切にすることにより楽になっていく様子が見取れる。

4-6 利用者、ボランティア、スタッフの観察

4-6-1 利用者の観察

以下表 4-10 に利用者の概況とヒアリング結果をまとめた。

表 4-10 <利用者の概況と発言骨子>

発言者	概況（上段）と発言骨子（発言部分斜体）
利用者 A	<p>大阪市中央区の IS まちライブラリーを利用する 2 歳女兒の母。月 1 回ペースで絵本を中心に利用する。大阪市中央区大手通に在住している。 *ヒアリングは、2019 年 9 月、IS まちライブラリーにて</p> <p><i>公共図書館より近くにあって便利だから利用しています。子どもが小さいので公共図書館だと声を出したりして気を使うけど、IS まちライブラリーは特にそのようなことを気にする必要もない。子どもの絵本は、買うと高いし、ここなら良い絵本もあって助かります。</i></p>
利用者 B	<p>谷町 6 丁目にある空堀商店街で米屋をやっている。商店街の古本屋さんから聞いて、まちライブラリーのことは知っていた。中央区 C さんやスタッフ B さんがやっている読書会「ぶらりまちライブラリーラリー」に参加したのが、まちライブラリーを利用するきっかけである。 *ヒアリングは、2019 年 9 月、IS まちライブラリーにて</p> <p><i>商店街での米屋の仕事ばかりやっていると視野が狭くなってくのでちょうど何かやらなくてはという時に、スタッフ B さんから声をかけてもらった読書会に参加した。その時のテーマが「タスマニア」だった。この会に行かなければ、まちライブラリーとお付き合いすることはなかった。来ている人との相性が良かったと思う。本好きではあったが、もりのみやの本棚を見ても借りる気はしない。本は、大型書店か古本屋で買う。まちライブラリーを利用するというより、人とのつながりでイベントに参加しながら、普段会わないタイプの人や考え方に会っている。</i></p>
利用者 C	<p>もりのみやキューズモールのまちライブラリーで編み物の会をやっている。ボランティアとして飾り付けなど協力もしている。 *ヒアリングは、2019 年 9 月、もりのみやキューズモールにて</p> <p><i>編み物の会をやる場所を探していたおりにもりのみやキューズモールのまちライブラリーを見つけた。イベントするにしてもここはお茶代だけで済むので、人が集まらなくてもそれなりに負担なくやっていけるのがとても良い。編み物の楽しさを一人でも多くの人に伝えたくてやっている。子どもがもっと来ると思ったが、同世代の女性なんかに参加してくれている。</i></p>
利用者 D	<p>もりのみやキューズモール近隣に住まう。60 歳になって始めた絵本の読み聞かせをもりのみやキューズモールのまちライブラリーで実施している。 *ヒアリングは、2019 年 9 月、もりのみやキューズモールにて</p> <p><i>結婚して平野区にずっと住んでいたが、主人の看病でもりのみやに戻ってきた。もりのみやキューズモールで読み聞かせができるようになって幸せです。元々歯科医院の家に嫁ぎ、主人も子どもも歯科医師で裏方をやってきたけど 60 歳になったおりに、これ以上私が家でやるより外に出た方が良いと思って、平野区図書館で読み聞かせの講習を受けたのが始まりです。それ以来十数年携わっており、それを活かした生き方ができるのが嬉しい。</i></p>
利用者 E	<p>サービス付き高齢者向け住宅の入居者としてまちライブラリーを利用している。 *ヒアリングは、2019 年 7 月、ウエリスオリーブ津田沼にて</p> <p><i>まちライブラリーができて良かった。まちライブラリースタッフは、この本が面白いとか紹介してくれて、よく話をする。ただ、目が悪くなり昔のように本を読めなくなったのが残念だ。サービス付き高齢者向け住宅のスタッフは忙しそうで話しかけにくい。</i></p>

<利用者の観察からの考察>

利用者 A は、身近な図書室として IS まちライブラリーを利用し、また公共図書館より子ども連れでも気軽に行ける場所だと感じている。利用者 B は、仕事関係以外の人とのつながりをまちライブラリーに求めている。利用者 C は、自ら興味があり広げたいと考えている編み物を人に伝える場所としてまちライブラリーを捉えており、同様に利用者 D も子ども達への読み聞かせをする場としてまちライブラリーを評価している。利用者 E は、サービス付き高齢者向け住宅の入居者であるが、まちライブラリースタッフと本の話をするのを楽しみにしている。このように利用者は、本を閲覧したり借りたりという利用だけでなく、むしろ自らの目標を達成する場としたり、会話や交流を楽しみにする場としてまちライブラリーを活用している。

4-6-2 ボランティアの観察

表 4-11 にボランティアの概況とヒアリング結果をまとめた。

表 4-11 <ボランティアの概況と発言骨子>

発言者	概況（上段）と発言骨子（発言部分斜体）
ボランティア A	<p>定年後、府立大学でボランティアとして、イベントの企画や主催をしている。</p> <p>*2016年3月に大阪府立大学のまちライブラリーで実施されたまちライブラリーを振り返るグループ討論の中での発言</p> <p><i>本は好きだったんですけど、最初はまちライブラリーの話を聞いたとき、よく分からなかった。でも聞いているうちに、地域に根ざっていて、いろいろな人の交流、人がキーになっているということで興味を持ちました。</i></p> <p><i>情報は見えませんが、本は見えますからね。本という媒体を使って不特定の人が集まるというのはすごくいいなと思いました。それと人のネットワークですね。本を読んで「実はこんな本があったな」と、人と本をつなぐことに興味をもってここにボランティアで来ています。異業種交流にしたって同じような者には出会えるが、まちライブラリーへ来たら、おそらく知り合いになることもなかったやろうなと思うような人と知り合いになれます。</i></p>
ボランティア B	<p>IS まちライブラリーの利用者からイベントなどのボランティアをやり、もりのみやスタッフにも一時期なっている。</p> <p>*2016年3月に大阪府立大学のまちライブラリーで実施されたまちライブラリーを振り返るグループ討論の中での発言</p> <p><i>最初に思うのは、まちライブラリーに来られる人が普通の集まりとまったく違うことが分かりました。雑多な人が来るけど本がキーワードなのか、自分のことだけをガッツとしゃべる人が少ない。2番は、皆さん何らかの形で自分から動こうとされている。3番は、弱いつながりの良さです。1カ月、2カ月経ってもなんとなくホワーとつながっているという弱いつながりがあるので心地良いです。</i></p> <p><i>正直僕は本が嫌いですし、人も嫌いやったんですよ。僕自身は一人で行動するほうが大好きですが、まちライブラリーを始めて変わって人とかかわったときの自分の立ち位置になじんできたと思っています。</i></p>
ボランティア C	<p>2017年9月からIS まちライブラリーの土曜運営ボランティアを募集したおりに応募してきた一人である。</p> <p>*2017年11月聴取</p> <p><i>一人暮らししようと思って、淡路島から出てきた。大阪にきて入った会社が失敗だった。6か月程度いたが結局身体を壊してやめざるをえなかった。今、仕事はしていなくてリハビリ中、社会復帰にむけてIS まちライブラリーでボランティアができて良かった。</i></p> <p><i>まちライブラリーには、外とかかわりをもたなければと思い、もりのみやのまちライブラリーに飛び込んだ。</i></p> <p><i>本を使って人とつながるとするのが好きで、ここは、心の安全弁のような気がする。</i></p>

<ボランティアの観察からの考察>

ボランティア A は、自分自身が出会う範囲の人間とは違う多様な人に出会えることが魅力であると発言している。また、本が持つ可能性に言及している。情報の積層化を可視化することが大切だと考えている。ボランティア B も同様に自らの出会いとは、タイプが違う人との出会いに戸惑いながらも自ら人嫌い、本嫌いと言いながらまちライブラリーを利用し、スタッフとして手伝ってもいる。ボランティア C にとっては、本があることが心の安定を取り戻す場所であり、人とつながらなくてはならないと思いつつも時間がかかると考えている。IS まちライブラリーをそのリハビリステージとして捉えている。このようにまちライブラリーを単なる交流の場というより心のよりどころとして捉えている人もいることが分かった。

4-6-3 スタッフの観察

表 4-12 にスタッフの概況とヒアリング結果をまとめた。

表 4-12 <スタッフの発言>

発言者	概況（上段）と発言骨子（発言部分斜体）
スタッフ A	<p>府大まちライブラリーのスタッフとしてまちライブラリーに携わる。</p> <p>2016 年 3 月に大阪府立大学のまちライブラリーで実施されたまちライブラリーを振り返るグループ討論の中での発言</p> <p><i>まちライブラリー@大阪府立大学の事務局を担当して、この 3 月で丸 3 年になります。私にとってまちライブラリーは、適度で微妙な距離感と、人の面白さと、自分の枠を広げる、の 3 つかなと思いました。まちライブラリーを始めてから変わったことなんですけど、一つは自分の知らなかった自分を発見することがすごく多い。自分の考え方の広がりということを感じています。もう一つの変化は、私はまちライブラリーを主宰していないけど、一応中心にいるみたいな微妙な立場だなど思っていて位置がすごく難しいなど思っています。私の夢は、まちライブラリーの中なのか、外なのか。外でつくってしまったほうがいいのかと思うときもあるけど、まだそこは全然分かっていません。</i></p>
スタッフ B	<p>自分のお店でまちライブラリーを実施し、その後各地のまちライブラリーでもボランティアとして関わり、府大で 1 年、IS まちライブラリーで 2 年半近くスタッフをやっている。</p> <p>*ヒアリングは、2019 年 9 月、IS まちライブラリーにて</p> <p><i>最初は、近くのまちライブラリー 3 軒を訪問する会があってその時にまちライブラリーをやり始めました。参加して下さった方が、本を寄贈してくれたのですが、誰も借りてこられないし、実際これをどう活かしていこうかとずっと気になっていた。本でつながると自分でも人には言うけど、私自身は別に人にあんまり会いたいと思っていなかったので戸惑っていた。そんな折、別のまちライブラリーの人達と満月ごとにそれぞれのまちライブラリーで本を持ち寄り、交換する会を順繰りにすることになった。でも一緒にやった人の 1 人は、本が好きでもなくただ人が本を持ってきて楽しそうに話すのが好きだという人で、いろいろな形でまちライブラリーができるのだと感じた。他のまちライブラリーの人をみていると運営するのに苦労されている人が多いように感じる。賑わいを求めている人もいるが、本は本来内面的なものでそんな感じにならないと思う。世の中、活性化というのが木次乳業の佐藤忠吉さんが「地域は沈黙化しなければならぬ」と言っているのがとても印象に残っている。</i></p>
スタッフ C	<p>サービス付き高齢者向け住宅のまちライブラリーを担当している 73 歳の男性スタッフ。囲碁有段者であるスタッフ C は、まちライブラリー内で囲碁会を実施し、入居者、近隣と参加者を集めている。</p> <p>*ヒアリングは、2019 年 7 月、ウエリスオリーブ東村山富士見町にて</p> <p><i>最初は働けるか心配だったが、やってみて刺激があって、若返ったような気がしてよかった。週 2 日、働いているが年取った人にちょうどよい仕事だ。本が好きだし、本をきっかけに利用者とも話がしやすい。年齢も近い人が多いのでなおさらである。今では、囲碁を通じて入居者や外部利用者の中からも仲間だと思える人もできてきた。</i></p>

<スタッフの観察からの考察>

スタッフ A は、ボランティア A や B と同様に出会えない人に出会うということを語っている。ただスタッフ A の場合は、自らの目標がまちライブラリーにあるのかどうか迷っている。活動に自己目標をぶつけられる他の利用者や、それを受け止める立ち位置にいる自分は違うということを感じているためだと思われる。スタッフ B は、自らまちライブラリーを運営し、ボランティアやスタッフとしても携わっている。その視点からまちライブラリーの運営者が必ずしもうまく運営できていないことを肌で感じている。その結果として他のまちライブラリーと連携して、本を持ち寄るイベントをしながら回している。またもともと本で賑わいをつくることに疑問を感じており、むしろ日常の場として沈静化することが大切であると話している。スタッフ C は、高齢者ながらまちライブラリースタッフとして日々の運営に携わるだけでなく、囲碁会を実施し、入居者、外部利用者と仲間といえる関係を築いている。

<利用者、ボランティア、スタッフの観察からの考察>

以上、利用者、ボランティア、スタッフの発言を見てきたが、利用者は本の利用だけでなく、自己の目標を達成するイベント等の場所としても利用している。また多くの関係者が、自らは出会えないような人との出会いを魅力の一つと感じている。その中で自らの居場所を見つけたり、さらなる可能性を見つけたりする場としている。また場所としての賑わいより、心を落ち着ける場としてのまちライブラリーに注目している者もいる。

4-7 関係者観察全体に関する小括と考察

第4章では、まちライブラリーの関係者観察を行ったが、以下にその小括と考察を記す。

関係者観察全体に関する小括

筆者の省察からは、まちライブラリーが本を活用した場づくりになるまでに紆余曲折していることが明らかになった。活動の当初は、個人的ライフワーク活動を始めたいという思いでビジネスモデル型の場づくりを求めるがその狙いが達成できず、組織での躰きなどを経て自らを受け入れてくれる包摂的な環境に身を置いて、教育的活動か場づくりかと揺れていた。その後、大阪府立大学のまちライブラリーが始まる過程で場づくりに収斂していく。

この過程で生まれた大阪市中央区の IS まちライブラリーでは、仲間意識から活動を支え、自らもまちライブラリーをやっていた人がいたが、不特定多数の参加者が生まれる中でその場を離れるものも出てくるなど、人の関係性が変化すると場づくりの変節が起こりうることが判明した。

また大阪市中央区では、まちライブラリーが集中して広がっていったが、当初は筆者の働きかけもあったものの、そのほとんどは個々に情報を得たり、人とのつながりを得たりして、まちライブラリーを始めていることが分かった。

同様に地域全体で広がっている地区についてもそれぞれ関係者にヒアリングを実施したが、行政や図書館が段取りした事例の中には、運営が苦しいとか人集めができないといった発言が見られた。逆に個々の運営者が自生的に始めたところでは、運営が楽しいとか楽であるといった反応が見られた。まちライブラリーの解釈により違いが生まれており、人を巻き込んだりしようとしなくて自らの楽しみでやっている人の方が、総じてうまく運営できていることが判明した。運営者の始める動機が大事であることが分かった。

運営者の動機をさらに調べるために、個人で継続してやり続けている人と閉鎖した人について観察した結果、本を活用して場づくりをしようという意思を持っていないのに、結果として場づくりになった事例の方が継続しやすいことが分かった。何らかの経緯で残された本を活用しようとしたり、自らの障がい乗り越えるために始めたりと動機が我が事の場合が、結果としての場づくり

につながりやすい。逆に、本を活用して人を集めようとしたり、定期的なイベントをしたりして場所の活性化を図った人が、結果を得られないで閉鎖している。

利用者は、本の閲覧や貸出場所としても利用しているが、自らの興味ある分野の活動場所としても捉えている。ボランティアやスタッフは、普段出会えない多様な人との出会いがまちライブラリーの特色だと発言しており、まちライブラリーを多様な人との出会いの場としていることが分かった。また中にはまちライブラリーが、心の安全弁であると発言するなど癒しの場として捉えている人がいることも分かった。

関係者観察全体に関する考察

以上、本章では筆者の事例と他の事例を横断的に観察したが、筆者の事例でわかるようにまちライブラリーが場づくりになるまでには、紆余曲折しており最初から場づくりに収斂していなかった。このことから人の行動は、まず目先の目標や課題に反応し、それを解決して次の段階に進むということである。同様に他のまちライブラリー運営者でも当初の動機や思惑と違った方向に収斂している者もいる。IS まちライブラリーの周辺でも、仲間意識から応援していたものが、自らの地元と同様に人間関係をつなぎ地元と同様の地域だと感じる者もいれば、逆に仲間意識を大切に、手料理を出すイベントを通して場づくりに参加していた者が、不特定多数の人が来ることで、本来の意義を持てなくなりその場を去る者もいた。このように人との関係性や個人的な動機が、場づくりに大きな影響を与えていることがわかる。

図書館や行政が恣意的にまちライブラリーをやらせても動機付けは生まれにくく、むしろ個人的な目標や夢があればまちライブラリーを楽しみながら運営し、結果としての場づくりにつながっている事例も散見された。第4章4-5の個人Aが語っていたように場づくりやコミュニティづくりに関心がなく、ただ本が好きな妹の思いを受け止めたく運営しているだけですと答えているように自らの目標や夢を充足させる活動が、結果としての場づくりになりえるのだということである。このような事例は、同じく4-5の個人D、個人Eや個人F、個人Gにも言える。自らの障がいを克服した活動をしたい、両親が遺した米屋を

使って地域のことを知りたいといった個人的な動機が場づくりにつながるのがある。さらにそれら個人的な課題が、周りの声から変節して、地域そのものに愛着や関心が生まれることも4-4-3でみたホンノワAのような事例である。このように個の活動は、我が事と思える意味合いを見つけなければ活動を開始しても、継続的な運営にはつながりにくいと言える。自己充足こそが、活動を喚起し、活動を継続する源泉とするならば、従来の制度に依拠した活動とは明らかに違った方向性を持っていると言える。制度的に依拠する、特に公的な場合がそうであるが一定の方向性を明示し、その方向に合致したものだけが活動を実施できるようになりがちである。社会的な弱者を助けようとか、環境問題を解決しよう等特定の目的を持つ場合や、あるいは地域のコミュニティ拠点をつくろうとしてその目的にかなう条件を決めて支援、あるいは認知する場合等である。このような事例では、その目的や条件に合わなければ、運営も利用もできない。これに対してまちライブラリーでは、束縛する条件がないため運営者の意図を反映されやすく、また利用者も運営する側との合意があれば自由な利用方法が望める。

これは、運営者だけでなく、利用者やボランティア、スタッフにもいえることで、我が事としての課題と夢を見つけ、場づくりに参加していること自体が楽しみになっていることが場づくりの鍵となっている。

このように個々の人のはじめる動機と運営をしている中での他者からの受け止め方が場づくりに影響をもたらしているのが、まちライブラリーを活用した場づくりの特徴である。

また、まちライブラリーは、特定の環境だけでなく多様な場所で設置、運営できることが分かった。どの地域、どのような人でも開始でき、また周囲の仲間や地域の人々の個性が混じり合うなかで各々独自の場づくりができていたことが確認できた。

第5章 まちライブラリーを活用した地域の場づくり

5-1 まちライブラリーの場づくりに関する整理と考察

第2章の先行研究、第3章の概括、アンケート結果ならびに第4章の観察結果から、本、運営者、利用者がまちライブラリーの場づくりにおいて果たす役割に視点を移して整理し、考察する。

5-1-1 まちライブラリーの場づくりにおける本の役割

第2章 2-5-2 で本研究における場づくりは、本を媒介にし、人と人との関係性により場が形成されるとした。第3章の運営者アンケートからは、本を活用し、場の活性化を目指しているものが多く見られた。また利用者アンケートの結果、一番多い利用目的は本の閲覧であった。ここでは、まちライブラリーの場づくりにおける本の役割を考察する。

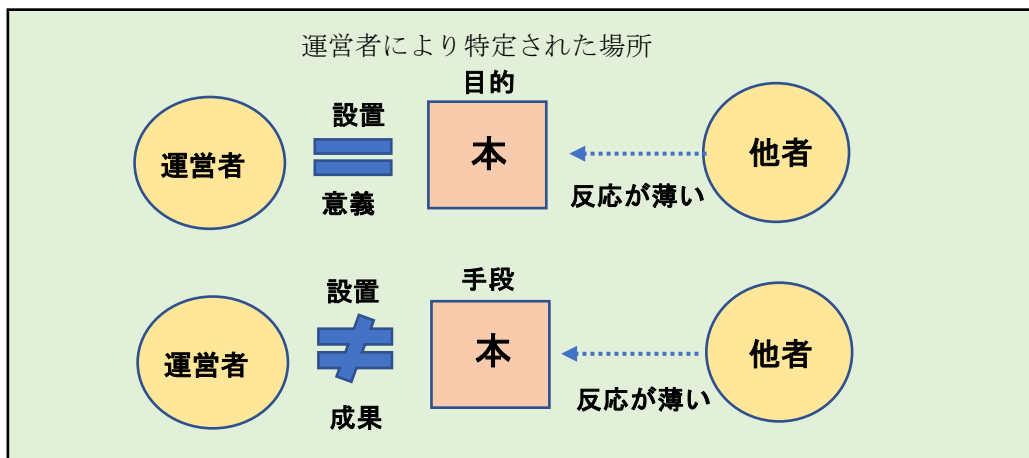
運営者からみた本の役割

第4章 4-5-1 で記述した亡妻の本を使って自宅をまちライブラリーにした個人Cの事例や第4章 4-4-2 の雫石Cのオカルト本のまちライブラリーの事例は、本の活用や収集に力点が置かれている。一方、貸会議室の運営促進を目指した第4章 4-5-2 の個人Hのように、集客することに重点があって本を置いている事例もある。それぞれ本を集積し、まちライブラリーを始めるが、個人Cや雫石Cは利用者の有無にかかわらず継続して運営し、個人Hは途中で閉鎖している。

第2章 2-5-2 図2-1 では本を介して場づくりが成立すると想定したが、図5-1に本の位置づけを模式化する。自らオカルトの本を集めた雫石Cは、その本が誰かに読まれるか否かより本を収集することに意義を感じている。遺された妻の本を活用した個人Cは、他者の反応があればなおよいが、その反応は二次的な目標となり、公開できたことに意義がある。つまり雫石Cや個人Cは、図5-1の上段に示したように本を置くという段階で意義づけがあり、目的をある程度達成しており、他者の反応が低くても寛容に受けとめている。逆に個人Hの場合は、図5-1下段のように集客の手段としているのでその反応が大事で、

しかもその反応が売上につながるなど、数値目標を達成しないと成果を得ていないと感じてしまう。同じ本を置いても目的と手段で位置づけが大きく変わってくるのである。このように場づくりに本を活用するとしても本を媒介物として何を求めるのかで場づくりにおける位置づけも変化するのである。

図 5-1 まちライブラリーの間づくりにおける本の位置づけの相違点



利用者からみた本の役割

第3章3-4-2で記述したように利用者の利用目的は地区による違いもあるが、全体では「本の閲覧」42.7%、「本の貸出」25.4%で、本を活用する場となっていることが分かる。また、利用してよかった点でも「意外な本に出会えた」と答えた人が38.9%になり、利用者から見て、本が場を利用する際の大事な要素といえる。利用者の5割以上が月1回以上利用していることと併せて推察すると、本の閲覧、貸出、寄贈、本を使ったイベントの実施や参加といったように、本を軸に利用する場になっているといえる。

第4章の利用者へのヒアリングでも、利用者Aはまちライブラリーの利点に子どもの絵本を借りやすい点を挙げ、利用者Dは60歳から始めた絵本の読み聞かせができる場として利用していると答えている。このようにまちライブラリーは、利用者にとっても本を媒介として行動する場所になっている。

さらに本が場の利用に与えている影響を考察するために、第3章75ページで紹介した、もりのみやの商業施設に設置されているまちライブラリーの利用実績で検証してみたい。2015年4月から4年間の利用実績を表5-1で整理する

と、延べ 58 万人が訪れ、そのうち併設しているカフェのレジ客数は延べ 13 万 6000 人になる。イベントは 1073 回開催され、延べ 1 万 2500 人が参加している。他の延べ 43 万人は、本を閲覧し、貸し借りのために訪れる人である。イベントに延べ 1 万 2500 人、カフェ利用数も延べ 13 万 6000 人で多くの人々が利用しているように見えるが、もっとも割合が多いのは本を利用する人たちである。

これは、もりのみやの事例だけではなく最初のまちライブラリーである IS まちライブラリーでも同様のことがいえる。IS まちライブラリーは第 3 章 74 ページで紹介したように 2011 年から運営しているが 2016 年までは常時開館ではなく、イベントによる集客を図ってきた。月に 1 回で 10 名から 20 名ぐらいが参加するのが常であった。つまり月間の利用は、せいぜい 20 名程度ということになる。これに対して 2017 年 4 月より月曜から土曜日まで開館するようになると、2018 年上半期の来館総数は 1238 名となり、月平均 206 名となった。従来月に一回のイベントを実施していた時の 10 倍の利用者が訪れる場になっているといえる。

まちづくりや地域の活性化策では、イベントの重要性が唱えられるが、その実施には多大なコストと労力をかけている事例が多い。むしろ日々来る人が気軽に、しかも何度も来るような場づくりが大事である。その原動力となっているのが本を閲覧する、貸出をするという日常的利用であることが、まちライブラリーにおける場づくりの特徴である。

表 5-1 もりのみや利用者実績 (2015 年 4 月～2019 年 3 月)

寄贈冊数	貸出冊数	来館延人数	カフェ レジ客数	イベント 件数	イベント 参加者数
約 16,000 冊	約 63,000 冊	約 58 万人	約 13.6 万人	1,073 件	12,500 人

(注 1) 寄贈数に当初別のまちライブラリーから移送した約 3000 冊を含む。

(注 2) 貸出は、2015 年から 2016 年 3 月までは 1 人 2 冊で 2 週間まで、その後は 1 人 3 冊で 2 週間まで。

(注 3) 来館数は、機械的なセンサーでカウントされたものである。

(注 4) レジ客数は、カフェのレジのカウント人数である。グループで買い物に来た場合、1 人で支払った場合は 1 人とカウントされる。

本の役割の小括

まちライブラリーは、運営者が本を設置する意図により、場づくりの様相に違いが生まれやすい。運営者が集めたい、あるいは公開したい本を設置する場合は、利用者の反応の良し悪しにかかわらず、運営者は運営を継続している。逆に、本を人集めの手段として置く場合は、運営に行き詰まったり、閉鎖したりしている。どちらの場合も運営者は、特定の意図をもって本を設置するが、設置することが目的か、手段かで場づくりにおける本の役割が違うということが分かった。

逆に、利用者から見ると本は、その場を利用する目的になっている。また、貸し借りをすることにより日常的にその場を利用することにもなっていることが分かった。

このように本は、運営者にとっても利用者にとっても、場の核になっているが、両者の場に関する意識は相違しているともいえる。運営者にとって本は、自らの意図で設置でき、その場に利用者が来て本を手にとってくれることを期待している。別の言い方をすれば、意識するか、しないかは別にして、その場をつくることに主眼がある。しかしながら、利用者は、その本に興味を持ち、閲覧したり、借りたりすることが目的で、その場をつくることを意識していない。本を活用しているうちにその場を訪れ、結果として日常的に利用する場になることもある。このように利用者は、無意識のうちにその場を利用しながら、結果として場づくりに貢献していることになる。同じ本を媒介にしながら、運営者の意図と利用者の意図が、交錯しながらまちライブラリーの場づくりは成り立っているといえる。

5-1-2 まちライブラリーの間づくりにおける運営者の役割

本節では、まちライブラリーの場づくりにおける運営者の役割を整理し、考察する。第2章2-4で見た場づくりの先行研究では、片岡等が場づくりの運営者に注目したが、場づくりの運営者が自生的に広がることを想定した研究は見られなかった。本研究は、運営者に注目し、その自生的な広がりを観察するという研究であり、管見の限り初めての研究といえる。よって、本節では、まちライブラリーの場づくりにおける運営者の役割を明らかにする。

第3章の概括ならびにその考察で見てきたように、個人から組織まで様々な運営者がいることが分かった。また、その結果、公的な場所でも私的な場所でも設置され、生活空間の様々な場所に広がったことが確認された。まちライブラリーには、個々の人が運営してみようとする動機付けがしやすいと考えられることは見てきた通りである。しかしながら運営者アンケートで判明したように、運営する人の4割程度が、本を活用して地域や施設を活性化させたかったと回答しており、同時に運営に対してほぼ同じ程度の割合の人が、うまく運営できていないと答えている。まちライブラリー運営者は、地域・施設の活性化や人の賑わいを求めてまちライブラリーを始めている人が多く、その結果が伴わない場合に迷いや行き詰まりを感じている人が多いと考えられる。

しかしながら個々の運営者の意見を聞いてみると、雫石Cのように運営が楽であるとか、鶴ヶ島Aのように行政の仕事より楽しいと答えている者もいる。個人Cのように亡妻の文庫を1人でも多くの人に見てもらいたいとか、個人Dのように自らの障がい乗り越えて、地域とのつながりをつくろうとしている者もいる。これらのヒアリング結果との違いはどこから生まれているのかを以下に整理し、検証したい。

ヒアリングした運営者の発言をもとに、活動を肯定的に捉えている運営者と運営に課題や悩みを抱えている運営者の相違点を検証すると、我が事として自己充足のためにまちライブラリーをやっているかどうかにかかっていることが分かってきた。

例えば、肯定的に捉えている鶴ヶ島Aは、表4-6の概況で書いたように市長からリニューアルした市役所ホールにまちライブラリーを作るようにとの指示を受けて活動を開始したが、本当に「楽しんでやっている」とか「心のオアシ

「みたい」と発言しており、まちライブラリーを仕事のように捉えておらず、自らの息抜きのような活動と捉えている。またまちへの広げ方についても自然な広がりをお願いしており、無理に働きかけても実現しないこともあるので誰かが持ってきてくれた話にのるようにして、気持ちが楽になるやり方を選択している。

同じように雫石町図書館司書の雫石 C は、表 4-5 に紹介したように、図書館に寄贈された本を隣接する公民館に 200 冊程度移設してまちライブラリーを実施しているが、貸出もノートで自主的な管理をしており、図書の再利用と図書館が休館で借りられない人などが気軽に借りられることを旨にしている。本人も「手間がかからない」という管理しないやり方が、まちライブラリーの一番良いところだと捉えている。

逆に加西 A、加西 B は、表 4-7 にあるようにまちライブラリーに行き詰まりや無力感を覚えている。加西 A は、自らの店舗内でまちライブラリーを実施しているが、そのやり方を利用者やスタッフに伝えようとしてもうまく伝わらないのでうまく運営できていないと感じている。加西 B は、自らが住む家を地域のコミュニティスペースにし、その玄関先にまちライブラリーを置いていてもその認知が徹底していないため誰も利用していないと発言している。このように加西 A、加西 B は、まちライブラリーを概念的に受け止めながらも、それを自ら楽しんでやるのではなく、他者に伝えてやってもらうようにしている。雫石 C や鶴ヶ島 A のように自らが楽しくやるのか、他者にやらせようとしているのかの違いがある。

さらに表 4-7 に記載した加西 C は長年やっている読み聞かせをやって子ども達にも周囲にも浸透しなくてつらいと述べており、目標を達成しようとしてかえって楽しめていない姿がそこにある。目標を達成しようというよりも、過程を楽しんで自らの楽しみや夢が実現できるかもしれないという自己充足につながる動機付けが、まちライブラリーを継続的に運営していくうえで重要な鍵になっている。

そのような中で、運営者の動機と目標が変化していく事例もある。第 4 章 4-3 のホンノウ A のように、当初は自らのつながりを求めた自己充足を目指して始めたまちライブラリーが地域への関心につながり、動機や目標の変化が結果

として本人の励みになっている事例である。この事例からは、人は他者の反応によって、自らが考えてもみない可能性を発見するということが分かる。

以上、運営者アンケートとヒアリングを併せて考察すると、運営者本人がまちライブラリーを楽しんでいたたり、身近な目標を達成したりして自己充足を目指している場合は、自己肯定感が生まれ、うまくいっているという気持ちになりやすくなる。逆に地域活性化を目指したり、数値的な目標を持ったりしている事例は達成感が生まれにくく、運営がうまくいっていないという気持ちになりやすいと考えられる。個人が関与するまちライブラリーでは、主体となる個人自身がまちライブラリーを楽しみ、携わることが大切であり、固定した目標より活動過程に柔軟に対応した取り組みが、継続して運営していく鍵になると思われる。また大切なことは、まちライブラリーを通して場づくりをしよう意識している人より、無意識に継続している人の活動のほうが、結果として地域の場づくりになっていることである。

運営者の役割の小括

ここまで見てきたように、運営者の動機により場の様態に違いが生まれることが分かった。楽しいとか気持ちが楽であるというように自己充足につながる時は継続されやすく、逆に誰かにやらせなければと外形的な目標を持った場合は、苦しい思いをしたり閉鎖したりすることが分かった。また周囲の好意的な反応により、自らの目標だけを追求するのではなく、地域や他者への貢献や愛着も生まれる。このように運営者から見たまちライブラリーの場づくりは、本を集めるとか、楽しいからやるなど、場づくりを意識しない中に生まれやすいといえる。目標に向かって計画的に進行する場づくりではなく、自然ににじみ出る、個性的で融通性のある活動が、結果として場づくりになっている。

まちライブラリーにおいては、「場をつくる」と表現するより、「場はつくられる」と表現するのが適切と言える。さらに個々の人が参加して成り立つ場づくりでは、自己充足できる課題や夢が、大きな原動力になりえる。お仕着せの目標では人は動かず、動いたとしても困難さを感じるということも、まちライブラリーの場づくりから得られた大事な知見と考える。

5-1-3 まちライブラリーの間づくりにおける利用者等の役割

本節では利用者アンケートおよび利用者、ボランティア、スタッフへのヒアリング結果から、利用者等がまちライブラリーの間づくりでどのような役割を果たしているのかを考察する。その意図は、利用者が単に場を利用するだけなのか、あるいは場を形成する主体なのかを確認することにある。

利用者アンケート結果からは、利用者のニーズが本の閲覧や貸出、カフェ利用や勉強・仕事、休息など、図書館の機能とカフェ的利用を求めていることが判明した。表 3-17 で利用してよかったことについては「居心地」が一番に挙がっており、次に「意外な本に出合えた」となっている。寄贈本によって成立しているまちライブラリーでは、普段目にしない本を目にすることを楽しみに、自らの居場所として利用している人がいると考えられる。このような傾向から利用者は、1人で、あるいは特定の人とやりたいことをやる時間をまちライブラリーで過ごしていることが分かってきた。このように見ると結果的には、従来の間づくりにおける利用者と変わらなく見えるが、第3章、第4章を併せて見てみると新たな側面が見られる。

第4章表 4-10 に記載したように利用者Cや利用者Dは、自らの趣味である編み物や絵本の読み聞かせの場所としてまちライブラリーを利用していることが分かる。また第3章3-4で紹介した大阪府立大学では、市民からの寄贈で本棚を埋めていくイベント「植本祭」²⁸を通じて、蔵書がない場所に徐々に蔵書を増やしながらか、利用者自らが大阪府立大学のまちライブラリーを育てる主役だと意識づけた。結果として、開館から6年で約1万冊の蔵書を集めている。単に場所を利用するのではなく、場所を育てる役割が利用者にあることが分かってきた。自らの興味ある分野について発表したり、表現したり、関連する書籍を寄贈したりしながらその場で仲間を見つけていけるところが、まちライブラリーの間づくりにおける特徴といえる。

²⁸ 大阪府立大学で実施した「植本祭」は、数名のグループに分かれて、それぞれのテーマに基づく本を持ち寄り、語らいをするようなイベントで、開館前の2013年3月に実施した。2日間で48組の話題提供者を集め、それぞれに数名程度の参加者が集まるように目標をたてた。個々の話題は「これからの働き方を考える」「美味しいお店が掲載されている本を持ち寄る」「田舎でのくらしを紹介する」など、話題提供者自らが持ち込んだ身近なものをテーマにし、将来の利用者になる人たちの主体的な場づくりへの参加を目指した。

さらにサービス付き高齢者向け住宅の例では、利用者Eは、まちライブラリーのスタッフと話すことを楽しみにしており、スタッフと会話したときに人のつながりを感じると発言しているが、同じサービス付き高齢者向け住宅のスタッフCは、自らが得意とする囲碁によって入居者のみならず地域の小学生から高齢者まで参加する場をつくっており、自らも場に溶け込み、利用する人たちが仲間だと発言している。双方向の関係性が生まれており、スタッフと利用者が共同で場づくりに参加しているといえる。

第4章の表4-11にあるようにボランティアA、Bとも普段出会えない人との出会い、特に同種の勉強会や趣味の集まり、地縁とは違った雑多で刺激的な出会いにひかれている。本を核に多様な人が参加することにより、まちライブラリーの間が他にはない場になっていることがうかがえる。逆にボランティアCは、心身ともに自らの安らぎを求め「心の安全弁」として捉えている。同じく、表4-12にあるようにスタッフBは、本好きでなくても集まれる場所と理解し、地域活性化ではなく地域沈静化の場も大事だと指摘している。

このようにまちライブラリーは、利用者やボランティア、スタッフにとっても地域の場としての重要な役割を果たしているだけでなく、それら関係者によってつくられている場ともいえる。

利用者等の役割の小括

ここまで見てきたように、利用者にとってまちライブラリーは、単に本やカフェを利用するだけではなく、自己の目的を実現させる場であったり、人との多様なつながりをつくったり、自らの気持ちを落ち着かせたりする場になっていることが分かった。ボランティアは、幅広い人とのつながりや心を落ち着かせる場所と捉えて、またスタッフも本好きだけが集まれる場所ではなく、地域沈静化の場所が大事であると認識している。利用者、ボランティア、スタッフが、それぞれの個性を活かしてまちライブラリーの場づくりに参加してきて、本来の場づくりができているといえる。

このようにまちライブラリーの場づくりでは、運営者の意図だけではなく、利用者等の参加が重要であるといえる。

5-1-4 まちライブラリーの場づくりに関する小括と考察

5-1-1 では、まちライブラリーを活用した場づくりにおいて本の役割を考察した。運営者が、自らの趣味の本を集め、公開したい本を設置することで目的が達成されている場合は、利用者がいなくても比較的継続して運営される傾向が強く、逆に、本を設置することにより人を集めるなどの手段と捉えている場合は、運営に行き詰まり、閉鎖する事例もあることが見られた。この場合でも利用者等が本を閲覧、貸出をするなどの反応があれば、手段として有効になり場づくりが進み、本を活用することにより日常的な利用が促進されやすいことも確認できた。このようにまちライブラリーの場づくりでは、本という媒介性のあるものが場づくりの中心になっている。ただ、運営者と利用者では、同じ本を囲んでいてもそれぞれ思惑が違い、前者は場を意識し、後者は本の利用に意識が傾注している。ただ、利用者が本を日常的に利用するなかで、結果として本は場づくりにとって重要な役割を果たしているといえる。

5-1-2 では、まちライブラリーの場づくりにおける運営者の役割を考察した。運営者がまちライブラリーを始める動機は様々で、結果としてそれが多様な場づくりにつながっている。特に、個人でもやれ、組織でも運営できる融通性や個別性を大切にす姿勢が、多様な場所、多様な方法を生み出している。ただその運営者が、楽しくやれると考える人と、目標を持って成果を出そうとする人がいることが分かった。前者は比較的行き詰まりを感じずに運営しており、後者は行き詰まったり、運営をあきらめたりすることにつながる。また運営の目的も、随時変化していく場合もある。活動当初は、自らの人脈づくりや課題克服であったものが、周囲の関与により、地域への愛着や貢献意識を持つようになったりする。自己充足の中で結果としての無意識な場づくりが、まちライブラリーでは生まれやすいことも分かった。このようにまちライブラリーでの場づくりは、運営者の自己充足につながる内面的な動機を受けとめる個別性、融通性が大切であると考えられる。

5-1-3 では、利用者、ボランティア、スタッフの役割を考察した。多くの利用者が、意外な本に出合えたと感じていることが分かった。寄贈本を持ち寄り成立している場の特色だと思われる。またまちライブラリーは居心地がよく、休息や勉強・仕事の間として利用している人が多いことも分かった。ただ、人

とのつながりを感じるのは、まちライブラリーのスタッフとの会話と回答する人が多いように、1人での利用と特定の人とのつながりの両方を求めていることが分かった。また利用者は、自らが興味のある活動を実施できる気軽な場と考えている人もいる。これら活動を通して、自己実現をしている心地よさを感じていることも、ヒアリング結果から読み取れた。ボランティアやスタッフの中には、従来の仕事や趣味の集まりでは会えないような人との出会いを大切にしている人もいれば、まちライブラリーを心の安全弁と発言する者もいた。

このようにまちライブラリーで形成される場は、本、運営者、利用者等が絡み合いながら成立しているように考えられる。本は場づくりの中核であるが、運営者、利用者にとってそれぞれ違った思惑で活用されている。運営者は自己充足を優先してまちライブラリーを始めるが、利用者はその意図とは違った視点で利用しているうちに場づくりにつながる。一見、矛盾した意図や思惑が絡み合いながら、まちライブラリーの場づくりにつながっているのである。

以上のようにまちライブラリーによる場づくりについて整理したが、いくつかの知見を得たので、次節 5-2 においてその特色を述べる。

5-2 まちライブラリーを活用した場づくりの特色

まちライブラリーを活用した場づくりは、他の場づくりにない特色がある。本を場づくりの核にしており、多様な動機や意図を持つ運営者が、自生的に生まれている。公共図書館や本屋を模倣するのは難しいが、まちライブラリーは誰もが模倣しやすい場づくりであり、結果として多様な運営者が現れたともいえる。また本を設置する意図も運営者によって大きく異なり、形式的な模倣というより、運営者それぞれの解釈により設置される意図が変わってくるといえる。その結果、場の様相にも違いが生まれるが、結果として場づくりにつながるものもある。また利用者は、まちライブラリーをそれぞれの目的のために利用している。本を日常的に利用したりしながら結果として場づくりを担っているものもある。

このように本を核にしながら運営者、利用者の自己充足感を喚起し、個別性を大事にしながら、一見、矛盾するような関係性を内包しながら場づくりにつながっているのが、まちライブラリーの場づくりといえる。まちライブラリーは、本を核に、本の魅力を媒介にしながら、運営者や利用者等の個別性を大事にし、融通性に富んだ活用ができ、結果として運営者、利用者の意図を双方向で交換しながら、日常的な活用がなされうる場づくりにつながっているといえる。

以上が、まちライブラリーの場づくりの特色である。

第6章 結語

6-1 本研究を通してのまとめ

本研究では、まちライブラリーを提案し、実践的な活動を通じて、地域の場づくりを検証してきた。本研究の目的は、第1にまちライブラリーの運営者、利用者の実態を把握し、公的な制度に依存しない形で始められ、自生的に広がる場づくりがありえるかどうかを検証するものである。第2に、現代社会の中で個々の人間が場づくりに参画しうる環境や関係性を検証し、その場の形成過程と場の意味を考察する。第3に、まちライブラリーの場づくりを通して得た知見から、個人の活動が地域社会形成に活かされやすい視点を見つけることであった。

結論は、以下の通りである。まちライブラリーは、開始から7年で全国680カ所（一部海外）にまで広がった。設置場所も公的なところから私的なところまで多様な場所に広がり、運営主体も、個人から小規模な団体、大学から企業、図書館、行政などの組織まで多様な運営者によって運営可能なことが確認できた。またまちライブラリーの運営を始めるきっかけは、身近な人のつながりやそこから情報を得ること、独自の情報収集により他のまちライブラリーを訪れたりすることだった。このことはまちライブラリーに登録し、ホームページ等に掲載し、ゆるやかなネットワークを作った効果ともいえる。公的な制度や仕組みに依存しなくても社会的な広がりが生まれ、第1の目的を実証できたと考える。

第2の目的を検証するため、関係者に対するアンケートとヒアリングをした。その結果、活動を推進する運営者の意図も一様ではなく、様々な目的をもってまちライブラリーに参加していることが分かった。

筆者自身も、ビジネスモデル型の場づくりから始まり、「まち塾」という教育活動を試み、結果としてまちライブラリーに収斂している。全国の事例を概括してみても同様に多様な動機、目的でまちライブラリーを開始している。人とのつながり、地域の貢献、癒しの場というように多岐にわたった目的をもって始めていることが分かった。ただその動機や目的も常に変化している。個々

の人の動機や目的は移ろいやすく、結果として場づくりにつながるものもあれば、目的を達成する前に活動をあきらめる者もいた。

アンケート結果からは、まちライブラリーを始める動機は、本を活用して場づくりを目指しているものが4割程度であるが、運営がうまくいっていないと回答しているものも同程度いる。「地域や施設の活性化」の手段として活用しても数値的な成果が出にくいと推察される。

運営を順調に継続している人は、「楽しい」とか「落ち着く」という趣旨の発言が多い。これが活動継続への原動力となり、自ら喜んでやっている。同じ活動をしていても目標管理に縛られたり、他者からの働きかけで始めたりした人は、まちライブラリーが苦痛だと捉えている。活動の結果を求めるのではなく、活動の過程にまちライブラリーを活用した場づくりの鍵があるといえる。

行政や図書館が無理やり働きかけても、運営者は形式的な設置、運営になりがちである。むしろ行政や図書館の職員個人が、一件、一件個別に対応している方が、活動の意図が伝わり、実のある活動になり、運営者も喜びを感じている。

また、誰かにまちライブラリーをやってもらおうとしている人より、自らの活動として捉えている人の方が、周りに影響を与えている。我が事としての活動が、結果として地域の人を巻き込んだり、運営者本人も地域への愛着や貢献意識が生まれたりしている。特に示唆に富んだ事例としては、第4章4-4-3で紹介したホンノワAのように近隣に知り合いがおらず、身近な人とのつながりを求めてまちライブラリーを始めた人が、周りの反応により地域愛や地域貢献に目覚める事例がみられたことである。自分の課題追求の活動だったものから、社会的な意義や価値を生み出し得ることは、まちライブラリーを活用した場づくりで発見した一つの柱である。

運営者へのアンケートから、まちライブラリーを始めてから人の交流が増加した人は71.5%、人間関係が良好になったと回答した人は64.7%になっている。まちライブラリーは、多くの運営者にとって人とのつながりの場になっていることが明らかになった。

利用者へのアンケートからは、本を閲覧、勉強・仕事、カフェ利用など、一人で利用することを目的にしている人が多かった。ただ、人とのつながりを感じ

じるのは、運営しているスタッフとの会話と一番に回答するなど、特定のつながりを求めており、利用者はプライベートな時間と特定の人とのつながりを求めているとも推察できる。さらに利用者、ボランティア、スタッフとも、思いがけない人との出会いがあることをまちライブラリーの特徴としてとらえている。一部の利用者は、イベントがやりやすい場だと捉え、自らの発信したいことを発信する場に行っている。さらに心のオアシス的な安息の場に行っている人もいることも判明した。まちライブラリーは、目標達成の場と心の癒し、包摂してもらえる場が共存しており、人により、また時によりその場としての位置づけが変化していると思われる。

第2の目的で明かそうとした、人はどのような環境や関係性でまちライブラリーを始めるのか、またその場がどのような意味があるのかは、ここまで記述したように、その答えは多様である。まちライブラリーを活用した場づくりでは、こういう方法論をとれば必ずこうなるという答えがない。同じような環境でもまったく別の答えにつながる。これは、「個」から始まる活動の宿命である。同じ人であっても時間、環境、周りとの関係により刻々と変化している。同じ答えが出ないというのが本当のところだと考える。これら個々の人の変化を受け止められるのが、まちライブラリーを活用した場づくりである。

以上のように第1、第2の研究目的は達成され、公的な制度に依拠しない形で、公共図書館に期待されているような「地域の場づくり」を担うことはできると証明された。さらに加えるならその「場づくり」は、制度に依拠しない分、多様な運営者、利用者が関与できる場になっているといえる。まちライブラリーは、運営者、利用者等、多様な人が活用できる地域の場となりえたことが明らかになった。人々の生活の中で自然と生まれる場づくりになったと判断する。

また第3の目的は、まちライブラリーの場づくりを通して得た知見から、個人の活動が地域社会に活かされる視点を見つけることにあったが、それについては第5章で記したようにいくつかの鍵となる視点を得ることができたと考える。場づくりにおける本の役割で見たように、本は様々な意図で活動する人を引き付ける「媒介性」があり、その利用を通して場が定期的に利用される「日常性」を生むことが確認できた。また、運営者、利用者等から見たまちライブラリーの場づくりで見たように「個別性」を担保し、運営者、利用者間の「双

方向性」の反応により、場づくりが継続しやすいことも見てきた。このような多様な場づくりが生まれるためには、公的な制度に代表されるような硬直的な運用をしない「融通性」が大切であることも分かった。

先行研究で触れたジェイコブズは、演繹的なまちづくりではなく、帰納的な解決方法を得るため、まちを生態学的に観察する必要性を訴えた。本研究においては、ジェイコブズの視点の重要性を実践活動の観察から確認した。そのジェイコブズを評価したオルデンバーグは、まちの中の「インフォーマルな中核環境」がサードプレイスとして大切であると指摘していた。しかしながら、多くのサードプレイス研究は、その場の機能や形成の方法に視点が置かれ、オルデンバーグが唱える「インフォーマルな中核環境」に正面から取り組んだものはなかったといえる。本研究では、各地で展開されているまちライブラリーの多様な実態から誰もが「インフォーマルな中核環境」を作り得ることを証した。さらに宇沢が唱えた「社会的共通資本」とりわけ「制度的資本」についても、本研究で専門家や専門的知識に依拠しなくても成し遂げられることを明らかにすることができた。さらに加えるならジェイコブズ、オルデンバーグ、宇沢は、地域社会にすでにある現象を取り上げてそれらの本質に迫り、それぞれの答えを導いたが、本研究では個々の人の自生的な活動を積層することにより、彼らが指摘し提言したような地域社会を目指す環境を新たな方法で作成できることを証明したと考える。したがって、まちライブラリーの場づくりで得た視点は、これからの地域社会の形成にとって重要な鍵が含まれているといえる。次節において個の活動が活かされやすい地域社会形成のための提言をし、本研究の副題に挙げた「個」の活動が活かされる社会への道程への一指標としたい。

6-2 個の活動が活かされやすい地域社会形成への提言

ここまでまちライブラリーを活用した場づくりについて論述したが、まちライブラリーは地域の場づくりやコミュニティ形成にとって有用であることが証された。得られた知見から「融通性」「個別性」「日常性」「双方向性」「媒介性」の5つの視点を抽出し、個人が参画しやすい地域社会への提言を考案した。それぞれの視点について図 6-1 とともに以下に説明する。

①融通性の視点：計画性より融通性を大切にした社会

計画的で演繹的な手法は、我々にとって理解しやすくかつ成果が出やすいものに見えるが、実際は様々な壁が生まれやすい。可能な限り、それぞれの状況を踏まえ、融通性ある方法論を地域社会形成に適用していくべきである。

②個別性の視点：汎用的な解より個々の人に焦点をあてた社会

答えは一樣ではなく、個々の場所、人に焦点を与えていくやり方を大切にする。他の地区で成功しているからといってその形を模倣するのではなく、その場所や人の役割を考えて行動する。行政や企業の単位で動くのではなく、個々の構成員が個性を出せる環境を作り、地域に住む人とフラットな関係を築き上げることが大事である。

③日常性の視点：非日常的なものより日常性を大切にする

地域の活性化や賑わいを演出するイベントに目を奪われるのではなく、日常性を大切にする。普段その場を活用する地域の人を大切にしたい場づくりや活動を進めるべきである。まちライブラリーは、その推進に適したものであると考える。本を持ち寄り、本を借りあったりその本を片手に語りあったりする活動の場が日々の生活を支える基礎になっているといえる。そのような場が各地に広がるような環境づくりが大切である。

④双方向性の視点：相互の関係性を大事にする地域社会形成

人は一人では生きられないという言葉に代表されるように、お互い認め合える相手を見つけていきやすい地域社会形成が大事である。しかし、言葉通

りに人とのつながりを作るのは容易ではない。自然に人と触れ合える場づくりを通して地域社会形成をする施策を打ち出すべきである。

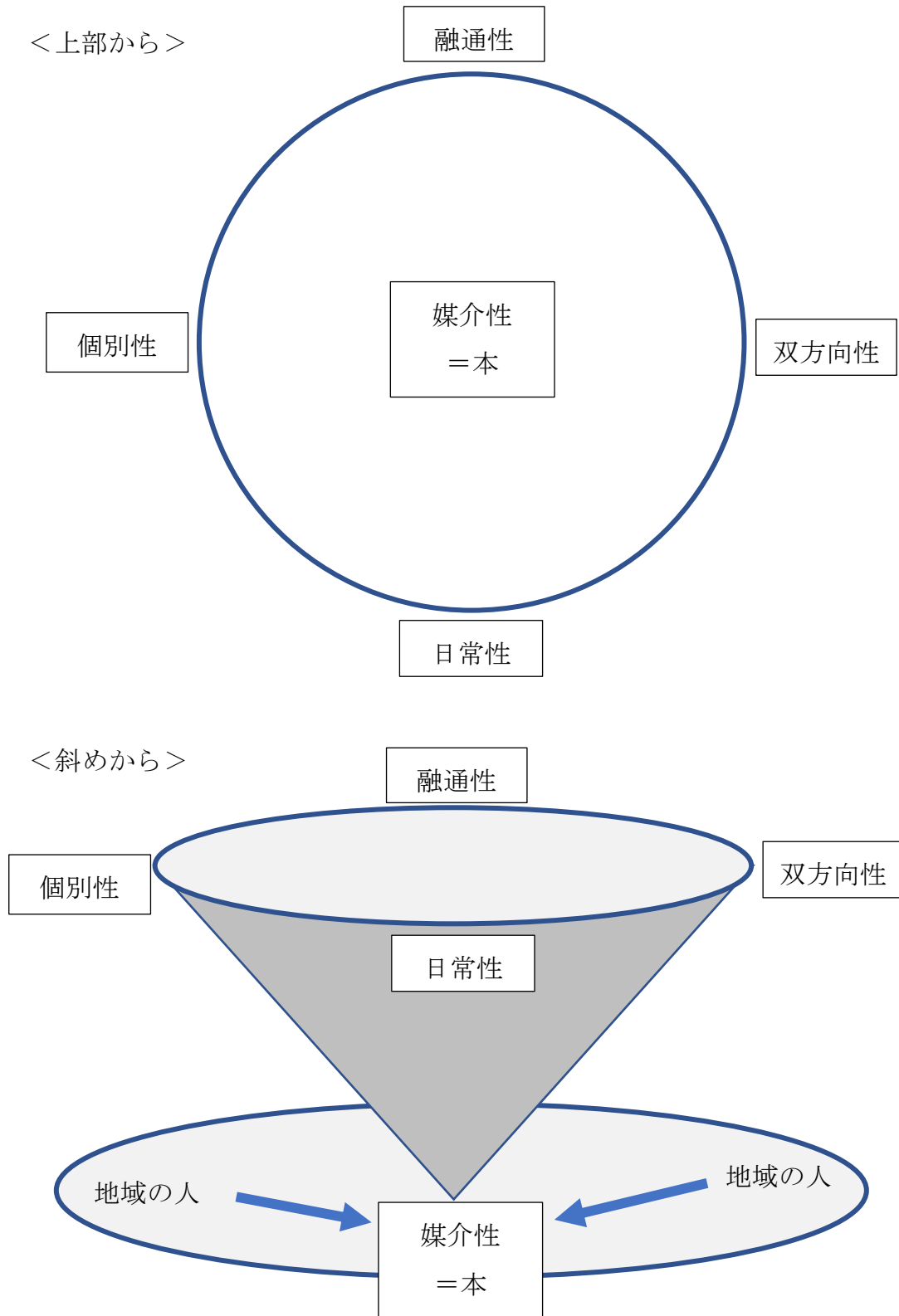
⑤媒介性の視点：人々を引き付ける媒介物（象徴となるもの）の設定

人を引き寄せるものがあれば地域社会形成もしやすい。引き寄せる核になる事物を媒介物とする。誰もが分かりやすく、自ら実行しやすいものがよい。アートや子ども食堂といった活動でも良いが、本はそれらに比べると敷居が低い。また本は、控えめでかつ個々の人に突き刺さる情報源でもある。心を開く大事な媒体であることを改めて認識し、地域づくりへの応用を進めていくべきである。

5つの視点の関係性について説明する。①から④までの各視点があれば地域社会で個の活動はやりやすくなる。ただそれらの活動が、収斂していくための媒介点が必要である。多様な人を呼び込むためには、彼らの思いや行動を結びつけるものが必要である。それが媒介性であり、まちライブラリーの場合は、本である。図6-1で斜めから表記した下部の視点である。その媒介点地域社会に生活する人に反応を呼び起こすという意味合いを表現している。媒介物への反応が、収斂して活動全体が4つの視点に準じている場合は、個々の活動が可視化して見えやすくなり、自生的な広がりにもつながると考える。図を逆円錐にしたのは、媒介性が地域の人を巻き込むアンテナとなり、その人たちを糾合する形で活動が広がることをイメージしている。その広がり際して、①から④までの視点が活かされることにより個の活動が円滑に活かされ、広がりを持つことを示している。

以上、まちライブラリーを活用した場づくりから得られた知見を地域の場づくりやコミュニティ形成に関する鍵として提言したい。ただし、これら視点はあくまでも実践のなかでの迷いや、行き詰まりに対応するためのものであり、絶対視して視点ありきで運用されるものでないことを付け加えておきたい。

図 6-1 地域社会に個人が参画しやすい座標軸モデル
(ISモデル: Individual for Society Model)



6-3 残された課題と今後の展望

本研究は、まちライブラリーを活用した場づくりの研究であり、場づくり全般を網羅したわけではない。よって他の手法による場づくりとの比較、検証は行えていない。

他のマイクロ・ライブラリーや社会的な活動を通じての場づくりは、多数存在する。本研究を終える間際に中国北京市でも市政府、行政区が中心になって従来の公共図書館と違った「リーディング・ルーム」を市内各所に設置し、運営を書店や学習塾、銀行などに委ねている事例情報も得た。中国でも読書離れが起きていると言われ、新たな施策を打ち出してのことである。韓国でも全土でマイクロ・ライブラリーが注目され、日本以上に活発に活動がなされているという韓国の図書館関係者からの情報ももたらされている。本研究でも触れた米国発祥の Little Free Library は、全世界で 9 万カ所以上に増えているという。

これらに共通するのは、公共図書館の枠組みを越えた形で本のある場が増えていることである。これは、宇沢が唱えた「社会的共通資本」が新たな形でそれぞれ生まれつつあるともいえる。その背景の一部は本研究でも見えてきているが、さらに比較検証ができれば、共通する背景とそれぞれの課題が見えてくると思われる。公共とは、どのような枠組みで維持されるのか、その考え方や方法論は一樣ではないが、そのような公共圏を取り巻く個が、自らの生きがいを持てる社会を形成するには何が大切かを明らかにしていく手法についても考察を深められると考える。今後、アジアの、また欧米でのマイクロ・ライブラリーを研究していき、当初の研究課題を追求していきたい。

さらに本研究では触れなかったが、書店の減少と本に触れられる環境の減少は大きな社会問題である。書店への DM サービス会社²⁹によると、日本の書店数は 2000 年には 21,495 店あったが 2015 年には 13,488 店に減少している。このような状況では、小中学生やシニア世代にとり本にアクセスするのが不利である。もちろん公共図書館もあるが、これも前述したように数の上では 2018 年現在 3277 カ所で、書店の減少を埋めるほどではない。また地方都市に行けば、図

²⁹ 書店への DM サービスをする日本著者販促センターサイトによる
<http://www.lbook.co.jp/001166.html> 2019 年 10 月 2 日参照

書館へも車移動が必然となってくる。身近な場所で本の接点をつくることは、特に移動弱者である子ども世代、シニア世代にとって重要であり、そこにもまちライブラリーをはじめマイクロ・ライブラリーの社会的役割があると考えられる。書店や図書館を補完する地域の本のある場所が、単に本を提供する以上に人々の地域生活にとって重要であるという再認識が必要であり、それら場づくりは地域の人々が参加して形成することが大事であるという、社会的理解が必要である。

個々の人の感情を大切にしたい行動原理について、研究が積み重ねられている。本研究では触れることはできなかったが、個々の人が生き生きと生きるうえで前向きな感情が大切であることは言うまでもない。これら課題にどのように答えるべきかについてもいずれ考察を深めたい。そのために場づくりや人とのつながりに通じる理論的な側面からも研究できればと考えている。

このように本研究では、その理論的、哲学的課題にはほとんど触れることはできなかった。実践家としての筆者の限界を感じる。まちライブラリーを活用した研究には多岐にわたる課題があり、筆者一人で把握するのは困難である。専門性のある多くの研究者に探求してもらおうべく、研究フィールドを開放し、「まちライブラリー」の継続的な探求を続けていきたい。序章の本研究を始める動機にも記したように、身近な課題に挑戦する個人の力になり、制度に縛られない環境を大切にする社会の一助になれるように筆者自身もさらなる実践と研究に励んでいくことを誓いたい。

参考文献

邦文

- 天野正子（2000）「子どもの原風景と地域空間」藤竹暁編『現代のエスプリ別冊 現代人の居場所』至文堂、83 頁。
- 阿比留久美（2012）「居場所の批判的検討」田中治彦・萩原建次郎編著『若者の居場所と参加 ユースワークが築く新たな社会』東洋館出版社、35-51 頁。
- アレグザンダー、C. 平田翰那訳（1984）『パタン・ランゲージ ー環境設計の手引き』鹿島出版会（原著 1977）。
- アレグザンダー、C. 難波和彦監訳（1989）『まちづくりの新しい理論』鹿島出版会（原著 1987）。
- アンニョリ、A. 萱野有美訳（2011）『知の広場 図書館と自由』みすず書房（原著 2009）。
- 猪谷千香（2014）『つながる図書館：コミュニティの核をめざす試み』ちくま新書。
- 石井桃子（1965）『子どもの図書館』岩波新書。
- 石原浩二編（2013）『当事者研究の研究』医学書院。
- 磯井純充（2014a）「新時代におけるマイクロ・ライブラリー考察」『カレントアウェアネス』NO. 319、2-6 頁。
- 磯井純充（2014b）『マイクロ・ライブラリー図鑑』一般社団法人まちライブラリー。
- 磯井純充（2015a）『本で人をつなぐ まちライブラリーのつくりかた』学芸出版。
- 磯井純充、中川和彦、服部滋樹、トッド・ボル他（2015b）『マイクロ・ライブラリー：人とまちをつなぐ小さな図書館』学芸出版。
- 磯井純充他、マイクロ・ライブラリーサミット実行委員会（2016.3）『コミュニティとマイクロ・ライブラリー』一般社団法人まちライブラリー。
- 伊藤千晶、井上朝雄（2015.3）、「マイクロ・ライブラリーによる地域活性化に関する研究」『人間・環境学会第 22 回大会発表論文要旨 MERA』、第 35 号、30-31 頁。

- 稲葉陽二 (2007) 『ソーシャル・キャピタル ―「信頼の絆」で解く現代経済・社会の諸課題』生産性出版。
- 稲葉陽二 (2011) 『ソーシャル・キャピタル入門』中公新書。
- 稲葉陽二、大守隆、金光淳、近藤克則、辻中豊、露口健司、山内直人、吉野健三 (2014) 『ソーシャル・キャピタル きずなの科学とは何か』ミネルヴァ書房。
- ウエルマン、B 野沢慎司・立山徳子訳 (2006) 「コミュニティ問題 イースト・ヨーク住民の親密なネットワーク」『リーディングス ネットワーク論 家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房 (原著 1979)。
- 宇沢弘文 (1994) 『宇沢弘文著作集 第一巻 社会的共通資本と社会的費用』岩波新書。
- 宇沢弘文・茂木愛一郎編 (1994) 『社会的共通資本 コモンズと都市』東京大学出版。
- 宇沢弘文 (2000) 『社会的共通資本』岩波新書。
- 宇沢弘文 (2015a) 『宇沢弘文の経済学 社会的共通資本の論理』日本経済新聞出版社。
- 宇沢弘文 (2015b) 『岩波人文書セレクション ヴェブレン』岩波書店。
- 宇沢弘文 (2016) 『宇沢弘文傑作論文全ファイル』東洋経済新報社。
- 小田博志 (2010) 『エスノグラフィー入門<現場>を質的研究する』春秋社。
- エリアス、N. 著、シュレーター、M 編 宇京訳 (2000) 『諸個人の社会 文明化と関係構造』法政大学出版局 (原著 1991)。
- オルデンバーグ、R 忠平美幸訳 (2013) 『サードプレイス コミュニティの核になる とびきり居心地よい場所』みすず書房 (原著 1989)。
- 片岡亜紀子・石山恒貴 (2017) 「地域コミュニティにおけるサードプレイスの役割と効果」『地域イノベーション第9号』73-86 頁。
- コトラー、F ロベルト、E.L 井関利明訳 1995『ソーシャル・マーケティング 行動変革のための戦略』ダイヤモンド社 (原著 1989)。
- 川崎良孝 (2016) 「ウェイン・A・ウィーガンドと文化調整論 図書館史研究の第4世代」『図書館界』63、200-214 頁。
- ギブソン、J.J 古崎敬訳 (1985) 『生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探る』

- サイエンス社(原著 1979 年)。
- 紀平英作(2017)『ニュースクール 20 世紀アメリカのしなやかな反骨者たち』岩波書店。
- 久野和子(2010)「第 3 の場としての図書館」『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』9:109-121 頁。
- 玄光社 MOOK (2012) 『TOKYO 図書館紀行』玄光社。
- 国土交通省(2003)『参加型まちづくりに関する現状と課題』国土交通省。
- 小林重人・山田広明(2014)「マイプレイス志向が共存するサードプレイス形成モデルの研究：石川県能美市の日常設型『ひよこりカフェ』を事例として」『地域活性研究 5』3-12 頁。
- 小林重人・山田広明(2015)「サードプレイスにおける経験がもたらす地域愛着」『地域活性研究 6』1-10 頁。
- 小林重敬編著(2015)『最新エリアマネジメント 街を運営する民間組織と活動財源』学芸出版社。
- 小林重敬+森記念財団編著(2018)『まちの価値を高めるエリアマネジメント』学芸出版社。
- 小松尚(2010)「居場所が変える都市と建築」日本建築学会編『まちの居場所 まちの居場所をみつける/つくる』東洋書店 174~179 頁。
- 小松尚(2019)「まちの居場所としての公共図書館」日本建築学会編『まちの居場所 ささえる/まもる/そだてる/つなぐ』鹿島出版会 116-128 頁。
- コルヴィジェ、L 坂倉準三訳(1968)『輝く都市』鹿島出版会(原著 1947)。
- 齋藤純一(2000)『思考のフロンティア 公共圏』岩波書店。
- 汐崎順子(2007)『児童サービスの歴史』創元社。
- ジェイコブズ、J 山形浩生訳(2010)『新版 アメリカ大都市の死と生』鹿島出版会(原著 1961)。
- ジェイコブズ、J ジップ、J、シュテリング、N 編、宮崎洋司訳(2018)『ジェイン・ジェイコブズ都市論集』鹿島出版会(原著 2016)。
- 鈴木毅(2019)「当事者による場づくりの時代」日本建築学会編『まちの居場所 ささえる/まもる/そだてる/つなぐ』鹿島出版会 35-42 頁。

- 園田聡 (2019) 『プレイスメイキング アクティビティ・ファーストの都市デザイン』学芸出版社。
- 坂和章平 (2017) 『まちづくりの法律がわかる本』学芸出版社。
- 佐伯 胖 (1995) 『「学ぶ」ということの意味』岩波書店。
- 佐々木正人 (2008) 『アフォーダンス入門—知性はどこに生まれるか』講談社 学術文庫。
- 清水博 (2003) 『新装版 場の思想』東京大学出版会。
- 住田正樹 (2003) 「子どもたちの『居場所』と対人的世界」住田正樹。南博文編『子どもたちの「居場所」と対人世界の現在』九州大学出版会。
- 橋弘志 (2010) 「居場所にみる公共性」日本建築学会編『まちの居場所』東洋書店, 180-206 頁。
- 田中瑞季・梅崎修 (2012) 「地域コミュニティにおけるソーシャルキャピタル—神楽坂地域の喫茶店を事例にして—」『地域イノベーション 第5号』9-20 頁。
- 内閣府 (2015) 『国土形成計画に関する世論調査』内閣府。
- 内閣府 (2019) 『社会意識による世論調査』内閣府。
- 中島直人・村山顕人・高見淳史・樋野公宏・寺田徹・廣井悠・瀬田史彦 (2018) 『都市計画学 変化に対応するプランニング』学芸出版社。
- 永田治樹 (2014) 「公共図書館とコミュニティ：知識・情報伝達と人びとをつなぐ」『情報の科学と技術』64、10、388-394 頁。
- 西尾安裕 (2016) 『ラブリバー運動の軌跡 1973-2016 ラブリバー多摩川を愛する会の記録』ラブリバー多摩川を愛する会。
- 萩原建次郎 (2012) 「近代問題としての居場所」田中治彦・萩原建次郎編著『若者の居場所と参加』東洋館出版社。
- 橋爪紳也 (2015) 『ツーリズムの都市デザイン 非日常と日常の仕掛け』鹿島出版会
- パットナム、R. D 柴内康文訳 (2006) 『孤独なボウリング —米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房 (原著 2000) 。
- ハーバマス、J 細谷貞夫・山田正行訳 (1973) 『公共性の構造転換』未来社 (原著 1962) 。

- ハワード、E 山形浩生訳 (2016) 『明日の田園都市』鹿島出版社 (原著 1902)。
- フリック、U 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳 (2002) 『質的研究入門 <人間科学>のための方法論』春秋社 (原著 1995)。
- フロリダ、R 井口典夫訳 (2008) 『クリエイティブ資本論 新たな経済階級の台頭』ダイヤモンド社 (原著 2002)。
- ベネヴォロ、L 横山正訳 (1976) 『近代都市計画の起源』SD選書 鹿島出版会 (原著 1963)。
- 久田邦明 (2008) 「地域活動としての居場所づくり」『神奈川大学心理・教育研究論集』27:65-76 頁。
- 前川恒夫・石井敦 (2006) 『新版 図書館の発見』日本放送出版協会。
- 三森弘 (2017) 「民間図書館の開設経緯からみたソーシャル・キャピタルの形成に関する研究」、『日本建築学会論文集』第 82 巻第 732 号 393-402 頁。
- 三友奈々 (2015) 「プレイスメイキングの定義・原則と場の評価項目に関する考察 プロジェクト・フォー・パブリックスペースによる原則と指針を通して」『日本デザイン学会 デザイン学研究』62 33 頁。
- 南出吉祥 (2015) 「『居場所づくり』実践の多様な展開とその特質」『共同の社会システムと<場>の形成』社会文化研究第 17 号 69-90 頁。
- 宮崎洋二・玉川英則 (2011) 『都市の本質とゆくえ Jジェイコブズと考える』鹿島出版会。
- 本柳亨 (2013) 「ファストフード店の利用者に関する考察 ―サードプレイスを目的とした利用者の分析を中心に―」『学習院女子大学 紀要 第 17 号』163-176 頁。
- ランドリー、C 後藤和子訳 (2003) 『創造的都市』日本評論社 (原著 2000)。
- リンチ、K 丹下健三・富田玲子訳 (1968) 『都市のイメージ』岩波書店 (原著 1960)。
- レヴィン、C 猪股佐登留訳 (2017) 『社会科学における場の理論』ちとせプレス (原著 1947, 1951)。
- 柳与志夫 (2015) 『文化情報資源と図書館経営』勁草書房。

山田広明・小林重人（2016）「個人志向と社会志向が共存するサードプレイスの形成メカニズムの研究」『情報処理学会論文誌 Vol. 57 No. 3』897-909 頁。

吉村輝彦（2018）「公共的空間の日常に根ざした利活用による地域づくりの推進～東海市太田川駅前広場における「まちなかピクニック」の実験的な取り組みから～」『日本福祉大学経済論集』（57）2018-09-30、23-58 頁。

英文

Adams, T. E., Jones, S. H., and Ellis, C. (2015) *Autoethnography* :Oxford University Press.

Aldrich, M. (2015) *The Little Free Library Book* :Coffee House Press.

Putnam, R. D. and Feldstein, L, (2003) *Better Together: Restoring the American Community* :Simon & Schuster Paperbacks.

Sassen, S. (1991) *The Global City New York, London, Tokyo* :Princeton University Press.

謝辞

本研究にあたっては、多くの方々にお世話になりました。特に橋爪紳也先生には、本研究のテーマであるまちライブラリーが、形になる前からそのコンセプト、名称等について多大なご助言をいただきました。また、大阪府立大学 I-site の設置前から橋爪先生のお導きで、当時の公立大学法人大阪府立大学の前理事長・学長の奥野武俊先生とお引き合わせいただき、I-site にまちライブラリーが設置できました。奥野先生には、大学院で研究をし、博士論文にまとめることを力強くご助言いただきました。奥野先生に背中を押していただかなければ今回の研究は始まらなかったと思います。深く御礼申し上げます。

大学院入学後は、上村隆広先生、花村周寛先生、天野景太先生に懇切丁寧にご指導、ご助言をいただきました。誠にありがとうございました。また辻洋元理事長・学長をはじめ大阪府立大学の多くの先生方、職員の皆様、大学院社会人学生の皆様の励ましとご支援があつてまとめることができました。

さらには、本件の柱となっている全国のまちライブラリーの運営者、利用者、ボランティア、スタッフの皆様にも御礼申し上げます。皆様のお力がなくては、成り立たない活動でありました。アンケートやヒアリングにおいて気づき得ないような視点や感想をたくさんいただき、本研究の柱となっております。

本論文にも書きましたが、学生時代から地域コミュニティの活動にいざなってくださった西尾安裕さん、企業人としても人生の先生としても背中を仰がせていただいた森ビルの故・森泰吉郎創業社長、故・森稔社長をはじめ現在、所属している森記念財団の小林重敬理事長にも多くの機会と寛大なるご配慮があつて研究ができたと深く感謝申し上げます。

またまちライブラリーができる前から支えてくれていた「サードプレイス研究会」の皆様やその後のまちライブラリー立上にご協力をいただきました里形玲子さん、友廣裕一さん、早稲田大学の友成真一先生にも御礼申し上げます。さらに本論文をまとめるにあつてデータの整理や文言の助言をいただいた安木由美子さんや鈴木史朗さんにも深く感謝申し上げます。